
En-gi

悟

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

En - gi

【コード】

N4985E

【作者名】

悟

【あらすじ】

「楽」という国に現れた仙人の戦士『仙士』の物語

始まり

なんで……？

目の前の光景が信じられない。

ボクはなんの抵抗も出来なかった。

いつもの通りの夜……の筈だった。

師匠を相手の稽古も終わり、食事を作りながら兄弟子達を待っている、

「斜緒奈様！」

異変を告げる風仙界の仙人が駆け込んできた。

「宝聖殿に侵入者がっ！」

それを聞いて飛び出して行く師匠達。

「あ、ちよつと」

ボクは食事を作りかけていたが、ひとまず火を止めて遅れてついていった。

宝聖殿。

ボク達の住む風仙界の政治文化の中心、『風月』

そこにある風仙界の仙具が収められている宝聖殿。

警備も当然厳しい。そこに侵入者なんて。

警備兵も一流の仙士達。それなのに、師匠を呼びに来るなんて。

胸騒ぎと期待が入り混じる胸中を抱えて後を追う。

「っ」

血の匂い。

いつもは博物館としての顔の宝聖伝。

しかし、今、辺りには血に塗れた警備兵が倒れている。
思わず口元を押さえる。

微かにでも動いていれば助けを呼ぶが……。
鉄の匂いがボクをこの場から遠ざけようとする。
それに動かされて倒れている警備兵を避けて入り口に立つ。

煌く閃光。

「流石、風仙界に射緒奈あり。と謳われるだけの事はある」
「何をっ！」

師匠が二人を相手に戦っている。
入り口から一步も入れない。

師匠の闘気と初めて見る実戦の戦慄とで体が動かなくなる。

「まだ居たのか？」

戦い中から声が聞こえた。

薙刀を持った男がボクと目が合う。

「史紀しきっ！」

「え」

師匠の声と男の手に持った薙刀が同時に体に届いた。

その瞬間に、風を感じ力が抜けた。

膝から地面に落ちていく体。

「余所見……したらこうなるって分かってるだろう？」

師匠の体から刃が突き出る。

「まったく、手を焼かせてくれる」

ボクの上から聞こえる声。

「仕方ないさ。相手は風仙界最強だ。二人がかりでやっとの相手だ」

「ま、そうか」

師匠は倒れたまま動かない。

それでも目に映る光景。

師匠の周りにも何人も倒れている。

彼らは誰一人、動くことはない。

「さて。これで」

「障害は無いな」

「ふむ。終わってみると案外簡単なものだな。才蔵さいぞう」

「終わるまで気を抜くなよ比奈人ひなひと」

掠れる意識の中、暗闇に消える直前の二人を睨みつける。

師匠達を避け更に奥へと向かう二人。

覚えてろよ……お前等は絶対にボクが……。

気が付いたらボクは病院のベッドの上。

体調は少し戻ったが体は動かず、警察や政府。それに兄弟子から事情を聞かれていた。

あそこで何が起こったのかは知らない。

築いたらここに居た。とそれだけを繰り返し話していた。

それから、また一月。

傷も癒えて家に戻った。

師匠から頂いた飛盾ひじゆん『箒星ほうせい』

兄弟子が師匠の後任に付く為の手続きで留守の時、ボクは箒星を手に風仙界から飛び出した。

史紀参上

「ん」

嫌な夢を見た。

薄く目を開け、目の前の壁を見る。

この夢を見るときは決まって、

「お客さん！ お客さん！」

ドンドン、とドアを叩く音と慌てた怒声が聞こえる。

「何？」

不機嫌なボクの声がかき消される。

「お客」

その声が突然消えた。

「なんなのよ？」

ベッドから降りて、ドアに向かおうとしていた所で、

「あれ？」

窓の外が明るい。

時計は午後十二時前。間もなく日が変わる時間なのに明るい。

「ん〜？」

ボクが状況を確認しようと考えていると、一、二……五人の武装した男が入ってくる。

「まったく。夢の所為だ」

あの夢を見るといつも面倒な事が、嫌な事が起こる。

ボクの呟きが聞こえたのか、怪訝な顔をする男達。

「お前一人か？」

「見て分からない？ 六人いるでしょ？」

「他の連中はどこに？」

「分かんないの？ ボクでしょ、次に」

乱入者達を順に指差す。

「分かった？」

「バカにしているのか!？」

「してないよ。正直に答えただけ」

とりあえずボクは荷物を取りに行く。

「動くな!」

「なんで?」

男を睨む。見たくない夢と叩き起こされたせいで苛立ちが声に乗る。

ボクの言葉に反応した男が一人、ボクの首筋に刃が突きつける。

「生意気な小僧だ! その首を」

言い終わる前に、ボクが男の鳩尾に肘打ちを入れる。

声もなく倒れる男。

「小僧! 何を!」

「誰が小僧だつ!」

向かってくる男を一人殴り倒し、蹴り倒す。

二人倒した所で男達が間合いを取る。

男達を見ながら、鞆を蹴り上げ両手で取って、盾を取り出す。

「まったく」

鞆を背負い、盾を装着。

「余計な手間をかけさせてくれる」

ドアの前に立っている男に狙いを定めて、

「邪魔っ!」

間合いを詰める。

慌てて突き出した槍を左に避けて、顎に裏拳。

残る二人が攻めてくる。

「なんなのよっ!」

左腕に装着した箒星が輝く。

一人の槍をそれで受け止め、もう一人の突きを避け足を払い体勢を崩させて、

「退けっ!」

背中に一撃。

箒星を挟んで男と睨みあう。

ぎりぎりと押しこくる。

すっと、後ろに飛んで間合いを開ける。

「アホ」

ボクが後ろに飛んだから男は体勢を崩す。

足を蹴り上げ、それで終了。

「ボクのどこが小僧なんだ」

洗面所の鏡に映るボク。

青い髪のショートカット。まっすぐにボクを見つめる鏡のボクのはきはきと輝いている。

「に」

笑うと白い歯がこぼれる。

「この顔のどこが小僧なんだ」

いつも通りの可愛いボクが鏡の中で微笑んでいる。

まったく、見る目がないんだから。憤慨しながらも帽子を被る。

「よし」

倒れた男達を跨いで、一張羅のジャージを羽織りバッグを持って部屋を出る。

出会い

ホテルを出ると、あちこちで悲鳴と怒号。それと火が燃えている。この街に着いた時は、陽も高く観光客らしい人たちがアチコチ見えていた。

ボクが泊まっていたホテルの近くには桜の名所があるらしいが、今は赤く燃え上がっている。

「な、何？」

昼と今の変貌振りに驚いたが、すぐに事態を理解した。

あの時と同じ。胸が痛く、心がざわつく。違うのはそれが大勢の襲撃だ、という事。

近くにたむろっている盗賊の襲撃かと思ったが違う様だ。

やっていることは盗賊そのものだが、ある程度の訓練を受けている様にも見える。

「まだ、居たのか？」

市民を追いかけていたのかそれとも火事場泥棒をしていたのかは分からないが、数人の男達がボクに気付いた。

「何？」

目の前に男達が立ち塞がる。

「持っている物を」

「うるさい」

脛を蹴り上げる。

そのまま立ち去ろうとするが、

「待て！」

「何！」

振り返り様に、左腕で裏拳。

外れても良かったのだけど、当たった。

ついでな。今日は。

「貴様っ！」

でもないか。状況が状況だし。

「油断してたコイツが悪い」

「我らが『跋維党』^{ばっいとう}に手を出しておいて」

白壁……？

「あゝ。ゴメン、知らない。じゃ」

「待て！」

「何！」

いい加減、……いらいらして来た。

「ボクになんの用があるの？」

「持っている物を大人しく置いていけ。そうすれば命は助けてやる」

そんなの、

「いや」

「それならっ！」

「痛い目見せて分からしてやるよっ！」

箒星を戦闘体勢に移行。

目の前にいる男達の動きを見定めて、近い所から倒していく。

受けては引いて、避けては打つ。

ずっと構えて、男達を見る。

この中で、一番偉いのを探す。

いた。アイツかな。

ソイツに向き直って、

「まだ、分からない？」

ボクに気圧されたのか、黙っている。

「余計な体力を使わせないでよね」

ふう、と息を吐いて呼吸を整える。

歩き出したボクの後ろには倒れた男達が炎に照らされていた。

燃える町。逃げ惑う人達。

電線が燃えてショートして道に火花を散らし、ガラスが炎に溶けて

割れる。

ボクに気付いた盗賊共が、お約束通り向かってくる。それも鬱陶しい程に。

「うっとうしいーわあっ!!」

何人目かは知らない盗賊を放り投げる。箒星を使った事をちよつと後悔している。

箒星を使って戦うと体力を使う。

その消費量は使う時間に比例する。

あの程度なら、どうって事ない筈なんだけど。

「ちよつと、怠けすぎたかな」

日頃の鍛錬不足を今嘆いてもしょうがない。

明日からやるか。と、決意を心に誓う。

「またか」

前から走ってくる子供。

その後ろには盗賊が追ってくる。

「あ」

ボクに気づいて立ち止まって右左と確認している。

失礼な！ ボクがアイツ等と同じに見えたのか!?

立ち止まっても後ろからは追ってくる。

「助けてっ!」

ボクの優しい顔に気づいて、助けを求めてくる。

正直、面倒なんだけど。

子供はボクの答えを待たずに後ろに回りこむ。

「お願いします」

「されてもなあ」

もう、どうしようもないじゃない? この状況は。

当然、盗賊達はボクに向かってくる。

「はあ~~~~」

深いため息と共に、向かってくるやつ等を殴り飛ばす。

「強……」

僕の後ろに隠れている子供がそう呟く。

「当然だ。ボクは『仙士^{せんし}』なんだから」

最後の一人を殴り飛ばして、振り返る。

「で、ここから一番近い町の出口はどこ？」

「あ……あっち」

指差す方を見つめる。

「そう、ありがと。気をつけてね」

この状況で何に気をつけなければならないのか？

言った自分でも分から

ないが。

子供は、

「ありがとございます」

礼儀正しくそう答えた。

街

盗賊達はもう引き返したのか、すっかり出てこなくなった。

夜空を焦がす炎、星月を覆う黒煙。

所々で爆発音が聞こえる。

それなのにサイレンが聞こえてこない。

この町の消防機能は完全に麻痺している様だ。

治安維持組織が壊滅状態だし。

横を見れば大きな建物。

看板には『間連警察署』まれん

四階建ての建物の窓から炎がガラスを割り、その姿を表している。

「なんか用？」

後ろを振り返る。少し怒気を含んで言い放つ。

あの子供がついて来ている。

何が用なのかは聞かなくても分かるが、そう言いたくなる。

ビクツとしてボクを見つめる。

「えっと、そのお」

顔を伏せて答えを探している様だ。

見た感じ。大人く賢そうな印象を受ける顔。

この状況でも慌てる事無く冷静を保っている。

寝ているところだったのか、パジャマ姿の子供。

いや、予測していないから頭が回らないのか。

「何？」

ついて来るって事は、親も盗賊に襲われたんだらう。

行く当てがない。だからボクについてくる。

ここに一人で残ってもどうにもならないって事は理解している。

「言いたい事はつきり言え」

「助けてくれてありがとうございました」

ぺこり、とお辞儀する子供。

意外な言葉が返ってきた。

「あ。いや、別に大した事は……してないし」
まっすぐな目。見た感じお坊ちゃんの雰囲気を持つ子供の態度に、思わず照れてしまった。

横を向いて、頬をぽりぽりと搔いて歩き出す。

今度はボクの横で話し出す子供。

背はボクより少し高い。それが妙に腹立つ。

その怒りが自分の小ささを思い知らされる事に気付いて、ため息を吐く。

子供の話は予想通り、親が襲われ、必死に逃げていたらボクに会い、

「それで、僕も帰る所無いし……」

「連れて行けって？ 悪いけどボクも目的があるし」

「あ。『夕音』に親戚がいるからそこまで」

「夕音？ どこ？」

「ここから西に車で四、五日行った所ですけど？」

ピンと来ない。

そりゃそうだ。結構長い間旅してきたけど地名を覚えようと思った事は無い。

子供が僕を怪訝そうな顔で見る。

「何？」

「失礼ですけど……この国の人じゃあ」

「違うよ。ボクは仙士だって。さっき言わなかった？」

「聞きましたけど、仙士って何ですか？」

「簡単に言うと戦闘専門の仙人。仙人の戦士」

「じゃ、仙人様なんですか？」

子供の目が尊敬に変わる。

「まあね」

「何をしにいらっしやったんですか？ まさか、あの跋維党と戦いに？」

憎しみと悲しみが混ざった様な赤い目でボクを見る。

その目にボクは耐え切れずに、逸らして、

「違うよ」

とだけ答えた。

「じゃ、何しに」

「それは、お前には関係ない事だ」

冷たい言い方だと自分でも思う。

それっきり黙り込む。

この空気に耐え切れなかったのはボクだった。

「仙士を探してるんだ」

町を出る頃に呟いた。

「仙士、ですか？」

「ああ、ソイツには返さなきゃいけない借りがあるし」

「そうですか。その聞いてもいいですか？」

「何？」

「仙人様って何人もいるんですか？」

「結構居るんじゃない、六仙って分かる？」

「はい。火、水、地、風、時に冥。ですよ」

「そう。詳しい数は知らないけど、千二百万ちよいはいるんじゃない？」

「そんなにいるんですか？」

「ボクは風仙だけど、二百万位居るって聞いたことあるけど。だからそれかける六で大体そんなトコじゃない？」

「じゃ、こっちって言うのかな。に来てるのは？」

「さあ？ そんなのは知らない」

「探してる仙人様が居るかどうかも分からないのに探してるんですか？」

「そ。じっとしてるのは性分じゃないし」

「スゴイですね」

「そうかあ？ そんな事ないと思うけど」
「僕には出来ないですよ。あ」
「どうした？」
「まだ、名前言ってますませんでしたね」
「いいよ、別に」
「由宇ゆづって言います。仙士様は？」
「仙士様と呼べ」
「お名前教えてくださいよ。僕は名乗ったじゃないですか？」
「うるさい」
「教えてくださいよ。ね」
「ボクの前をちよろちよろと動き回る。」
「うるちよろ、邪魔だっ！」
「ね。仙士様」
「手で払っても怯まない。」
「史紀！ これでいいか！」
怒鳴る。なぜ怒鳴ったのかは自分でも分からない。
「史紀様ですか。いいお名前ですね」
「そう言われると……正直照れる。」
「うるさい！ さっさと行くぞ！」
ちよつと赤くなった顔を隠して由宇を置いて歩いていく。

丘の上

街から少し離れた小高い丘の上。夜空を焦がし続ける街を見下ろす。

辺りには人の気配も無く、二人で炎を見つめている。

「……行きましようか」

由宇が街に背を向ける。

ボクは掛ける言葉が見つからずに歩き出していく由宇の背中を見つめる。

「しかし、隣町のやつ等。助けにも来なかったな」

沈黙に耐え切れないボクの心が口を動かす。

「この辺り、一体が襲わたんだと思います」

「なるほど。他に構ってる余裕はないって事か」

それほど大規模な事が出来るならあの統率にも納得。

「おそらくは」

「政府は？」

「跋維党はこの国『楽』^{らく}全体に広がってますからね。一地方に構ってられないんでしょう」

その声には、政府に対する侮蔑と諦めが感じられた。

と、同時にその白壁党ってのはかなり大規模な組織だと知った。

「じゃ、夕音に行くまでにも」

「戦いはありそうですね」

当然ボクは車を持っていない。それは由宇も同じだった。

街には何台かあったがボクは乗れない。由宇に聞いたなら「乗れない」と言っていた。

だから、ボク達の移動手段は徒歩になる。

自転車があり乗っていいこうとしたら由宇が、

「駄目ですよ」

と、冷たい目で言われたので、

「冗談だよ」

と、目を逸らしつつ乗りかけた自転車から降りた。

歩き出したボク達の目の前に一人の男が立ち塞がる。

長身、夜に映える白いコート。盗賊にはもつたいない男前。ボクは由宇の前に立つ。

白い槍を携え、まっすぐにこっちを見据えて立っている。

跋維党だなんて御大層な名前を使っているがやっている事は盗賊と一緒にだ。

そんなやつ等の仲間にしては勇敢だな。コイツがホントのリーダーか。

「何者か？」

すつと槍を構える。

「そっちは？」

ボクも構える。

距離は十歩。

空気が張り詰める。街に居た盗賊達とは格が違う。

これは、ボクも気合を入れないと。

スツと腰を落とし、ボクから仕掛ける。

踏み込む音さえ聞こえずに突き出される槍を右に避ける。

右手で槍の軌道を変えて、踏み込む。

「ふっ」

反転して盾の一撃。

なんの感触もなく振りぬかれた左手。

しゃがんだ相手が下から突き上げてくる。

空中で強引に後ろに反り返る。

足で相手を押して、間合いを開ける。

時間を掛けるとコイツの仲間が来るしな。
しょうがないな。再び構える。
違うのは箒星を起動した事。

「ん？」

輝く箒星を見つめる男。

視線が箒星に集中した。

その隙を逃さず、間合いを詰める。

突き出すが、さっきより速くない。

その切っ先を避け、一步踏み込んで箒星で槍を押さえ更に踏み込む。
槍の柄の上を滑る箒星。

ボクの間合いに届く直後に、男も体勢を直し槍を払う。

しゃがんで避け足を払う。

後ろに飛んで避ける男。

払われた槍、一步飛んで更に下がる。

ボクは左腕を構え、

「飛べ！ 箒星！」

ボクの言葉に反応して箒星がまっすぐ男に向かって飛んで行く。

「……！？」

驚く男。

槍で払おうとするが、箒星はそれを避け男に向かう。

箒星を避け、体勢を直してボクに向き合う。

が、ボクは男に追いついた。

男に一撃食らわして、追い討ちをかける。

「ま」

何か言おうとしているが、聞く訳がない。

男の後ろから箒星が飛来する。そして、直撃。

「さて、行こうか」

隠れていた由宇に声を掛ける。

森の中

男との戦闘の後、少し先にある森の中に入り一休み。

「はあ、つつかれた」

木に凭れかかり、体を伸ばす。

「あの……さつきのは？」

「盗賊のリーダーじゃないの？」

「じゃ、なくてその」

由宇が指差すのはボクの左手。

「ああ、これ？」

「なんか、不思議な？」

「不思議って」

まあ、そう見えるだろうけど。

「これは『仙具 箒星』五仙界でも珍しいのよ」

由宇は正座して聞いている。

その姿になんとなく、講義している気になってきた。

「飛盾ひじゆんって言って風仙界が一番使ってるの。射出してからもある程度は軌道を操れるの。当然、修行が必要だけど」

「凄いですね」

「凄いの。間違いなく。もっとランクの高いのになるといくつかの飛盾を扱う事も出来るの」

「へ」

由宇の羨望の眼差しが気持ちいい。

「動力はなんですか？ 仙具に込められてるんですか？」

「仙具の動力はその使い手の体力なの。状況の応じて威力を変えるが基本ね。一撃必殺で勝負するのは危険だし」

「ここぞ、という時だけですか」

「そうね」

「へ」。なるほど」

「あ、言つとくけど誰にも言っちゃ駄目よ。ボクが仙士だったのも、面倒な事に巻き込まれるのはヤだし」

「はい。分かりました」

焚き火を囲み、ぼんやりしていると眠くなってきた。

「時計持ってる？」

「はい。持ってます」

「じゃ、ボクは休むから一時間たったら起こして」

「分かりました」

ゆさゆさ、とボクの体が揺れている。

遠くで声が聞こえる。ボクの体内時計によればまだ、一時間経っていない筈。

ゆさゆさからがたがたへと揺れる力が大きくなってきた。

「おい！ 起きろ！」

耳元で怒鳴る声。

「おい！ 起きっ！」

「うるさいわっ！！」

左手を突き上げる。

見事ヒット。

「あ、おはようございます」

「おはよう……あれ？」

由宇は焚き火の前に座っている。

ボクの横に倒れているのは、

「誰？」

顔を見る。

「あっ！」

さっきの盗賊！ とりあえず凭れていた木に縛り付けておく。

で、距離を開けて、

「由宇」

「はい！」

「事情……を説明してくれるかな？」

努めて優しく語り掛ける。

「えっと、五分位前に来て、それで自分は盗賊じゃなく水仙界から来たと」

「水仙？」

縛り付けた男を見る。

「マジで？」

男を見る。

当然、見て分かる訳がない。

「由宇、人を見た目で判断するのは良くない事よ」

「……はあ」

「じゃ、ここから離れよう。この場所がバレたとなると安心して寝れないし」

荷物を持って立ち去ろうとすると、

「おい！ ちょっと待て！！」

男がタイミング良く目を覚ました。

「何？」

縛り付けてあるのでこっちが有利だが、一応距離を取る。

「お前も仙士か？」

「そうだと言ったら？」

「すまなかつた。こっちの勘違いで矛を向けてしまった」

縛れたまま、頭を下げる男。

「分かればいいのよ。じゃ」

「ちよちよちよちよ。待て」

「何よ？」

「行くのならこれを解いてから」

「嫌よ。じゃ」

「ちよちよちよちよ。待て……睨むなよ。とりあえず、名乗らせて貰う。私は『久遠水仙界の仙士』だ」

「あ、そ」

「君は？」

「さあ？」

答える義務など無い。

「史紀様」

「様はやめる」

「史紀、と言うのか？」

この、

「痛っ」

勝手に答えた由宇の頭を叩く。

「で、水仙の久遠サンが何だっただ盗賊の仲間になってるのかな？」

「勘違いだと言っただろう」

「だから、アンタが盗賊やってたって事のどこが勘違いなのよ。現にボク達を襲っただじゃない」

「いや、すまなかった。私も君を盗賊と思ったんだ」

「え、ボク？」

頷く男。

「こつちじゃなくて？」

由宇は困った様に微笑んでいる。

「行くよ。由宇」

夜明け

久遠と名乗る男と話している間に、殺気を感じた。

「おい。ここを囲んでいるやつ等はお前の仲間じゃないのか」
縛り付けた男を見る。

「何度も言ってるだろう。水仙の仙士たる私が盗賊に加担する訳ない」と

男もこつちを見返す。

「由宇、解いてやって。それからボクから離れるな」

「はい」

由宇が男を解放している間に、

「追いついたぜ」

ぐるり、と囲まれている。

数は……二十位かな。

「よくも、仲間を」

横の男が話している間に、水仙の男が立ち上がり、一突き。

引いた槍で近くの盗賊も薙ぎ払う。

くるくると槍を回し、構える。

「まだ、私を盗賊と疑うのならこいつ等を追い払うことで、違う事を証明しよう」

剣を避け、槍を避け、次々と突き倒し、薙ぎ払う。

「強いですね」

後ろにいる由宇がその動きに賛辞を送る。

ボクは答える事無くその姿をじっと見つめる。

「これで、証明出来たかな」

息を切らせる事無く、盗賊を打ち倒した。

「さあ、どうだろ？ 地方部隊の更にその小隊倒した程度の事で疑いが晴れるとも思ってるの？」

話そうとする由宇を睨む。

「史紀さ……ん」

「疑り深いな」

苦笑する男。

「久遠さんが一民間人の僕達を騙す理由なんて無いでしょう」

「アンタはそうだけど、ボクは違う」

「史紀さ……さんが仙士だなんて向こうは知りませんよ」

そつと耳打ちされる。

言っでなかつたのか。そうになると、なるほど。一理ある。

「じゃ、コイツはホントに水仙って言いたいの？」

「それは、僕に証明出来ませんが。仙士同士で通じる物って無いんですか？」

「それならこれだ」

槍を差し出す。

「何？」

「それならこれで証明しよう」

槍を掲げる。槍は白く輝き始める。

徐々に切っ先は鋭くなり、白く輝いていく。

「これで、証明出来たかな」

槍を下ろすと、輝きは無くなりただの白い槍に戻る。

人間界にはこんな武器は無いだろう。

「ま、アンタが仙士だったのは分かった。一つ聞いていい」

「何だ」

「才蔵って知ってる？」

「『冥仙』めいせんだと言う事と名前位しか知らないな」

ボクと同じ事しか知らないか。

「今、どこに居るのか分からない？」

「そこまでは」

「そう、ありがと。疑って悪かった」

ぺこり、と頭を下げて由宇の手を引いて歩いていく。

「え、あ。ありがとうございます」

「気にするな。縁があつたらまた会おう」

その声を後ろに聞いて森の中を進んでいく。

「この道をまっすぐ行けば『穂乃差』の街です」

夜明け前の街道を歩いて行く。

「お。日が昇る」

東からの光。少しその光景を眺めてから歩き出す。

「どの位歩けば、その街に着くの」

「そうですね、昼前くらいには」

「ふ」

その歩く時間にため息が出る。

「行こうか」

まっすぐに伸びる街道を恨めしそうに眺めるボク。

跋維党から奪った上着を羽織った由宇と二人、てくてくと街道を歩く。

ボク達の後ろから白み始めた夜空が道を照らし始める。

「眠」

「ちよつと休憩しましょうか？」

「さんせうい」

街道脇に座り込み、バッグに凭れる。

「疲れた」

由宇は寝転がり空を見つめる。

「ちよつと寝たら？ アンタ寝てないでしょ」

「いえ。眠くないんで」

まあ、そうか。数時間前にはあんな事があつた訳だし。

「そう。それなら陽が昇るまではこうしていよう」

バッグを枕に目を閉じる。

熟睡する訳にはいかないが、少しでも由宇を休ませてあげたい。

陽も昇り、再び歩き出したボク達。

当然だが時間が経つほどにペースは落ちる。

「大丈夫？」

後ろを歩く由宇を待つ。

「はい」

とは思えない顔。

蓄積された疲労と履き慣れない靴の痛み。

ちなみに今、由宇が履いている靴は夕べの跋維党の物だ。

「休むか」

「いえ。もう少し」

ボクを追い越して歩いていく。

先ほどは、「まだ大丈夫」と言っていた。

余裕が無くなって来たな。

ふう、とため息を吐いて由宇を追い越して、その前でしゃがむ。

「なんですか？」

「おんぶしてやる」

きよとんとしている内に由宇をおんぶする。

「え、ちよっと」

「うるさい。この方が速く歩ける」

もがく由宇を背中に乗せて歩き出す。

「平気ですから」

「うるさい。喋るな」

手を突いて抵抗する由宇。

それも少しの時間だけだった。

今、由宇は静かに寝息を立てている。

「それ見ろ」

ぼそつと呟く。

聞こえやしないかと、ひやひやしたのは何故だ？

穂乃差へ

由宇をおぶって歩き続ける。

これも修行、と心の中で唱えつつも歩き続ける。

陽も高く上り、頭上からボクを苛めるかの様に照らしつけてくる。

「お」

前方から数台の車がやってくる。

混ぜ、行き先が違うから止める事も無いな。

ボク達の行き先は車が来る方なんだから。

そう思っていたら車がボクの行く手を阻む様に止まる。

「おい。君達は何者だ？」

一人が降りてきて、警戒しながらボク達の前に立ち塞がる。

残りの車からは武装した男達が隙を窺っている。

「旅人」

横を抜けようとするが、

「待て」

肩を捕まれ、ぐいっと引き戻される。

それで由宇が起きた。

「何？」

寝ぼけた由宇がきよろきよろとしているのが背中越しに伝わる。

ボクは疲れたのと、空腹で文句を言う体力が無い。

「君達は何者だ」

さつきと同じ質問。

「僕達は間鍊から」

寝起きの由宇が寝ぼけた声で答える。

「間連から!？」

寝ぼけた由宇に代わってボクが説明する。

間連が襲撃された事。そして、由宇と二人でいる事を。

「事情は分かった。私達はこのまま間連に向かう。君達は来るまで

穂乃差に向かうといい」

一台の車にボク達を乗せて、残りの車はボク達の歩いてきた方へと走り去って行った。

穂乃差到着。そして、警察でも同じ話を繰り返す。

その間、ボクはじっと耐えていた。空腹に。

「由宇、夕音の親戚に連絡しなくていいのか？」

警察署から夕音の親戚に無事の連絡を入れて、外に出る。

外はすっかり赤く染まっている。

「とりあえず、泊まるトコを探そう。歩き疲れた」

「そうですね……ってお金は」

「あるよ。ほら」

財布を由宇に渡す。

「どうしたんですか？ このお金」

「盗賊共から奪った立派な戦利品」

「え」

由宇の顔が青ざめる。

「嘘だよ。仙界から出てくる時にちよつと持って来たの」

「仙界のお金ってこつちと同じなんですか？」

「同じ訳無いだろう。金を持ってきて換金したの」

「本当ですか？」

「当たり前だ。盗賊なんかと一緒にするな」

ボクを見る由宇の目が猜疑に満ちている。

「分かった。お前は公園のベンチで寝ろ、明日この街の入り口で待ち合わせだ。じゃ」

由宇を置いて歩き出す。

「あ。ごめんなさい。ごめんなさい」

由宇は追いかけてきてボクの前に回りこんで謝っている。

「冥仙が有名だと困るってどういう事ですか？」

「ずっと聞きたかったのだろう。その目は好奇心に満ちている。

じつと座っけていても妙に疲れるので、話している事で気が紛れる事を期待して話す。」

「五仙と冥仙との関係は知ってるでしょ」

「はい。五仙が冥仙の支配から地上を解放したって伝説ですよ」

「そ。その闘いは今も続いているの。大規模なのは無いけど、まあ小競り合い程度だけ」

「その闘いで才蔵って仙士は有名になっただけですか？」

「ついでに話す。」

「『炉歩』って場所の闘いで名を上げたの」

「炉歩？」

「風仙界と冥仙界の境界」

「へへ。どんな場所なんですか？」

「どんな場所って？」

「史紀さんの生まれた街ですか？」

「違う。私が生まれたのは会流瀬えりうせって……なんでアンタに説明しなきゃいけないのよ」

「いいじゃないですか。教えてくださいよ」

「嫌よ」

「しつこく聞いてくる由宇。その空想は広がり、

「行って見たいな」

と、言いはじめた。

「頑張れ」

「どう頑張つたらいいんですか？」

「さあ？ 知らない。ボクはいつでも帰れるし」

その言葉に顔が白くなる。

「僕が行けないんですか？」

声は泣きそうだ。

「頑張ったらいけるんじゃない」
適当に励ます。

「ホントですか!？」

満面の笑みってこういう表情なんだな、と感心してしまった。

「多分」

この咳きが聞こえなかったのか、由宇は瞳を輝かせてまだ見ぬ仙界に思いを馳せている。

夕音へ1

ホテルに泊まり、暖かいお風呂と柔らかいベッドのおかげで疲れも無くなり、満足のいく食事の後、ロビーでお茶を啜りながら今後について話し合った。

「夕音まではどうやって行った方がいいの？」

「鉄道が一番早いですね」

「大丈夫、治安悪いじゃない？」

「車よりは早く安全ですよ」

「車だと、燃料とかにもお金掛かるしそれなら鉄道の方が早く安く済みますよ」

「じゃ、決定」

お茶をまったり飲み干して、駅に向かう。

「さて、夕音までは一日掛かるのか」

切符を買い、混み合うホームにて列車を待つ。途中、キオスクで新聞を買う。

由宇の言う通り、車は安全とは言えないのだろう。ちなみに由宇はなかなか洒落た格好をしている。

夕食後の腹ごなしの散歩のついでに買いに行った。

ボクとしては猫のプリントされたシャツを進めたのだが、由宇の抵抗により断念した。

人気の無い荒野で襲撃されたら助けを呼んでも来るまでどうやって持ちこたえられるのか？

という不安があるのは分かる。が、しかし

「こっちも危ないんじゃないのか、丸一日は掛かるんだろう、それならそれなりに危険も増すんじゃない」

「そんな事無いですよ」

由宇はいたって普通だ。むしろ喜んでる様にも見える。列車到着のアナウンスの後に、列車が到着。

「うおう」

思わず出てしまった声。

隣の由宇がくすくす笑っている。

なんとなく腹が立ったので由宇を追い掛け回していると、ベルが鳴りホームに居るのはボク達二人だけ。

「早く乗りましようよ」

由宇は列車に乗り込む。

それを追いかけてボクも乗り込む。

ボクの胸には不安があるが列車に乗り込む。

「こつちですよ」

「うるさい、呼ぶな」

それなりに人の気配はするが、それでも空いている。

個室に入り、荷物を置いてこれからの長い列車の旅に臨む。

一時間後、ボクは暇を持て余している。

「暇だな。由宇」

新聞を読み終わり、窓の外に目をやりながら声を掛ける。

「早いですよ。まだ乗ったトコじゃないですか」

由宇は新聞を読みながら返事する。

確かに快適だが、する事が無いのも耐えられない。

窓の外の景色は次々後ろに流れていく。ぼんやりとそれを眺めながら

「由宇。ここで襲われたらどうすればいいと思う？」
物騒なことを呟いた。

「戦えばいいんじゃないですか？」

由宇の声に緊張は無い。それは襲われる事は無いと確信している

からだろう。

「由宇。未来に絶対は無いぞ。絶対とは過去の事に対して使う言葉だ」

ぼんやりした目で見ると、きよとんとした顔でボクを見ている。

「間違っているから絶対なんだ。どうなるか分からない未来に使う言葉じゃないって事」

「はあ、分かった様な、分からない様な」
目を逸らす。

だろうな、言ってるボクもよく分からない。

「なんか、眠くなってきた。ちよつと寝る」

「はい。分かりました」

長いシート。バッグを枕に横になる。

目を閉じる。そのまま夢の世界へ……。

夕音へ2

「史紀さん。起きて下さい」

「ん……着いたあ？」

穂乃差から丸一日の電車の旅。

ボクに出来る事は寝る事と食べる事。

それ以外には無い。退屈が親友になった。

「いえ。何か起こった様なんです」

寝ぼけた目で由宇を見る。由宇の顔色からそれは良くない事だと分かった。

列車から降りる。真つ暗なホームには沢山の人が居る。

これだけの人が乗っていたのか。その事に驚いた。

「ここは？」

「夕音の手前の『理利府』です」

「なんでここで降りるの？」

「さあ？ 僕にも」

ボク達以外の人もどうしたものかと思案している。

そこに、アナウンスが、

「『伊里加』にてトラブルが起こりました……」

アナウンスを聞きながら、移動する人波。

それに乗らずにベンチに座って時間を潰す。

「おかしいですね。こういう場合は他の移動手段を用意するものなんです」

「そうなの？ でも何も言っていなかったよね」

言っていたのは、トラブルが起きてこれ以上は列車では無理、と言
う事だけ。

「線路が潰れたんじゃない？」

「だとしても、バスとかあるじゃないですか」

「なるほど。伊里加で起こったトラブルってのは」

「跋維党による襲撃かと」

「はっ」

一笑に付してやった。

「自分で大丈夫だって言ってたじゃない」

「列車を襲う事は無いと思ってたんですけど」

冷静に状況を分析する由宇。

「確かに。列車は襲つてないよね」

「なんか……引つかかる言い方ですね」

悔しそうな顔。なんとなく気持ちいい。

「そんな事ないよ。で、どうするの？」

「夕音まではまだありますから」

「車は危険だし、徒歩はもっと危険でしょ」

「はい」

「じゃ、ちよつとここで状況を見る？」

「はあ」

はつきりしない返事。

「どうしたの？」

「僕お金無いし」

うつむく由宇。

「貸したげるよ」

ベンチから立ち上がり駅から出る。

「おおおう。大きな町だね」

穂乃差も綺麗な町だったがおこちは無機質というか人工的な整頓というか、不自然ではないが違和感を感じるが、不快な感じはしない。

人々は忙しく歩きいている。

観光を目的にしているから当然といえば当然だ。

「里利府は商業都市ですからね」

そんな人達を見ながら由宇が解説してくれる。

「ふーん。もしかしたらボク以外の仙土居るかも」
空を見上げちよつと期待する。

「何か言いました・」
隣にいる由宇がボクを見る。

「さて、これからどうしようか」

「お昼、行きますか？」

答える事無く、由宇の後についていく。

昼食を取り、当面のホテルも決めて街をぶらつく。

「物騒だね」

目に付くのは武装した兵団や警察。

「まあ、こんな時ですから」

パンフレットを見ながら街の説明をしていた由宇が悲しげに呟く。

「それを言っちゃおしまいでしょ」

「そう……ですね」

しまった。由宇も被害者だったんだ。

「で、次は？」

とりあえず、話を変えよう。

「えっと、観光地はもう……」

パンフをめくり、

「もう無いですね」

稽古

理利府での観光が終わり、ホテルに戻る。

近くのレストランで食事を終え、由宇と分かれて散歩がてらに公園に寄る。

街灯に照らされた遊歩道。昼に通りかかった時とは違う公園に見える。

てくてくと歩いて行く。

ボクの足音だけが響く。

「ここらで良いかな」

公園の奥。人目につかない林の中で一人呟く。

それでも一応、辺りに誰も居ないか確認して、

「よし」

スツと息を整え、目閉じ集中して、目を開けると同時に見えない敵と闘いを始める。

星の明かりを遮る木々の下、空を切る腕と脚。

五歩進んで、また戻る。

目の前に居る想像の中の敵を睨みつける。

その敵が、形を成してくる。

こちらを振り返りあの時のままの表情でボクを見る。

徐々に荒くなる呼吸。

「っはあ！」

木を殴りつける。

がさがさと揺れる木。上から葉が落ちてくる。

「はあ、はあ………」

痛む手を冷やして、ベンチに座る。

「はあ、はあ………ふう」

星を見上げて呼吸を整える。

頬を伝う汗を手で拭う。

「うわ、びつちよりだ」

服も汗で濡れている。

夜の冷気がボクの体を冷やしてくれる。

もう少しこのままで居たかったが、複数の足音が聞こえてきた。

じっと息を潜めて聞いていたが、聞こえてくる話し声に自警団の連中だと分かった。

「帰るか」

見つかったら、何かと面倒だし。

ボクは後ろの木に隠れてやり過ごし、遠く離れてからホテルへと帰った。

ホテルに帰ると、由宇はテレビを見ながら、

「伊里加が跋維党に襲撃された様ですね」

「ホントに」

これからどうするのかを考えないといけないと思うが、ボクは今とても汗を流したい。

由宇を横目に着替えを取り出し、お風呂へゴー。

そんなボクを止める事も無くちらりと見て、再び目はテレビへと戻っていった。

「で、これからどうするの？」

「最短で行ける伊里加が通れませんから、迂回するしかないですね」とりあえず、簡単な地図を書いて、

「ここが理利府で、ここが夕音」

紙の端から端。

「で、伊里加が通れないから」

真ん中に伊里加。

「『湯狭』か『奈須徒』のどっちかですね」

「どっちから行くの？」

伊里加から湯狭が北、奈須徒は南。

地図上の上下にそれぞれ書かれる。

「距離的には変わりませんね。でも」

奈須徒のすぐ上に書き加えられた新たな地名『野乃津』^{ののつ}

「ここに跋維党南部方面軍本部があるんですよ」

「じゃ、北回りで行くか」

「その方が安全だと思います」

「ボクはそんなに変わらないんだったらどっちでも良いよ」

「じゃ、明日にでも行きましようか」

もそもぞとベッドに潜る。

鍛錬で思った以上に疲れていたらしい。

本気で鍛錬不足を痛感しつつ、柔らかいベッドの中は暖かくすぐに
寝息を立てる由宇。

「ボクも寝よ」

部屋の灯りを消し、ボクもベッドに潜る。

佳乃

悠然と雲が流れる空の下、眠気に負けてソファでまどろみかけた頃、

「こんこん、とノックが聞こえた。」

「はい」

ソファから起きて入室を認める。

「よう。昼寝の邪魔したか」

入ってきたのは、何度注意してだらしくスーツを着崩している比奈人。

「どうした？」

「『大将』が呼んでる」

「分かった。すぐ行く」

「返事して、立ち上がる。」

比奈人はドアの前で俺を待ち、一緒に部屋を出る。

陵雲党本部がある街『螢送』けいそう

外からは子供が遊んでいる声が聞こえ、陽光が入る廊下を歩いて行く。

出会う人全員が道を開け、敬礼する。

それに答えながらも進んでいく。

「ふふふ」

比奈人が後ろで笑いを堪えている。

後ろを振り返り、目で

「笑うな」

と、威圧するが、さらに笑いを誘発した結果に終わった。

比奈人を無視して先を進み、大将の部屋に着いた。

「やあ、忙しいのに悪いね」

「いえ」

部屋に入ると、聡明さを物語っている瞳、その体からは強い意志を放っている。体格はそれ程秀でている訳ではない。しかし、彼に勝てる人間はいない、と思わせる雰囲気を感じずにはいられない。

大将、と比奈人は言っているが彼はこの国全土を戦争に引き込んだ跋維党大將軍「佳乃^{かの}」

跋維党と呼ばれる組織を使いクーデターを起こした。

その指導者の名は「礼儀^{れぎ}」

腐敗した楽政府に失望し、国の浄化を謳いそれを国中に広めた。それに賛同した組織を率いて蜂起し戦いを繰り広げている。

戦況は跋維党にやや優勢。と言った所か。

自身が前線に出る事は無いが、戦略を展開し臨機に応じた指示を出している。

この戦局は佳乃の手柄と言ってもいいだろう。

「何か」

「最近、体動かしてなかったからさ」

そう言つて一振りの剣を渡される。

「他の連中じゃ物足りないし」

すらり、と抜いた剣。

「手加減すれば問題無いじゃないですか」

「稽古つけるのならそれでいいが、私には物足りない」

俺が構えるより早く打ち込んでくる。

半歩ずらして避ける。

視線は彼。

外されたのに微笑んでいる。

俺も剣を抜いて打ち込む。

一撃、二撃と打ち込むが避けられる。

間合いを開けて、息を整えて、

「ぶっ」

佳乃は俺の間合いの外からしやがんで飛び上がる。剣を突き出すが、体を捻りそれを避けて剣を振り下ろす。お互いの剣が交差する。

「ふう。中々楽しかった。また頼むよ」

「真剣でなければ」

剣を収めて返す。

お互いの顔からうつすらと赤くなっている。

「では」

「ああ、ちよつと待ってくれ。話があるんだ」

呼び止められて奥の部屋に入る。

「夕音襲撃に私も出ようと思っただが」

開口一番。そう言ってきた。

「貴方は跋維党の大將軍。軽々しく前線に出るなど」

「いいじゃないか。君に貰った『蒼空乃極』あおきそらのきわみを使いたいし」

……。

風仙界から奪ってきた『宝剣 蒼空乃極』を彼に預けてから、五年。仙界の武器を使いこなせる様になってきたから慢心したのか、

いや、彼にそんな気持ちは無いな。使いこなせる自信があるからこそその言葉だな。

まっすぐな瞳。こつという瞳をする時は誰が何を言おうが意見を変える事は無い。

比奈人を見る。彼も止めても無駄だと言っている。

実践でどこまでやれるのか見てみる必要があるか……。

「分かりました。語武運を」

「ふふ」

軽く笑う佳乃を残して部屋を出る。

「比奈人。後からついて行け」

「了解。こっちが勝ちそうだったら出ないよ」
「それでいい」

翌日、佳乃が一群を率いて出陣していった。
遅れること一時間、比奈人も出て行く。

夕音攻防戦

夕音。楽の国内でも大都市と呼ばれる街。

普段は忙しなく人も物も動くこの街は今、壊滅の様相を呈している。

先頭に立つ男の剣が振り下ろされる。風が吹きそれを合図に攻撃が始まった。

迎え撃つ夕音守備隊。

男の剣が振るわれる度に突風が吹き荒び、その後に跋維党の攻撃砂塵が舞い視界が遮られる敵の数、展開を見誤り背後に回られる。

次第に守備陣に綻びが生じる。

守備隊は光線するも跋維党の勢いに押されて劣勢になっていく。

戦闘は市街地にまで広がった。

我先に逃げる市民に兵隊達。

「くそ……」

私は踏み止まろうとするが、

「少佐！ 退却だっ！！」

後ろから大佐の怒鳴る声が聞こえる。

「しかし、市民が逃げる時間を稼がないと」

「ここでは、何も出来んだろうっ！！」

燃えるマンション、崩れる家。

その前を駆け抜ける市民。

非難する人波の中、更なる悲鳴と銃声が聞こえた。

ここまで進入を許した！？

慌しくなる人波。パニックになると被害が増える。

これ以上は増やしたくない。

「落ちて着いて非難してください！！！！」

声の限り叫んで、後ろに下がる。

「少佐っ待てっ！！」

「私は市民を守る為、軍に入ったんです!!!」
市民の誘導を任せて、私は市民に声を掛けながら後ろに向かう。

「おや？ まだ逃げないのか」

一人の男の前に、何人も倒れている。

男は薙刀を持ちにやにやと笑っていた。

名乗る必要も無く聞く必要も無い。

倒れているのは、皆、私と同じ軍服を着ている。

スツと腰を落とし、一呼吸入れて、

「やあ！」

槍を突き出し攻撃する。

「お。鬭るの？」

薙刀をひらりと回し、振り払う。

槍を返しそれを受け止める。

なんて力だ……腕が痺れる。

「良い反応だ」

嬉しそうに笑う男。

戦闘狂か。それに付き合う気は無い。

しゃがんで薙刀を外す。男はバランスを崩し、

「お」

踏み込んで、槍を捻る。かちん、と音がして槍が分かれる。

右手を振り払い、一步踏み込んで左手を突き上げる。

後ろに体重を移動して避ける男。

その眼前で切っ先が止まる。ぎりぎりの間合いを見切られた。

「何それ？ 始めてみた」

嬉々とした表情を浮かべる男。

場違いな表情と言葉に戸惑うが、すぐに気持ちを引き締め、

「はっ！」

攻めに出る。払いから突き。男の左に飛んで攻め手を変える。

右手に持った薙刀の反応がさっきより遅い。

「残念」

一閃。

短い言葉を言い終わると同時に、私の槍は打ち払われた。飛ばされた槍が地面に突き刺さる。私の首元には薙刀が当てられている。

「ま。相手が悪かったと思え。女」

これまでか。為す術も無くここで、男を睨みつける。

「あっはっはっは……。じゃ、さよなら」

「少佐っ！！」

「お、また来た」

首もとの薙刀がはずれた。

声の主に目を向ける。

「大佐」

「逃げ」

その言葉を最後に大佐は力尽きた。

「さて、邪魔が入ったが」

呆ける私。何をしなきゃ分かっているのに体が動かない。

動け、動け。

頭は動く様に命令を出す。体は全てを拒否するかの様に固まったまま。

男は私を振り返り、嬉しそうに笑いながら、

「ま、彼の尊い犠牲に免じて見逃してやるよ」

男は薙刀を払い、そのまま立ち去った。

士威街道追撃戦

「どうします、追いますか？」

一通りの報告を済ませる。

「いや、目的は達したし、今は敗走する楽兵を追っても利は無い。兵を休ませてやってくれ」

何より俺も疲れている。

「了解」

兵達に休息を取らせる。そして、小隊長達を集めて、

「休息後、被害報告と街の巡回。本隊到着後復興作業を開始」
いつも通りの確認と報告。

の筈だったか。

「あれ、一隊足りないが？」

居ないのは仲間内でも評判の悪い『麻路』^{まろ}が率いる一隊。

「あの……その」

口が重い。なるほど。

「帰ってきたら、俺の所に来る様に言っておいてくれ」

面倒だが、しょうがない。これも上官の役目。

盗賊や夜盗が主体の部隊を率いてきたのだからしょうがない。

おそらくもう始まっているだろう、北の空を見る。

帰ってきたら軍法に照らした罰則を与えないとな。

そうしないと軍を維持出来ない。

出来得るならば、それを超える功を上げて欲しいものだ。

その手柄がほかの部隊の発奮に繋がる。

盗賊主体の部隊には罰則によって規律を高めるよりもこれ以上ない事なのだが……。

夕音襲撃後、私達は生き残った兵達を集めて『士威街道』^{しゐかいどう}をまっすぐに北へと進路を取った。

普段は静かな街道に、エンジンを唸らせ走り抜ける車が四台。

「少佐っ！ 後ろに砂塵が！！」

「くっ、もう追い付かれた！？」

思ってたより速い。

流石、と敵を褒めてる場合じゃない。

街道にエンジン音以外に銃声が響く。車体に何発か当たる。

「射撃手！！ 用意！！」

先に行った市民達との差はまだある。

ここを守らないと。

速度を落とし十分引き付けて、

「撃てえー！！」

休む間も無く放たれる弾丸。

後ろを確認する。砂塵が舞っている、それを抜けてきた車が……五、

六、七台。

「射撃手っ！！」

再び街道に銃声が響く。

まだ、数が多い。全部は無理でも、狙う事で相手の足を遅らせる事が出来れば。

私の願う通りに運ぶほど現実には甘くない。

弾丸は無くなり射撃手は敵の攻撃により徐々に減り、車の速度を上げる事も出来ない。

「少佐あ」

運転手が弱気な声を出す。

その間も銃撃は止まらない。

「きゃっ！！」

大きな衝撃音と共に隣を走っていた車が視界から消えた。

「くっ」

直後、私達への銃撃は無くなった。

銃撃がその車に集中しているのだろう。

手を握り、目の前に持つてきて目を閉じる。

ゴメン、済まない。

今の私達には助ける事も何も出来ない。

出来る事はただ、逃げる事だけ。

「少佐あ」

声が涙声になっている。

「各車、捨てられる物を全て捨てなさい。それで少しでも時間を稼ぎましょう」

捨てた物が敵の進路に行けば……。

運任せの作戦だがしょうがない。

私は後ろに行き、手当たり次第に投げ捨てる。

その中に、

「これは？」

小型のバイクがそこにあった。

「手伝います」

射撃手が手を出す。

「いえ。これで向かいます」

前においてある槍を取り、バイクのエンジンをかける。

そのまま後方から車から降りて、

「先に行きなさい！ 私も後から行きます！」

一機駆け

バイクと入ってもそこは軍用。

両手が見える様に足元にアクセルペダルがある。

両足でバイクを挟んでバランスをとる様に乗るのだ。

ちなみに、夕音守備隊では私が一番上手く乗れる。

「援護を」

「しかし、もう弾が」

「振りだけでいいからっ！！」

そう叫んで弾丸飛び交う車外へ。

こっちの射撃手が銃を構えて撃つ振りをするだけで敵は回避する。

その隙に私はアクセルを踏み込み敵に近づいてタイヤを一突き。

大きな破裂音と共に急転回する車。

空撃ちがバレル前に一台でも減らす！

槍を手に次の車へ、

狙いを定めさせずに右に左にと動いて、車に迫る。

「このっ」

助手席の男が銃を構えるが、私の方が速い。

ガラスを貫いて男を貫いて後方に下がる。

車の背後には射撃手がいたが私を見るなり驚いて腰を抜かしている。

そのまま右に回りこみ運転席へ、

「ひっ」

ミラーで私を確認したんだろう。表情が恐怖に満ちている。

躊躇わずに槍を突き出す。

「二台目。」

車が転倒すると同時にアクセルを踏み込む。

どこに指揮官が？

そこを叩けば追っ手も引き下がる筈。

残るは五台。頬を汗が伝う。

焦るな、焦るな。

冷静に、冷静に。

落ち着いて、私なら大丈夫。

荒い呼吸とは反対に心を落ち着かせる。

……四台目。

まだ追っ手は引き返す様子がない。

まだ、指揮官がいるのか？ それとももう指揮官はいなくてその報復の為か？

五台目を大破させた所で、

「女あ！」

後ろから私と同じ様にバイクに乗った男が迫ってきた。

前にかがんで攻撃をやり過ぎ、すぐに槍を構え応戦する。

そのまま私を追い越して行き、反転してくる。

薙刀を軽々と振り回す男。

夕音で出会った男とは違う。

今はこの敵に構っている場合じゃないが、無視出来る様な相手でも無い。

グツと槍を握り、間合いを計って、

「はあっ！」

突き出す槍、薙ぎ払う薙刀。

交差し、お互いがバランスを崩す。

アクセルを踏んで立て直し、切っ先を交える。

脚を締めバイクのバランス取りながら槍を突き出し、相手の攻撃を避ける。

相手が速度を速めれば遅くなり、遅くなれば速くする。

緩急をつけ、私のペースに持ち込む。

「チッ！」

攻撃が外れる度に悔しそうに舌打ちが聞こえる。

おそらくその攻撃は止めなのだろう。だから外れるとイラつく。冷静さを失ったのなら勝機は私にある。

それから数合打ち合う。

相手の攻撃に鋭さが無くなった。

「この、いい加減に」

言い終わる前に私の槍が相手を買いた。

バランスを崩しバイクから倒れる男。

操縦を失ったバイクはそのまま走り続け転倒。

私はアクセルを踏み込んで先に行った仲間を追いかけた。

湯狹到着

「で、これからどうする？」

ボク達は湯狹に到着。その直後に夕音襲撃を聞いた。

「どうするって」

酷かもしれない事だが、一刻を争う事態だという事ぐらい分かっているだろう。

「しばらくは状況を見ましよう」

歩き出す由宇。

冷静さを装っていても動揺しているのはよく分かる。

「いいの？ 行くなら付き合っけど」

「いえ……史紀さん一人なら大丈夫だろうけど。僕がいたら」

ふむ。一理ある。

「写真とかある？ ボクが行って探してきてあげるよ」

ふるふるると横に振る由宇。

「とりあえず……警察とかに行って非難した人達の事聞きに行こうか」

由宇の手を引いて行く。

警察に到着。

避難民と警察官で身動きが取れない。

本来なら行かないのだが、今はそんな事言ってる場合じゃない。

人込みをかき分けて、汗だくになって玄関に到着した。

「ふう、まったく」

通り抜けてきた後ろを振り返る。

「史紀さん」

袖を引っ張る由宇と一緒に中に入る。

「由宇っ！」

入った途端に名前を呼ばれる。

「おばさん!!」
奇跡?

騒がしいと言っではなんだが、警察署から静かな公園に移動し、これまでの事情を説明し終わり、今後のことに話が移行する前に、

「じゃ、ボクはこれで」

「あ、史紀さん」

「なんですか?」

親戚の方が声を掛けてくれる。

「貴女も一人なんですよ、だったら」

「いえ、ご好意は嬉しいのですが」

頭を下げ断って、背を向ける。

「ありがとうございます」

由宇の声を背中に聞いて公園を出る。

さて、これからどうしようか。

とりあえず街を歩く。物騒な奴等があちこちにいる。

「おい、夕音守備隊が来たらしいぞっ!」

夕音守備隊か。

ボクと同じ事を聞いた市民達が走っていく。

その流れに逆らうのも面倒だし、暇だから見に行こうかな。

街の入り口まで歩いていくと、案の定かなりの野次馬が取り囲んでいた。

「何、何」

後ろの方でぴよんぴよん飛び跳ねてる。

ちっとも見えない。くそ。

「ちよつと……退い……て」

野次馬共の間を強引に割って入る。

苦しいがその先にある光景への興味だけがボクを突き動かす。

これで大した事なかったらどうしようか……。

否！ この先にはとてつもない事が起こっているのだ！

人垣で挟まれ揉まれ、挫ける心を奮い立たせてその先に見た光景は、

「うわっ」

警察や軍らしき人達が忙しく動き回り、その先にはぼろぼろの車が三台。

傷だらけの人が手当されたり担架で運ばれたりしている中、一人の女と目が合った。

宵

「周囲5キロの哨戒を重点において……」

湯狭守備隊の会議を聞きながら、夕方に見た少女の事を思う。

何者かは分からないし、どこにでも居る様な少女。

なのにはつきりと覚えている。

状況確認と哨戒順を確認してこの日は解散した。

宿舎に戻っても彼女の事が頭から離れない。

ベッドに仰向けになり天井を眺めると、夕方の雑踏の中、彼女が居る光景が蘇る。

どうしたんだ？

自分を軽く笑い、上半身を起こす。

考えててもしょうがない。

上着を羽織って宿舎を出る。

日も暮れて、ホテルを探してうろつくと歩き続ける。

歩き疲れた訳ではないが、由宇達と別れた公園で一息つく。

しなきゃいけないのは、才蔵を見つけてボコボコにする事、それから蒼空乃極の奪回。

その前に今夜の寢床を見つける。

後は、稽古もしたい。おなかも若干空いてきた。

……夕暮れは色々と考えさせてくれる。

落ち込みそうになる心。

パン、と頬を叩いて奮い立たせて立ち上がる。

「よし。行こう！」

手を高く突き上げて、遠巻きにボクを見ている奴等を睨みつけて公園を出る。

夕音の事後処理を手配してようやく食事にありついたら、
「失礼します」

箸を持ったまま、入ってきた兵を見る。

「麻路隊が帰還しました」

まったく、間の悪い。

空腹を抱えたまま、兵の後について行く。

月が輝く空の下、帰還したのは二台の傷ついた車のみ。

「あれ、麻呂はどうした？」

居るべき指揮官が居ない。

「隊長は」

帰還した兵が言いにくそうに、

「戦死……されました」

自分の耳を疑った。

麻呂が、戦死……？

嘘だろ？ 功を焦ったか、それとも相手を見くびったか。

どちらにしても、帰還した兵達の様子から戦死という事は間違いなさそうだ。

本来ならこの場で抜け駆けの事を詰問するべきなのだろうが、兵達の様子を見ると躊躇してしまう。

「そうか、諸君等には色々と聞きたいことがある。明朝、私の所に
来る様に」

甘い判断だと、笑われそうだな。

空に輝く月を見上げて、遠く離れた盟友の顔を思い浮かべる。

とりあえず、近くのホテルに寝床を決めて、荷物と食事を終えて、
一休み。

しばらくはテレビを見たりしていたが、飽きてしまい、散歩に出る。

綺麗な月が輝く夜空のしたには人影は殆ど無い。

もったいないな。こんな良い夜なのに。

たまにすれ違う人は武装している。

そいつ等は決まって、じろじろとボクを見る。

ボクの容姿に見惚れている訳じゃなく、明らかに警戒している。

まったく、どいつもこいつも……。

ため息をついて、街を歩く。

ボクが盗賊なんかに見えるのか？

タイミングよく大きなガラスに映ったボクを見る。

……いつも通りのボクだ。

記憶を頼りに彼女を探す。

街を巡回している兵達に、探している少女を見てないか尋ねながら進む。

「あ、そういう格好の女の子なら……」

一人が見たとの事なので、急いで向かう。

居た！

道を隔てた向こう側に大きなガラスを覗き込む様にポーズを取っている。

「おーい！」

考えるより先に声を掛けていた。

湯狭の夜1

「ん」

振り返ると、道の向こう側で手を振っている背の高い女が一人。

……誰？

目を凝らして見ると、ああ夕方に見た女だ。

夕方と同じく、右の方だけ髪を止めている。

軍服じゃないのでちよつと見違った。

しかし、声を掛けられる様な事は無い、等。

それにボクじゃないかもしれない。

通りにはまばらだが人が居るし。

なので、そのまま女を無視して歩き出す。

「あ！ ちよつとつ！」

大きな声が聞こえる。

どうやらボクの様だが振り返ることはしない。

何故なら、少ないとはいえ人はいる。

そんな中に大声で呼ばれて、恥ずかしくない訳が無い。

ボクは繊細なのだ。

「待ちなさい！」

口調が命令になった。

そう言われると逃げたくなる。

何故だろう？ 誰か調べてくれないか？

早歩きから小走り、そして、長距離走に。

「はあ、はあ……」

夕方にいた公園の木の陰に隠れながら息を整える。

なんでこんな目に遭わなきゃいけないんだ。

自分の行動を思い返す。騒ぎは起こしていないし、関わってもいない。

追われる理由は無い筈だ。

息を整えつつ、辺りを窺う。

人の気配は、無い。

そっと脚を踏み出す。

「準備は出来たかい？」

麻呂隊を敗走させた部隊が気になり、湯狭に潜入して情報を集めさせる事にした。

無論、指揮は彼が取る。

「おい。なんで俺が？」

「暇だろ？」

比奈人がぶつぶつ文句を言っているが、どうせ才蔵から何か言われているんだろう。

すんなり俺の指示に従ってくれた。

夜の土威街道をまっすぐに駆け抜ける。

「比奈人隊長、前方に敵らしき影が」

隊長……。

なんともくすぐったい呼ばれ方だ。

「どこ？」

前方の暗闇を指差す方を見る。

ちらちらと光がちらついているな。

「進路はこのまま、このまま作戦を実行する」

「了解」

アクセルを踏み込んで、一気に前方に駆け出す。

発砲音と共にアスファルトが飛び散る。

同時に後ろからも発砲音。

俺に当てるなよ。

引いていく敵さん。

数は、四、五人位か。

哨戒か、本隊を呼ばれる前に片付けよう。

俺の愛刀『深淵しんえんのつき乃月』を掲げて、振り下ろす。

まず一人、次いで払って二人目。

逃げる三人目を切り払い、四人目を追いかけて突き崩す。

五人目を追いかける途中で、街の方から応援が来た。

「お前等は帰れ。後は俺一人でやる」

「しかし」

「無駄に死ぬ事は無いだろ。命令だ」

俺一人の方がやりやすいつて言うのが正直なトコだけど。

「了解。では」

後ろの方で激しい銃撃が聞こえる。

後ろを振り返ると、二人が俺を追ってきた。

「ついてないな」

再び、薙刀を振るい二人を切り伏せる。

そのまま、街に向かって走り抜ける。

夜の公園。

街灯と月明かりが照らすベンチに一人座ってから、一時間。

魚が泳いでいるのか、池に写る月が揺れている。

合流ポイントはここに十時。

時計の針はすでに十一時を指している。

誰一人、来ない。

捕まったか、それとも……。

いつまでもここで座っていてもしょうがない。

「はあ、はあ……。なんで、逃げるの」

膝に手をついて、荒れた呼吸を整える。

顔を上げると、もう彼女の姿は無い。

見失った。誰かに聞こうにも誰もいない。

「はぁ、帰ろ」

時計は十一時を少し回った所。

宿舎に戻る途中、通りかかった公園から争う声が聞こえた。

湯狭の夜2

そつと脚を踏み出して見ると、ぽつん、と人影が見える。

あの女かと思つて身を隠すが、よく見れば違つ。

目を凝らし見つめる。

薙刀を持つそいつは、ボクの視線に気付いたのか向こうもこっちを見る。

目が合う。

その瞬間、全身が総毛だった。

確認も何も無い。気付いたら飛び掛つていた。

「何だあ？」

ボクの攻撃を避けつつもあつげらかなとした声を出す。

突き上げる拳を顎先を掠める。

「誰、お前？」

答える事など無い。

ボクはこいつを叩きのめしてもう一人の、才蔵の居場所を聞き出す。薙刀を背に反撃が無い。

それなら！

左手で相手の右手を捕らえ、右手で相手の襟を掴んでボクの体を密着させて投げ飛ばす。

「おわ」

ボクの背中から声が聞こえる。

「痛たた」

地面に叩きつけられて顔をしかめる男に馬乗りになり、首を絞める。

「おい、才蔵はどこに居る？」

「はあ？ 才蔵なら……つて言える訳無いだろつ！」

男の手がボクの襟を掴み、

「うわっ！」

引き倒される。

「ごん、と頭を打つが今は痛がってる場合じゃない。

ようやく見つけた手掛かり。なんとしてでも情報を聞き出す。

薙刀を構え、ボクを見据えるその目に殺気が籠る。

「で、お前は……」

何かに気付いたのか、思い出そうとしてる様にも見える。

「どっかで……あ！ お前あの時の！」

思い出したのなら話が早い。

「拾った命を捨てるか？」

「やってみる！」

ボクが踏み込むと同時に薙刀が払われる。

刹那の間合いでタイミングをずらしてボクの眼前を通り過ぎてから、更に詰め寄る。

「長柄が活きない間合いの勝負。」

武器を捨てればその瞬間の隙を逃さないし、持ったままなら片手だけ。

ボクが有利。

の筈だったのに。

「どうした、ハンデが片手じゃ足りなかったかな？」

言葉通り、男は左手だけでボクの攻撃を裁いている。

くそ、これじゃ、

「悪いが、やる事があるから」

今まで動かなかった薙刀が振るわれる。

しまった。気付いたときにはボクは遠く弾き飛ばされていた。

「痛……まだ」

「ほう、前より少しはマシになったか」

男はその場から動かさずボクを見ている。

「まだまだ、俺達には届かないな」

その一言が、何より痛かった。

「こつちです！ 速く！」

「しまった。騒ぎすぎたか」

男は身を翻して、闇に紛れていく。

「待て」

痛む体を無理矢理起こして立ち上がる。

力が入らず、地面に蹲る。

くそ、くそ……。

「大丈夫？」

心配そうに声を掛けてくれる。

悔しくて齒がゆくて顔を上げることが出来ない。

湯狭の夜3

痛む体をベンチに休め、地面を睨みつける。

「大丈夫？」

隣に座っているのは軍人の女。

「何があつたの？」

街灯に照らされたベンチに二人。

体を抑えたままのボクとボクを見つめる女。

「何もない」

顔を上げてそう呟く。

ソレが今の精一杯だ。

「何もないって。そんな訳無いでしょう？ あれだけの戦闘をして
おいて」

正直、嬉しいがうざつたい。

そつとして置いて欲しい。優しくされたら泣いて……なんて事はな
いが、人には見られたくない状況なんだから。

「おい。誰も来ないぞ」

とりあえず、話を逸らす。

「何？」

「誰か呼んだんじゃないのか？」

「呼んでないわよ。ああでも言わないとどうにも出来ないでしょ。
私も武装してないし」

まるでその強さを知っているかの様な言い方。

「お前、あの男を知っているのか？」

「夕音で一度」

その声にはボクと同じ心境だ、と言つのを感じた。

「よく無事だったな」

「手加減されたのと……」

言い淀む。

興味が無い訳では無いが、これ以上関わりたくない。

「じゃ、助けてくれてありがとう」

「ちよつと待つて」

立ち上がるボクを引き止める。

「何？」

「え、つと」

引き止めたものの話す事が無い様だ。
となると、

「おい。お前はボクを探してたんだろ？」

ボクは理由も無いのに追い掛け回されていたのか？

「あ。そ、そうよ」

「なんの用だ？」

指をくるくると回して、空を見上げる。要するに、

「何も無いんだな。ボクは帰る」

「ど、何処に帰るの？」

「言う理由が無いだろ」

一人ベンチに残り、居なくなった彼女の幻影を思い浮かべる。

言われてみれば会ってどうしようとしていたのだろうか？

なんとなく気になった。

では、初めて会う理由としてはどうなのか？

「うーん。……あ」

ここで考えてる場合じゃない。

宿舎へと戻った。

ホテルに戻り、お風呂に入る。

「いった〜……」

擦りむけた背中にお湯が沁みた。

くそ、もつと強くならないと。

あの男は本気じゃなかったのに、足元にも届いてない。例え箒星があつても同じ結果になっていただけだろう。

支障達が敵わなかった相手だからしょうがない。

では、済まない。済ませたくない。

湯船に顔を沈めて泣きそうな自分を覆い隠す。

……この悔しさもおもいつきりぶつけてやろう。そう考えるのがボクだ。

あの男はまだここに居る。確信は無い。
手には箒星。

夜の街を駆け回れば見つけられるかもしれない。

「今度こそ」

覚悟と決意を心に刻んで走り出した。

湯狭の夜4

「化け物か!？」

路地裏に輝く月。

それが動く度に血が飛び、人が倒れる。

「全く、しつこいな。邪魔しないでくれよ」

薙刀を小脇に抱え悠然と立っている。

殺気が立ち込める路地裏。

その殺気に圧されて射撃手の指も固まっている。

ザツと前に踏み込む。取り囲む兵達が後ずさる。

そのまま後ろに駆け出していく男。

後ろを守っていた兵達の悲鳴の後に駆けて行く足音が木霊していた。

「少佐」

私が宿舎に戻ると、傷ついた兵や赤く染まったシーツに覆われた兵が運ばれて行く。

その光景を、唇をかみ締めて見つめる事しか出来ない。

いや、出来る事はある。

「何が」

近くに居た兵に事情を聞く。

跋維党のスパイが進入していて、それを発見したが戦闘になり……。と言った所だった。

だとするとスパイはあの男。

「スパイは何処に？」

スパイを捕らえる事で彼等に報いよう。

心にそう言い聞かせてスパイが走り去った方に走り出す。

夜の街を走り抜けて、一時間。
走り回っていたら、何か騒ぎがあった場所に到着。
テープで覆われた先には何人もの人と車が行き交う。
息を殺して様子を窺う。

「あの女」

あの女がいる。

アイツがここに居たのか？

女は路地裏に入っていく。

唇の湿らせて近づく。

「こら、近づくな」

グイ、と後ろに押される。

「あそこに行きたいんだけど」

「駄目だ。見て分かるだろう。立ち入り禁止だ」

くそ、ここで問答していてもしょうがない。

その場を離れて、また走り出す。

……ボクは今夜どれ位走っているのだろうか？……。

「私達はこつちを、あなた達は向こうへ、見つけたら連絡を」
敬礼して走っていく兵達。

「行きましょう」

手分けして男を捜す。

この先には守備隊の本部がある。

これ以上、好きにはさせない。

槍を握る手にも力が入る。

渴いた喉を潤し、搜索を再開する。

「どこいったんだ？」

耳を澄ますと、騒ぎがあった方から人や車の音が聞こえる。

「あそこじゃない」

そこは反対の方へと走り出す。

「まったく」

ここまで走ってるんだ。

なんとしてでもとっ捕まえてやる。

「さて、君とは再びだな」

男は出会った時と同じ様に薙刀を持ちにやついている。

「俺の気まぐれに期待するなよ」

私が構えると、同時に向かってくる。

力、速さが段違いだ。

防戦だけで精一杯だ。しかし、私も一人で来たんじゃない。

「君が防戦に徹していても」

柄のギリギリ後方を持ち、ぐるんと大きく振り回す。

弾かれる槍、悲鳴と地面に叩きつけられる音が響く。

「君はここまでかな」

場違いな表情と声。

最後まで私は諦めない。

湯狭の夜 5

振りかぶる男を睨みつける。

「良い目だ」

振りかぶった薙刀を振り下ろす。

私にはスローモーションに感じられる数秒。

場違いな微笑み。鉄の臭いと暗闇。そして全てがコマ送りの世界。

空を切る音。

私に触れる直前の薙刀が軌道が変わり、私の頭の上を通り過ぎる。

呆気にとられる私。

それは男も同じだったらしい。

視線は私じゃなく、巻きついた何かの先に向いている。

事態が分からずに戸惑う私。

「誰？」

男が口を開く。

「人間同士の鬭いに加わる気は無いけど見てしまった以上は」

そう言っつて薙刀を引っ張っている。

「お前が鬭うのか？」

「貴方が退けばそれで終わるけど」

ぎりぎり引っ張り合っている。

「じゃ、ついでにお前も」

男が迫る。

ひゅん、と空を切り巻きついてた何か男の前方を打ち据える。

それで、男の足が止まった。

それでもまだ、ひゅんひゅん、と空を切っている。

「どうしたの？」

言葉はからかっている様に聞こえるが、声色は真剣だ。

何が動いているのかは、私の目では見切れない。

しかし、予測はつく。

「鞭……か？」

男の目にもはつきりと見えないのか、確信は無いがそうだと思う様に見える方。

「見切れる？」

夜、明かりはあるがこんなに速く動く鞭を見切る事は無理だろう。

「やってみなきゃな」

男は怯まない。

楽しそうに薙刀を構える。

男の目には私は映っていない。

「貴方、何者？」

私の鞭を避け、攻めて来る男に声を掛ける。

「さあな。お前は？」

声にはまだ余裕すら感じる。

輝きを増す薙刀。それで何者なのか解った。
なるほど。

「仙士？ なら手加減は入らないね」

鞭を避け、薙刀を振るい、また鞭が空を切る。

闇に慣れた目で、鞭を操り闘う女を見た。

鞭を撓らせるたびに踊る長い髪。カツカツ、と地面を蹴る音と舞うスカート。

この隙に槍を取り、後ろから攻めれば勝機はあるが体が動かなかった。

目の前の闘いは私の入れる闘いじゃない。

私はただただじっとそれを見ている事しか出来なかった。

殺気。

それを感じて、足を止める。

ようやく見つけた。

感じたのは大きな建物へと続いている路地の先。

「ふうう」

深く息を吐いて、ゆっくりと呼吸する。

「よし」

ぱあん、と頬を叩いて気合を入れる。

殺気が徐々に強くなってくる。

誰かが男と闘っている。

が、構わずに、

「箒星っ！」

迷わずに割って入る。

ボクの事に気付いた二人はお互いに離れる。

もう一人の女は誰なのか知らないが、関係ない。

「まだ、居たのかっ！」

「当然！」

男の薙刀が箒星に向かう。

「飛盾！？」
ひじゆん

驚く声を聞きながらその横を駆け抜ける。

二度、三度と軌道を変えて、

「このっ」

男の注意が箒星に向いた瞬間にボクが一気に間合いを詰める。

「生意気なっ」

箒星を男の眼前を通過させる。

「え、貴女は何者？」

女が声を掛けてくる。

「うるさいっ！」

男に集中してないと、さっきの繰り返しになる。

箕星が目眩ましになって軌道が甘い。

それを避けて、

「らあっ！」

思いつきり顔を殴りつける。

湯狭の夜 6

追い討ちを掛ける。

脚を蹴り抜いて、膝を折る男。

もう一発、膝を突いた男の顔の上から拳を振り下ろす。

何かがボクの腕に巻きついた。

「な」

巻きついた何かを睨みつける。

「ちっ」

「あ」

小さい呟きを見逃さなかった。

見れば紐状の何かが巻きついている。

声の主を睨みつける。

誤魔化す様に微笑んでいるが、今はそれ所じゃない。

ボクが目を放した隙に男は距離を取り体勢を整える。

距離を取るうが、今のボクには関係ない。

「ち、しっこい！」

箒星が男を追いかける。

箒星を打ち払い、迫ってくる男。

後ろに下がって弛みを作る。

弾かれた箒星が光を放ち、空を舞う。

「つとお」

箒星が男とボクの間を通り抜け左腕に装着される。

「はあ、はあ……」

じつとりと汗が滲む。

「あのさ、コレ外してくれない？」

「え、あ、はい」

しゅるしゅると外れる。

「あの、君は？」

「終わったら教える。邪魔するな」

「あ、はい」

構え直した男と向き合う。

「二対一でも構わんぞ」

「負けた時の言い訳か？」

「俺の強さは身に沁みているだろう」

その一言には、あの時の光景と痛みが心に蘇り、体中が総毛だつた。

箒星を飛ばし、力一杯踏み込んで攻める。

お互いの武器が弾きあい、火花が閃く。

箒星を装着し接近戦に持ち込む。

「どうした、飛ばさないのか？」

左手で薙刀を止め、密着した間合いから攻め続ける。

「それだけの強さで持つ訳が無いよな？」

輝きを増す薙刀。強引に振るう薙刀を体で受け止め、腕を絡める。

その体勢のまま、残った力で箒星を解き放つ。

「まだ、使えるのか！」

これが最後。

これで決める。

ここまでやるのか、こいつは？

もう立っているのも辛い程に疲労が溜まっている筈。

何がこいつを……ってきつかけは俺達か。

気持ちは判らんでもないが、ここで止まる訳にはいかない。

俺は薙刀から手を放し、飛盾を避け、小娘を蹴り飛ばした。

くそ……もう体が動かない。

力比べになつていたのでバランスを崩し、思いっきり壁に叩きつけられた。

ボクと同時に地に落ちる篤星。

「手間取らせてくれる。そっちはどうする?」

「その気があるのなら相手しますが?」

ボクはその会話を遠くなる意識の中で聞いているしかなかった。

「大丈夫?」

目が覚める。

見た事の無い女がボクを見つめている。

「誰?」

「昨日、つて言うか夜中に会つたでしょ」

「……。ああ、つて!!!」

「アイツは!!!」

飛び起きる。

体中が筋肉痛になっている。

「痛たたたた……」

「あはは……。あれだけ闘れば体中が痛むでしょ」

痛む体を抱きつつ、現状に気付いた。

「ここは?」

「医務室」

「何処のつて聞いているんだけど」

「えーと」

上を向いて考えている女。

「湯狭守備隊本部の医務室だ」

声の方を見ると、ボクを追い駆けていた女が入ってきた。

「誰?」

「まだ、名前言ってなかったね。私は『佳奈^{かな}』楽軍夕音方面部隊所属、階級は少佐」

微笑みながらこつちに来る女。

「じゃ、その少佐サンはなんでボクを追い駆けてたんだ？」

「理由って言う程の事は無いんだけど」

「理由も無く人を追い回すのか？ 暇なんだな」

「負けたからって、八つ当たりしなくてもいいじゃない。ねえ」

朝の日差しを浴びて、爽やかな顔で腹の立つ事を言いやがる。

「何、勝負する？」

「辛いんでしょう？」

頬をつんつんされる。

こいつは完全にボクを馬鹿にしている。

「解った。こつち来い」

痛む体を動かしてベッドから降りる。

「まあまあ。落ち着いて」

「あ。そつだ、コイツの所為で！」

なお更、痛い目を見せてやら無いと。

夜が明けて

日の入る医務室。

ボクの他にも何人かの負傷者が居る様だ。

本来なら静かにしないとイケないのは解ってる。

しかし、ボクの横に居るコイツだけは痛い目を見せないと解らないらしい。

「お前の所為で逃がしちゃったじゃないか!!」

仙士を睨みつける。

「え、私の所為？」

驚く仙士。

「そうだ、お前の所為だ。どうしてくれる」

「どうしようも」

しゅん、とする仙士。

「まあまあ」

佳奈と名乗った女が仲裁に入る。

「彼女も悪気があった訳じゃないし」

「無ければ許されると思うなよ」

「とりあえず、話を聞かせてくれるかな」

「「なんの」」

図らずもハモッてしまった。声色は違うが。

顔を見合わせる。微笑む女の顔に思わず背けてしまった。

「貴女達が何者なのか」

……再び顔を見合わせる。

表情から察するに、説明がメンドイのでどうにか押し付け様としている様に見えるのは、ボクもそう考えているからだろうか？

「なるほど」

とりあえず、説明は終わった。

「じゃ、君は史紀さんに助けてもらってここまで来たのか」
由宇を呼んで。

良かった。由宇がまだこの街に居て。

「はい」

「ふーむ」

少佐殿がボクを見る。

「何？」

「いや、仙人というからにはもっとこう……」

なるほど、思い描いていた仙人のイメージにボクが合っていない
と言う所か。

「これでもボクは少佐殿より年上だと思っけど」

「疑っている訳ではない」

少佐殿が少し慌てた様に取り繕う。

「いいよ、別に。でも、証明できないの。歴史に載ってない百年前
の事を言っても証明出来ないの。真実はここにあるの」

頭を指差す。

「だから疑っている訳ではない」

苦笑する少佐殿。

「史紀ちゃんもイジメなくても」

「イジメてる訳じゃないし。おい、馴れ馴れしく呼ぶな」

「で、史紀ちゃんの探していたのがあの男で、跋維党に関わって
いる」と

「聞けよ」

仙士は時仙『理緒』と名乗った。こっちに来たのは『暇だったか
ら』らしい。

いい加減な奴だ。

「聞いているよ。馴れ馴れしいって言ったんでしょ。じゃ、呼び捨て
で良い？」

「呼び捨ての方が良い」

「私は史紀ちゃんのほうが良い。だから史紀ちゃんです」

……！　なんてわがままな奴だ。

一度、痛い目を見せなくては！

「仙士というのは他にも居るのか？」

「あ、水仙の方が一人います」

「後は？」

首を捻る由宇。

「その方は跋維党に？」

顔が曇る。向こうに着いていれば厄介な事だろうな。

「人間が仙士に勝てると思いますか？」

他愛無い雑談の後、少佐殿が話を変えた。

「勝てない道理は無いですよ」

理緒が答える。

その言葉に顔が明るくなるが、

「仙士かどうかはともかく、あの男に勝てるかどうかじゃないの？」

ボクの言葉に意気を挫かれたのか、少佐殿は唇を噛み締めている。

「史紀ちゃん、言って良い事とダメな事があるのよ」

「一秒前のお前に言ってやりたい言葉だな」

史紀と理緒 1

「私達に協力してくれないだろうか？」

「なんで？」

「この戦いを終わらせる為に」

頭を下げる少佐殿。

戦いを終わらせるのは賛成だが。

「断る。ボクには追わなければならぬ相手が居る」

「それが夕べの男なら私達に協力してくれれば」

「人間の戦争に関わる気は無いの」

「しかし、一人で追うには」

「人間を殺すよりはマシ。それじゃ」

ベッドから降りて、少佐の横を通り抜けて部屋を出る。

「いいの？」

「何が」

ホテルに戻って軽い食事を取り、荷物をまとめている。

「人間の戦いに参加しないって言うのは賛成だけど。昨日の相手は

一人では」

「お前が邪魔しなきゃ勝ててた」

じろつと睨んでやる。

「そうかなあ」

ベッド寝転んで、ボクの言葉を否定する。

「おい。一ついいか？」

「何？」

「お前はなんでここにいる？」

当たり前のようにボクの部屋に居る。

それがあまりにも自然にくつろいでいるので不思議に思わなかった。

「あ、え」

「こいつはベッドに寝転んでいた体を起こして、天井を見て考えている。」

「なんとなく？」

「なんとなくで居座っているのか？」

「ま、まあいいじゃない。細かい事は、ね」

「ね、じゃないだろ。」

「お前とは気が合う事は無いと思う」
「バッグを担いで部屋を出る。」

「どこ行くの？」

「お前には関係ないだろう」

夕べの騒ぎの影響がそれ程人は居ないが、代わりに守備隊や警察の姿を多く見る。

ボクも声を掛けられたが、少佐殿に連絡を取って貰ったのですんなり通れた。

若干の曇り空の下、大きな通りを歩いていく。

人が少ないとこんなにも広いのかと、寂しい光景だ。

その中を歩いている。それなりに様になっている光景の筈なのに、後からついてくるのなら、まだ可愛げはあると思う。

「教えてよ」

「うるさいな。お前は」

隣に並んで歩いているこいつの所為でなんとなくしまらない光景になっている。。

「あ。お腹空かない？」

「馬鹿にしてるのか？」

「いいじゃん、時間も時間だし」

「十時前だぞ」

「気にしない、気にしない」

腕を引っ張られて店に引き込まれる。

カウンターでボクの意志を無視したご注文が取られる。

「九七十円になります」

「史紀ちゃん」

「……はあ!？」

「私、お金、無い」

「単語で喋るな」

「あの……」

カウンターにはご注文の品々が揃えられていた。

「ほら。早く」

このままでは済まさない。

納得の出来ない支払いだったが、払わない事も出来ない。隣で微笑んでいる女を睨みつつ支払う。

窓際の席に着いて人の通らない通りを眺めて向かい合って座る。

「で、これからどうするの?」

「どうするもなにも。お前からお金を返して貰わないと」

「え。なんで?」

「お前に奢る理由がボクには無いだろう」

一口パンを頬張る。

「いや……あははは」

横を見てジュースを啜る音で誤魔化そうとしている。

「大丈夫。史紀ちゃんの事を手伝うって事で。一つ」

ポテトを差し出してくる。

それはボクのお金で買ったのだと言う事を覚えていないのだろうか?

「お前、今までどうやって生きてきたんだ?」

「それがね!」

なんのことは無い。財布を落としてしまったただけだそうさ。

一言で済む事を楽に来た理由から説明された。

それも「暇だったから」だったそうさ。

延々一時間、一人で喋っていた。

あの街のここが良かった。この人は優しくかった。等等。

「で、これからなんだけど」

背中に嫌な汗が流れた。

「財布を無くしちゃったんで、一緒に探してくれない？」

「一人で行け」

席を立つ。

「ちよちよちよ。まだ、話は続くの。もし、万が一見つからなかったら一緒に旅しない？」

頭を掻いて、

「断る」

ゴミを片付けて店を出る。

史紀と理緒 2

湯狭に心ならずも滞在している。

その理由は、

「あれ、ここじゃないとなると」

この女、理緒の財布を捜す為にあちこち歩かされている。

正直、こいつの財布なんかには興味は無い。

しかし、こいつはボクが立ち去ろうとすると袖を引っ張って行かせ
てくれない。

無理に振り払おうとするとその瞬間、目に一杯の涙を溜める。

そんな目で見つめられて、振りほどけるほどボクも鬼じゃない。

なので、嫌なのだがその目に逆らえずにいる。

それが悔しい。悔しくて悔しくてボクが泣きそうだ。

「警察かな？」

「届けてくれていたらな」

微かな期待だと思いが、一応行ってみる。

期待を裏切る事の無い展開。

肩を落とす、という表現がここまで合う奴は今まで見た事が無かつ
た。

「はあ」

ため息が目視出来そうな程深い。

「じゃ、ボクはこれで」

しゅたつと手を上げて袖をつかむ隙を与えない速さで去って行く。
後で小さく、呟く声が聞こえた。

情けをかけるな。ボクにはやる事があるんだから。

よく分からない罪悪感を必死に誤魔化して走っていく。

街道を一人歩いていく。

心には理緒の泣きそうな顔がちらちらと浮かんでいる。
立ち止まり、後ろを振り返る。

誰も居ないのは分かってる。

見ているのは湯狭の街にいる理緒。

「ああ。くそっ」

地面を蹴り上げて、来た道を走って戻っていく。

街を駆け巡る。

人通りが少ないからすぐに見つかると思ったがそうはいかなかった。

「どこに居るんだ」

ボクは理緒と歩いた場所を順番に巡っていく。

公園、夕べ戦った路地裏、奢らされた店、軍の宿舎近く。

どこにも居ない。

昼を回っている。まさかとは思いが食い逃げなんかしてないだろうな。

万が一していたら、本気で蹴っ飛ばしてやろう。

とりあえずそれを心に近い、警察へ向かう。

良かった。食い逃げ犯は捕まっていない。

逃亡中という可能性はあるが。被害届けは無いから大丈夫か。

「あのアホはどこに行ったんだ」

あ。

玄関で立っている警察に聞けばいいんじゃないのか。

「あの人なら東の方へ」

と聞いたので東の方へ向かう。

とりあえず東方面をくまなく、とは行かないが聞き込みしつつ探索。

あのアホはどこにも居ない。

これで街から離れてたらどうしてくれようか？

探す相手が一人増える事になる。

才蔵達のが済んだら探し出して、

「お」

物騒な事を考えていると、自販機の横に一人座っている腹を空かせた女を発見。

とりあえず、一発。

「痛っ」

まったく僕に気づかなかったのか、簡単に叩けた。

「心配掛けるな……あ」

「え」

ボクの顔を覗き込むのを、顔を逸らして避けつつ、

「なんて言ったの？」

思わず出た本心を誤魔化す様にまた一発。

「あたた」

大げさに頭を抑える理緒。

「行くぞ」

「何処へ？」

「とりあえず……飯」

時間は三時前。

走り回って小腹が空いた。

理緒の手を引っ張って近くのレストランに入る。

「お金」

「奢る。そのかわり、ボクの荷物持ち。それでいいだろう」

バッグを理緒の前に突き出す。

「分かった。それで」

史紀と理緒3

「あ。理緒、お前車に乗れる？」

「乗れるけど？」

「運転出来るかって意味だけど？」

確認しとく。こいつは天然だから。

理緒はグツと親指を立てている。

「乗れるのか？」

「これが答えよ」

更に指を立てた手をボクの顔に近づける。

「乗れるんだな」

「当然」

なんとなく腹が立つが今はその技術が必要なんだから我慢しよう。

「じゃ、とりあえず車を一台。手に入れよう」

「なんで？」

「移動に便利」

「電車の方が楽だよ？ 座ってるだけで目的地に到着出来るし」

「電車は何か問題が起こるとその目的地にも着けないだろう」

「なるほど」

「どこかに無いかな？」

「車屋さんに行けばあるけど。高いよ？」

「うーん」

予算はあまり使いたくないな。

しかし、足は必要だ。

「それに史紀ちゃんは乗れるの？」

「車か？ 乗れんぞ」

「それじゃ買ってもしようがないじゃない」

あはは、と笑う。

「何を言っている。運転するのは」

箸で理緒を指す。

なんのお約束かは知らないが、後を見るが誰も居ない。

「私？」

「以外誰が居る」

から揚げを一つ頬張って答える。

「え、なんで？」

「旅費。必要だろ」

「それは、まあ………ねえ」

「野宿はきついで」

「だからと言って」

「ボクのやる事を手伝うのなら旅費出してやってもいいけど？」

「何、やる事って」

ボクがここに居る理由。風仙界で起きた事、師匠達、才蔵と比奈人の事。

静かに聴く理緒。

「手伝うのなら旅費はボクが持つ。嫌ならそれも構わない」

しばらくは会話も無くお互いの顔を見合わせているだけだった。

動いたのは理緒。お茶を啜り、

「分かった。手伝うよ」

湯飲みを大事そうに持って、

「そんな危険な仙士を放つとく訳には行かないし、ここで起こってる戦争にも関わってるみたいだし、仙士としては止めないと」

天然な理緒の目はいつしか真剣な目へと変わっていた。

「じゃ、これからよろしく」

差し出される手。

それを握り返す。手から伝わる暖かさが嬉しかった。

とりあえず、車をどうしようかと話していたが結論は出なかった。食事も終わったので店を出て、ぶらぶらと歩いている。

「あ。佳奈さんに相談してみるってのは？」

手伝う事はしない、と言った手前恥ずかしいがそれしか方法は無いか。

守備隊の宿舎の玄関口で佳奈を呼び出してもらつ。駆け足でやって来るその顔には微笑が浮かんでいる。

「どうしました」

心に変化が生じたのを期待している様な口調。それを制したのは、

「えっと、車を一台欲しいんですけど」

理緒の天然が炸裂して、佳奈の意気を削いだ。

「車、ですか」

なんの事なのか分からない佳奈に事情を説明する。

「……て事だから、そちらにもメリットはあるんじゃない
うんうんと頷いている理緒。

「確かに、そうです」

決めかねている様子。

「お二人はこれからどちらへ？」

意表を付かれて顔を見合わせる。

「夕音」

頭に浮かんだ地名をそのまま言ってしまった。

「夕音、ですか。ご存知かと思いますが夕音は今跋維党の支配下にありますが」

「大丈夫ですよ」

何を根拠に大丈夫なのかは分からないが、理緒なりに佳奈を説得

しようとしているのは分かるので止める事はしなかった。

「しかし」

「あ。もしかして私たちも跋維党に入るかも、とか考えてるんじゃないですか？」

バツの悪そうな顔をする佳奈。

言い難い事をさらりと言える理緒と一緒に行動する事はある意味正解かもしれない。

「大丈夫ですよ。さっきも言った通り佳奈さん達にもちゃんとメリツトがありますから」

きやるきよると辺りを見回して、佳奈の耳元に口を近づけて、

「私達は向こうに協力している仙士を倒しに行くんですよ」

そう呟いた。

夕音

どうにか佳奈を説得して車を一台手に入れた。

「嘘は言つてないですから」

走り出した車中の中でハンドルを握る理緒は後を気にしながらそう呟いた。

「確かに。ボク達はボク達の為に戦うんだから。結果それは向こうの為でもあるのは間違いないし」

窓の外を流れる景色を楽しみながら土威街道を走り続ける。

湯狭から脱出し日暮れ前に夕音に到着した。

やけに物々しいのが気になった。

「疲れている所悪いが、早速話を聞かせてくれないかな」

到着早々、佳乃がお供を引き連れてやってきた。

「了解。寝ている途中よりははるかにマシだ」

「では」

佳乃の後ろについて行き、本営に入る。

その中には緊張感が漲っている。

「また出陣か？」

夕音占領からは日が経っていない。

慎重に慎重を重ねる佳乃らしくない、かな。

「ああ、上手く行けば次で終わりだ」

「狙いは？」

その言い方でなんとなく分かった。

おそろく、

「園典」

振り返ったその顔には微かに微笑みが浮かんでいる。

「この戦力では足りないだろう」

夕音の戦力を全部出しても足りないだろう。

「南部からも兵を出すから互角かな？」

「それなら、守る方が有利じゃないのか」

「初戦は園典近くの昌機平野。そこで楽軍を徹底的に叩く。そうすれば守備隊の兵数は減るし、他都市の援軍も無い。そうなれば兵の数は同じ。後は士気だがそれも初戦の勝ちでこちらが上だ」

「そんな上手くいくかあ？」

「気を付けるべきは姫遊きゆうだけ。後は問題無いな」

「じゃ、駄目じゃん」

「姫遊は動かない」

「なんでそんな事が言える？ それを決めるのは楽軍の勝手だろ」

「姫遊が動くのは昌機平野戦の後、その後は士気を上げる前に決定的な事件が起こる。そうなればいくら奴でも何も出来ないさ」

「何する気だよ？」

「機に臨み応に変わるんだ」

「意味分からん」

話している間に佳乃の部屋に到着。

比奈人の報告によれば、この剣に因縁を持っている奴が居るって事だが。

「仙士、か」

夕音戦の時に使った力の数倍。

この剣を才蔵から譲られた時に見たあの時の力、それを出せなければこの剣を使う意味が無い。

……俺はまだこの剣を使いこなせてはいない。

それが現実だ。使いこなす為には実戦か。

ぎしっと軋みを立てて椅子に体重を預ける。

「よし」

周辺の警戒に当たっている隊に指示を出して、比奈人の所に向か

う。

「何？ 眠いんだけど」

比奈人の部屋に入る。

どうやら寝ようとしていたらしいが、俺も聞きたい事がある。

無理に起こしている様でなんとなく悪い気がするがこの気持ちは抑えられない。

「すぐに終わる。さっき言っていたお前らと因縁のある相手に会いたくてな」

「今からか？」

「いや、来るだろう。お前を追って顔をしかめている。」

「来るのか？ それなら言ってくれ、自分の事だし」

「いや、そうじゃない。その二人と戦いたいんだ」

寝ぼけているのか、比奈人の頭の回転が鈍くなっている。

「つまりだな、蒼空乃極を使いこなすには実戦が一番だと思うんだ。でも並の相手だと何かを掴む前に決着が着いてしまっし、手を抜いても意味が無いだろう」

「そりゃそうだ」

「だが、仙士が相手となれば」

「ふーん。ま、好きにしなよ」

再びベッドに潜り込んで行く比奈人。

「ああ、とりあえずお前を囿にするかなら返事が無い。」

「おやすみ。ゆっくり休んでくれ」

期待はしているが信じる事の出来ない相手に声を掛けて部屋を出る。

夕音の決闘 1

車での移動がようやく終わりを告げようとしている。

ボク達は夕音の手前の街『真菜沙』まなひ市に到着。

降りた瞬間にでた一言が、

「体……痛」

だった。

狭い車内からの解放がこんなにも気持ちのいいものだとは知らなかった。

思いつきり体を伸ばし、体中に行き渡る血液の流れを実感しつつ、理緒の方をみるとやはりボクと同じ様に天高く腕を伸ばしている。

「つつかれた」

同感だ。ボクは一切運転してないが。

「さて、これからどうしようか？」

「とりあえずは」

お腹を擦っている。

「そうだな」

夕音を目前に望んで食事を取る。

「さて、行くか」

食事を終え、颯爽と車に乗り込む。

土威街道を後、三十分程南に走ると夕音に着く。

車窓を走る風景を見ずに、目を閉じエンジン音に耳を傾ける。

気合と不安がボクの心に入り混じる。

師匠達を相手にして無傷だった二人。その二人とこれから戦いに行く事の不安。

しかも師匠に遠く及ばないボクと理緒だけで。

今更……だな。

覚悟は風仙界を出た時に決めている。

「よし」

「もうすぐ着きますよ」

黙ってハンドルを握っていた理緒にボクの声が聞こえたのだろう。「分かった。理緒は少し休んでいてくれてもいいぞ」

「大丈夫ですよ。そんな柔な体はしてませんから」

夕音の街が見えてきた。

箒星を左手に装着して到着を待つ。

夕音の手前の丘の下に車を止めて、夜を待ち夕音に徒歩で向かう。流石に警戒している兵が居るが、それらをやり過ごし夕音の街にたどり着いた。

辺りは真つ暗になり、街灯も何も無い。

ここまでは思い通りだ。

「ここからはどうやって？」

考えてはいない。

湯狭は城壁というより塀といった感じだったからこっちも同じと思っっていたんだが、夕音は完全に城壁だ。

登る為の用意など当然していない。

しかし、いつまでもこっやって居ても意味が無いし、見つかったら面倒になる。

うーん。

登るにも手をかける場所すら見当たらない。

弱ったな。とりあえず、城壁に沿って移動する。

しかし、歩いていてもなんの考えも浮かばない。

こっようになったらなる様になるしかないだろう。

うん。そうだ。その通りだ。

「史紀ちゃん。何も」

理緒がボクの考えを察知して何か言いかけるが、口元に指を当てて、

「静かに」

素早く左右を確認して、城壁に体を寄せて息を潜めて待つ。

「何？」

耳元で理緒が囁く。

「遠くで人の話し声が聞こえた様な気がした」

そろそろと足を動かして声のした方へと進んでいく。

真つ暗な世界に目も慣れて、視線の先には二人の門番らしき姿を確認する。

退屈を誤魔化す為に話している。

ボク達に気付いた様子は無い。

後の門は開いている。進入するならここしかないな。

理緒の顔を見て、頷きあう。

相手は二人、ボクは箒星を構えて狙いをつける。

どさつと倒れる音が二回聞こえた。

しばらくはその場でじっと待っていた、

五分経過してから門番に近づいて、様子を窺う。

気を失っている。

それから周辺を警戒しつつ夕音に潜入する事に成功した。

夕音の決闘2

おかしい。と気付いたが入ってしまった以上、先に進むしかない。占領されたとはいえ、人影が全く見えない。兵士の姿さえも。

いない、と分かっているても一応、ビルの影に潜んでいる。

「史紀ちゃん。どうしようか」

「ここまで来たのに引き返すのはアホでしょ」

不安はあるが、気合で誤魔化す。

そつと顔を出し、辺りを確認するが気配は無い。

以前は昼も夜も多くの人で賑わっていたのだから今は街灯が寂しく灯っているだけ。

見回りすらないのか。

それなら隠れている事が滑稽だが、大手を振って通りを歩く気にもなれない。

夕音の街をこそそと駆け巡る。

「今更なんだが」

人の気配すら感じる事無く、一時間以上隠れていた。

その間もあちこち移動していたが誰も居ない。

遠く離れた住宅街らしき所には、ぽつりぽつりと明かりが見えるがあそこまでは……遠いので行きたくない。行くとすれば最後であつて欲しい。

「何？」

がこん、と大きな音を立ててジュースを落とす自販機。

潜入なのに音に気を使う事さえしなくなった。

自販機の横に腰を下ろし、ぷしゅ、と開けて一口飲んで、

「比奈人。何処に居ると思う？」

ボクの言葉に顎に手を当てて考える。

「さあ、宿舎じゃない？」

最もな答え。

「それは何処だと思う？」

夕音の街を右往左往。

誰に出会う事も無くさ迷っていた。

「今までに行つた事の無い場所だと思う」
最もだ。

深く頷いて、

「それは何処だ？」

沈黙。

そして、ごくり、と飲む音が聞こえて、

「知らない」

当てる無い旅がまだ続く。

「將軍の言う通りに潜入をさせましたが」

警備隊長の報告を聞いて、ようやく本気で試せる相手に出会えた
喜びに武者震いをして、

「ご苦労」

と、短く答えた。そして俺は剣を携え、

「どちらへ？」

「客人を出迎えに」

警備隊長を部屋に残して出て行く。

その間に振り返って、

「比奈人を起こして、中央通りに来る様伝えておいてくれ。それと
照明を中央通り以外は切れ」

敬礼している彼を残してドアを閉めた。

明かりが消えた。

暗闇に目が慣れるまで理緒と死角を庇いつつ、じつと意識を集中して警戒する。

「史紀ちゃん。気を付けて」

「言われなくても」

走り回ったおかげで体は温まっている。

息を整えて、暗闇を睨みつける。

五分、目も慣れてきたが、襲撃は無い。

じりじりとお互いの死角を庇いつつ移動する。微かな物音、物陰の気配も逃さずに集中する。

目的はなんだ？

ボク達の事を遠くで見ているのか？

それも腹立つな。

「史紀ちゃん。あれ」

真っ暗な街。月や星とは違い、空から照らす明かりでは無く地上から空へと強く放っている明かりがある。

「あそこかっ!？」

理緒と顔を見合わせて走り出す。

夕音の決闘3

「こつちか」

誘う様な街灯の明かり。

畏でも良い。この先に居るのは間違いなのだから。

いくつかの角を曲がった先居たのは、

「お。もう来たのか？」

とぼけた声の主は比奈人。

「見つけた」

箒星を走らせて比奈人に向かう。

「おい。待って。この先には蒼空乃極が」

「問答無用っ！！」

「「えっ!?!」」

前後から驚きの声が聞こえた。

「おい。それが目的じゃないのか？」

ボクの攻撃を避けながら、比奈人が呟く。

「ついで。そつちは任せた！」

「マジですか!?!」

理緒の声を背に比奈人の懐に潜り込んで、腕を突き上げる。

「マジかよ」

後に飛んで避けられた。

持っている薙刀を構える素振りすら見せない。

まだ、ボクを甘く見ているな。

それなら構える前に終わらせよう。

本気の比奈人と戦いたい訳じゃない。

ボコボコにするのが目的なんだ。甘く見ているのならボクにもチャ

ンスはある。

箒星を左手に戻し構える。

「力の差は分かっているだろうに」

肩に担いだ薙刀が月を照らす。
「さあ、物分りの悪い方なんで」

良いの？ ホントに？

なんとなくイケナイ様な気がしないでもないが本人がそう言っているのだからしょうがない。

私は街灯を頼りにまっすぐに走っている。

後から聞こえていた剣戟は徐々に小さくなっていき今は私の足音だけが響いている。

遠くに人影が見えた。

その直後、突風が吹きすさぶ。

「くっ」

目を閉じ、腕で顔を覆う。

「この風は？」

「おや、一人か。報告では二人だと聞いていたが」

男の声。

手には見ただけで分かる、上級仙具が握られている。

「まあいい。これの力に俺がどれだけ耐えられるか。試させてもら

おう」

剣を構える。

青く朧に輝く剣。人間の力でここまで輝くとは思っても見なかった。

それだけの力を持っているのか。

気を引き締めて、男と対峙する。

「その剣は貴方の手に余る代物。返して頂きます」

「それは無理な相談だという事は分かっているだろう」

地を蹴り、向かってくる。

「それでは」

ひゅん、と鞭を撻らせて男の足元に警告と力量を知らしめる一撃を見舞う。

私の心を見透かし、鞭を避けようともせず突進してきて私の首元に剣を突きつける。

「油断しない方がいい」

目の前には殺気を帯びた眼差しを持った男。

その気なら私の首は……。

考えただけで背中に一筋の汗が伝う。

「その様ですね」

鞭を返し、背後から攻撃する。

左に避け距離をとる。

鞭は空を切り、地面を叩く。

「大人しく返す気が無いのは分かりました」

「分かってもらえて嬉しいよ」

「では。参ります」

夕音の決闘 4

比奈人の強さは湯狹で計ったと思ってたけど……甘かった。薙刀を振るう速さとボクの攻撃に対する読み。それらが段違いに速くなっている。

払われる薙刀。受けるには重過ぎる一撃。

それなら。手を当てふわり、と体を浮かせ薙刀の上で逆立ち。体を捻り左足で蹴る。

空を切る勢いのまま、接近戦に持ち込む。

突きから足払い。薙刀の柄がボクと比奈人の間に入り狙いが逸れる。薙刀に筭星を当てて、射出。

至近距離。ギリギリで避けるのは流石、としか言い様が無いな。

つか、この距離で避けるか？

距離を取り、対峙する比奈人の顔にはうつすらと赤い筋が浮かんでいる。

息を整え、先手必勝。

とんとん、と左右にステップを踏んで近づく。

薙刀に腕を絡ませて更に前へ。

薙刀に力を込めたのを感じた。振り上がるその瞬間に腕を放して無防備な腹部に一撃。

……痛〜。

比奈人の蹴りがまともに顔に入った。

うわぁ……口の中に嫌な味が広がる。

口の中に少し溜まった赤いものを吐き捨てて、唇を湿らせる。

してやったりなその顔がムカつく。

もう一度、同じ動きを繰り返す。

今度は薙刀をしゃがんで避けて、比奈人の右腕に絡みついて肘を本来曲がる方とは逆に曲げた。

加太谷纏わりつく風。『纏風』

躊躇わない。

手加減もしない。

みしみしと軋む腕を強引に振り上げて、ボクごと地面にたたき付けた。

思いつきり背中を打ったが、痛手は向こうの方が上だ。

その様子は聞くまでも無い。余裕を見せていたさつきまでとは違い表情が歪んでいる。

腕はだらり、と垂れていて薙刀を持っていない。

もう少して完全に潰せたのだが……。

痛みと油断していた事。それらに対する怒りで心中は穏やかではないだろう。

このまま一気に。と行きたい所だがもったいぶってじりじりと足を動かして、苛立たせる。

冷静さを無くせば、瞬時の判断が鈍る。

ボクの勝機はそこにある。

じりじりとゆっくり足を動かして迫っていく。

比奈人は薙刀を左手に持ち、ボクを睨んでいる。

気圧されそうな殺気。怯む事は無い。表情に出すな。油断するなよボク。

一気に左に飛んで薙刀の反応を遅らせるが、読まれていた。

しかし、薙刀の反応は流石に遅れている。

二歩下がったが切っ先は鼻先をかすっていった。

薙刀が通り過ぎて、箒星を打ち出す。比奈人は顔を動かす事無く起動を見切っていた。

振り抜いた薙刀を返し、払い切り下ろす。

箒星に意識を乗せて、起動を修正する。

狙いは、

箒星の接近に気付いて薙刀で防ごうとするが、ボクがそれをさせない。

そっと足を進めて、接近戦に持ち込む。

ボクに目を向けた瞬間に箒星の軌道から大きく外れようと右に避けるが先に回り込んで蹴りで牽制する。咄嗟に防いだが為に、移動が遅れた。

箒星は狙い通りに右腕にヒット。

鈍い音と痛みを堪える噛み締めた声ははっきりと聞こえた。

薙刀を放り出し、右腕を押さえている。

チャンス。一気に攻めたい気持ち抑えて、唇を上げて挑発する。

逸る気持ちとは裏腹にじりじりと動く。

焦るな、慎重に。

分かってるな。ボク。

夕音の決闘5

地を這う鞭「燕舞^{えんぶ}」

その名の通りに淡く蒼く輝く「蒼空乃極」

人間が持つていてもこの力。流石って所か……なあ！

気を抜けばやられる。

今も目の前を蒼い光が駆け抜けたところだ。

「伏^{ふく}」

私の声に反応して鞭が真っ直ぐに地面を這う様に相手に向かう。

蛇行する事無く。真っ直ぐに向かう。

射程に入ると、そこから角度を変え飛ぶ様に攻撃する。

「流石仙具。我々の武器とは違うな」

淡い光が輝きを増す。

振るわれる刀身から強い風が巻き起こる。

反射で目を閉じ。開けると目の前には男が迫っている。

「このっ」

鞭の手元を引っ張り、触れる直前に力を抜いて衝撃を無くす。

「この状況で、見極めるか」

驚かれてはいるが、仙士相手なら無理だったけど人間相手だった

のが良かった。

とは言えないが。

「参^{さん}」
すつと後ろに飛んで、手首を返して鞭に意志を乗せる。

「参^{さん}」

背後からの気配に身を避けて、更に私の攻めは続く。

「翔^{しょう}」

鞭を上空に飛ばして、

「爪^{そつ}」

頭上から鞭を降下させる。

移動し避けようとするが、私の手首の動き一つで軌道は変わる。

男の足元に突き刺さる鞭。

「詰が甘いつ!!」

剣を握り、男が迫る。

「仙具の扱いは私の方が長いのよ」

鞭を操り、ひゅんひゅんと空を切る。

男はそれに構う事無く、足を止めない。

距離は……およそ八メートル。

間合いギリギリ。

「籠かご」

四方からの攻撃には避ける場所など無い。

空を切る音と同時に打ち据えられる音と苦悶の声が聞こえた。

それなりに使いこなしていたとは言え仙士ではなく人間。

仙士の攻撃をまともに受けて立っていられる訳が無い。

気を失って倒れている男から『蒼空乃極』を取り、

「さて、史紀ちゃんの方は」

「呼んだかな？」

!!!

男の声!?

まさか、

振り返ると、湯狭で会った男は腕を押さえている。

そしてもう一人。そして傷だらけの史紀ちゃんがその足元に倒れていた。

「言わなくても分かると思いますが」

史紀ちゃんに意識は無いのか、下を向いたまま。

ひたひたと流れる血は足元に落ちていく。

「ああ、まだ生きてますよ」

癩に障る声。応じる事に抵抗する心。

「渡すなら貴女達の安全は保障しよう」

選ぶ選択肢は無い。

二人とどれ位の時間睨み合っていたのだろうか？

選択肢が無い以上、こうしていても史紀ちゃんの苦しみが増すだけなのに。

答えは決まっている。

私は『蒼空乃極』を男達に向かって放り投げた。

「賢明な判断だ」

それを受け取り、史紀ちゃんから離れる。

どうやら、約束は守ってくれそうだ。

ここで意外な展開が起こった。

剣を受け取った男達に向かつて一条の光が飛んでいく。

不意を突かれた男達。その隙に史紀ちゃんに駆け寄り抱き抱える。

「下がれっ!？」

後ろから聞こえた声は私を追い抜いて男達に向かう。

「え、な、何？」

事態が飲み込めずに居る私を後から引つ張る力が働く。

「邪魔だ!！」

「きやつ」

史紀ちゃんを庇う様に倒れる。

どさつと硬い地面に叩き付けられて、痛みに顔を歪める。

「痛たたた……なんなのよ」

倒れたまま前を見ると、四人の男達が戦闘を始めている。

史紀ちゃんを抱き抱えたままそれに魅入ってしまう。

史紀ちゃんと同じ飛盾使いと斧使い割って入ったらしい。

そして、剣を振るう男と左手だけで薙刀を振るっているのが先程睨みあっていた男達。

力量は互角、と見えるが薙刀使いは片腕。ハンドテが大き過ぎる。

落ちた『蒼空乃極』を拾い、鞘から引き抜く。

さつきよりも一際大きく蒼い輝きを放つ剣。

振りぬいた瞬間、大きな衝撃波が辺りを覆う。

それを受け切った後には誰も居ない。

「逃げたか、追うか？」

「いや、それよりも」

盾を使っていた男がこっちを見る。

敵じゃないのは分かるが、それを向こうも認識しているのかまでは分からない。

「詳しい話をしましょうか」

盾を収めて、にこやかに笑う顔はなんとなく史紀ちゃんの雰囲気
に似ていた。

夕音の決闘6

座り込んでいる私達の前に二人の男が居る。

雰囲気、というか先程の行動から考えて敵では無いとは思う。

「さて、まずは自己紹介からだな。俺は『詩月』史紀と同じ師匠に師事していた。で、こっちが『大蛇丸』おろちまる『地仙』ちせんの仙士だ」
「よろしく」

詩月と名乗った方は左手に史紀ちゃんの盾より一回りほど大きな盾。華奢で穏やかな雰囲気が漂っているが、どこことなく史紀ちゃんに雰囲気は似ている。

大蛇丸と呼ばれた方は長柄の斧に筋肉質な体格。戦闘時に目は獐猛な野獣の様に輝いていたが今はその輝きは無く値踏みするかの様な目をしている。……なんとなく胸元を隠してみる。

「で、あつちで倒れているのは？」

二人の仙士が逃げた事で緊張が途切れたが、ここは紛れも無く危険地帯。

「と、とりあえず、ここから離れませんか？」

向こうで倒れているのは跋維党の幹部らしき男。

流石にこの街の兵隊さん相手に大立ち回りをする訳にはいかない。

「それもそうですね」

「じゃ、行くか」

二人を先頭に史紀ちゃんを抱えて後に続く。

夕音の街からの脱出は思いのほか簡単だった。

もつと抵抗、というか兵隊がわらわらと出てくるかと思っていたのが恥ずかしくなってくる程に。

二人の後に続いてきたのは私達が車を隠した場所の反対側。

「さて、ここならいいでしょう」

私は史紀ちゃんを寝かせて、簡単な治療を行う。

「まずは……」

史紀ちゃんとの出会いから今までの事を話す。

それほど長い付き合いでないのが不思議なほどに史紀ちゃんに惹かれていた自分に驚いた。

私の中でこの子は大きな存在になっていたんだな。

「この無鉄砲さは誰に似たんだか」

「お前じゃないの？」

大蛇丸がからかう様に声を出す。

「俺に似たらもっと思慮深く行動するよ。怪我也治ってないのに勝手に飛び出すなんてする訳が」

声に反応したのか、懐かしい気配に反応したのか、私の膝の上で史紀ちゃんが目を開けた。

「あ、れ。詩月。何してんの？」

ぼんやりとした声と視線。

「お前を迎えに来たんだよ」

「そう……まだ、帰らないよ」

腕で顔を覆う。

「まだ、する事があるから」

「才蔵達を追うか？」

小さく顔が動いた。

「力の差は歴然だっただろう」

沈黙。風が通り抜ける音だけが聞こえる。

「それに『蒼空乃極』は取り戻せた。これで師匠達も」

「師匠達、じゃ無く負けたままは嫌だ」

「仇討ちは終わりか？」

「誰、お前？」

大蛇丸は詩月を顔を見合わせて、

「こつちに来て知り合っただ」

詩月が大蛇丸との出会いを簡単に説明する。

「そ。後は一つ。あの二人をぼこぼこにするだけそれが終わったら帰るよ」

「話を聞いてたか？」

「聞いてるよ。差は分かった、後は埋めるだけ」

声に力が乗っていない。

それでもここまで言えるのは、負けず嫌いだけじゃないだろう。

「埋められるか？」

大蛇丸は試すように聞いている。

「才蔵をぼこぼこにする事で証明してやるよ」

大蛇丸を指差して答える。

詩月は大きくため息を吐いて、

「分かった。とりあえず俺達は『蒼空乃極』を持って風仙界に戻る。それまでは決して軽はずみな事は控える。体を治す事に専念している。分かったな？」

「私が史紀ちゃんを見張ってます」

「見張るって」

「すみませんがよろしく頼みます」

詩月は私に向かって一礼して、治療費と滞在費をしてそれなりのお金を残してくれた。

「いいな、史紀。理緒さんに迷惑掛けるなよ？」

「うるさい。いくつだと思ってるんだ。早く帰れ」

この状態で悪態を吐けるのは流石史紀ちゃん。

夜が白み始めた頃には、二人の姿は遠くに消えた。

私達も車に戻って史紀ちゃんを後部座席に寝かし、近くの街を目指して出発進行。。

首都攻防戦 1

吹き抜ける風の向こうに広がる雄大は大地。

東には穏やかに流れる『加名差川』

西から南にかけて聳える『菜弧山脈』

ここ『園典』の城壁に登ると、いつも心が大きく羽ばたいていく。

楽の国の首都。振り返ると朝靄に煙る街、いつもと同じ様に暮らしている人々がまだ眠っている。

「『姫辰』」將軍

城壁に登ってきた『藤邑』少尉。

まだ若いが有能な女性。まあ、私の秘書的な立場なのが不思議な程に。

「何か」

「勝手に出歩かれるのは遠慮して欲しいのですが」

表情を変えず、かといって呆れた様子も無い。

「散歩位構わないだろう」

「言ってくださればよろしいのですが」

「いちいち言うほどの事でも無いだろう」

「將軍の行動を知っておくのが私の仕事ですので」
なるほど。

「分かった、で、今日の予定は？」

「十時より軍議です」

……意味も無く答えの出ない軍議に意味など見出せないのだが。

「出席は」

「分かっている。ちゃんと出るよ」

「サボりたい。という気持ちは当然この優秀な秘書には見抜かれている。」

「……」
家柄や地位で戦争に勝てる戦争など無い事に気付くのにどれ程の血が流れれば良いのだろうか？

「ここは『昌機平野』で敵を迎え撃つのが上策です」

「敵をそこまで進軍させて守りきれぬのか？」

「腰抜けの発言は控える！」

「万一敗れば園典の防衛はどうされるおつもりか？」

「戦う前から敗戦の事など語るものではない！！！」

当然、主戦派は軍と政府上層部が中心、非戦派は前線で命を張って戦う仕官が中心だ。

主戦派は非戦派を腰抜けと罵り、蛮族と怒鳴り返す。

「王！ 昌機平野にて敵を迎え撃ち、その勢いを持って夕音を落とすのが最上です！！！」

「危険すぎる！ 各地の都市と連携して夕音奪還を！」

「いつまでも軍議をしている場合では無いのは、皆も分かっていると思う」

王が結論を出す。

皆が王を見る。

「我が楽軍の精鋭を持って敵を迎え撃ち、反乱の首謀者、礼儀を討つ」

王の決断が軍議の結果。

その結果が自分の望むものでは無いとしても従うのが我等の務め。

私はこの戦いをいかにして最小限の被害に抑えるのか、に思考の全てを傾けていた。

「お疲れ様です」

自室に戻ると、藤邑がソファでのんびりと紅茶を飲んでいた。

目の前には雑誌が広げられている。

「紅茶でいいですよね」

私の答えを聞くまでも無く紅茶を淹れてくれる。

「どうになりましたか。軍議の方は」

「私の考えた中では最悪だな」

「どうなさいますか？」

「とりあえず、出撃部隊によって行動を変えないとな」

「誰が出撃なさるのですか？」

「私では無いのは間違いない」

「それはこちらにいらっしやるので分かっていますが」

私は主戦派からも非戦派にもついていない。

なので、軍部や政府からは距離を置かれている。

「敗れるのは必定。そうなった場合、園典での内部分裂そして同士

討ちが始まるな」

「楽の滅亡も近いですね」

まるで他人事の様子。

「で、どう動きますか？」

表情は変わらない。

「どうもこうも無いよ。事態を見守るだけだよ」

窓の外は我等の心配を他所に澄み渡っている。

首都攻防戦2

王の決断で終わり、始まった昌機平野の戦い。

わずか、三日で楽軍は敗走し、敵軍に包囲された園典。

市民はいつ攻めてくるか分からない緊張と恐怖の中で過ごしている。兵は半数に減り、主戦派も意気を失い、非戦派は責任問題を追及している。

「のんきですね」

相変わらずマイペースな藤邑。

「君が言えた事では無いと思うが……まあいい」

私も藤邑に倣い、ソファに深くもたれ掛かり紅茶を楽しむ。

「で、どうなさいますか？」

天井を見る事で分かってもらえた、と思う。

打つ手が無い。

物資は互角でも兵は跋維党。いや、跋維軍の三分の一。

士気に至っては先の敗戦の後だから無い。

兵の恐怖が市民に移り、反乱が起こらないだけマシと言つものだ。

「このまま、負ける気は無いのでしょうか」

「それは、な」

しかし、策は無い。

敵が行動する前に手を打たないと、焦りが思考を鈍らせるのは分かっているが……。

深く息を吐いて、膝を叩きカップに残った紅茶を飲み干して立ち上がる。

「散歩してくる」

「お供します」

珍しく藤邑が着いてくる。

確か、宮殿を出た時は朝だったはず。気付けば日は赤く染まっていた。

いつもは人並みが途切れる事の無い市外には人影は無い。

「敗戦のシヨックは思った以上ですね」

藤邑がどことなく嬉しそうに声を出す。

「その上、包囲されているんだからしょうがないだろう」

その責任問題で軍議は揉めている。

今、しなければならぬのはこの局面をいかに打開するか、という議論はされていない。

そんな軍議に参加する気にもなれない。

つまらない権力闘争の坩堝となっている宮殿と悲壮感と恐怖が満ちている市内。

さらに歩き回り、夜になり、思いついた名案も無く、事態の深刻さと何も出来ない自分に苛立ちながらも宮殿に戻ってきた。

「とりあえずの事態は分かった。後は」

「將軍の知恵に期待しますよ」

藤邑は私を追い抜いて、

「將軍」

声を潜めて手招きをする。

階段の踊り場、花壇に身を伏せ耳を澄ます。

争う声が聞こえる。

……この声は。

「早く乗れ、賊はそこまで来ているのだぞ！」

「父上、国民を置いて逃げるなど」

反対しているのは第二王子の『伯明』王子。

最悪の……展開だ。

花壇に背を預け、天を仰いぐ。

藤邑は笑うのを堪えている。

「国民を置いて逃げるのではない。ここを離れ事態の推移を見守り、時を計り事を起こすのだ」

「残された園典の市民はどうなりますか!？」

「軍が残る。それに賊もここを焼き払うなどしない」

「それに、この楽のどこに逃げるのですか? どこに居ても楽に居る限り跋維との戦いからは逃げられませんか」

「楽には無くとも隣国『静』^{せい}にはある」

「他国に逃げるのですか、国民を見捨て!？」

「見捨てないと何度言えば分かる!？」

「その様な事をして、国民の信を得られるとお思いですか!？」

「われ等が滅びれば楽は終わる。それだけは避けねばならないのが分からののか!？」

……全く、何を言おうと国民は自分だけが逃げたと思うだろう。

昌機平野の敗戦、その上王が逃亡したとなれば……。

後からは怒鳴りあう声が聞こえていたが、車の扉が閉まる音と走り去る音が聞こえた。

逃げる王。

「將軍、王子は残った様ですよ」

留まった王子。

「藤邑」

「はい」

私達がいる場所から離れた所に人の気配を感じた。

見られた?

いつまでも隠せる事では無いが、このタイミングはマズイ。

藤邑と目で合図を交わし、私が動いた瞬間に逃げ出す気配。

その反対を藤邑が風の様に追い詰めて、押さえつける。

「手荒な真似は止せ。とりあえず……」
がさつ。

その後、もう一人居たのか？

「どうしますか？」

男を押さえつけたまま、聞くが気配は遠くに消えて行った。

「陽動か」

押さえつけた男に事情を聞く。

食料と金を受け取る代わりにこの時間ここに居ろ、と言われらしい。間違いなく相手は跋維党。常に先手を打つ読みには驚かされる。

と同時に心に湧き上がる好敵手への敬意と負けたままでは終われないと叫ぶ感情。

首都攻防戦3

「王子がお呼びです」

宮殿の自室に戻り、今後の事を考えていると王子からの呼び出し。

王子が待っていたのは、謁見の間。

いつもは外交や式典に使用されている。豪華で気高く何百年もの間、この国の歴史を見つめてきた空間。過去の偉大な王や人物を見てきたこの空間は今の王をどの様に評価するのだろうか？

気にはなるが知る術が無いのが、良かった様な、残念な様な。

玉座の前に王子は一人座っていた。

その姿には無念と苛立ち、そして絶望を背負っている様に見える。

「やあ、呼び出して悪かったね」

「いえ」

すらりと伸びる背、人込みの中に居ても頭一つ飛び出す長身。

それに見合ったがっちりとした筋力。

王子と言う印象とはかけ離れた体格が今は小さく見える。

「今回の事は他言無用に。と思ったが」

「それは無理かと。あの場にはもう一人居ましたから」

頭を掻きながら王子。

泣きたい気持ちも混乱する理由も分かるが、

「今は王の事より目前の跋維党を攻略するのが先決かと」

「そうは言っても、昌機平野戦でこちらの兵は半数、それに向こうは増えているではないか」

昌機平野戦の時、こちらは十万に対し跋維党は三万。

今は、こちらが二万に跋維党は増援とこちらの降伏兵がついて七万に膨れ上がった。

「三倍の兵力をどうやって覆すというのだ、それに」

「このまま楽を滅ぼしますか？」

「この問答に意味は無い。」

戦うか、否か。

兵がどうか、王がどうか関係なく、ただそれだけを聞きたい。

「それは」

言葉が詰まる王子。

「滅ぼしたくないのなら戦うしかありません」

「しかし」

「逃げる王をなんの為に引き止めたのですか、戦う為では無かったのですか？」

顔を伏せ、ぎりぎり歯を軋ませる。

「勝ち目がどうかは今の時点では分かりません。しかし戦い方はあります」

私の言葉に王子は顔を上げる。

「それは……本当か？」

「この状況で冗談が言えるほど、空気が読めない訳ではありません」

「どの様に戦うのだ？」

「それは……」

静かな謁見の間。王子と二人私の策を話す。

「皆に集まって貰ったのは今後の事を話す為だ」

軍議を開く。場所は謁見の間。

王の椅子には王子。

その他の出席者は各々手近な席に着く。

今回の軍議の出席者は以前と違い、少佐や大尉といった階級の者も参加している。

昌機平野で戦死された将校も居るが、大半は来ないし連絡がつかない。

「今後……ですか」

王では無く王子が軍議を取り仕切る事に疑問を持つ彼ら。

「まず、王はどちらに？」

王子の顔が歪む。

「王は……」

言葉が続かない。

ざわめく一同。

最悪の事態を思い描いているに違いない。

しかし、それを上回る事態を王は引き起こしたのだ。

「王は……無事だ。今は静に向かつておられる」

何故？ と当然の疑問を問いかける。

「王は……楽の国をわれ等に任せて」

「逃亡されたのですか！！！！」

ざわめきが混乱へと変わる。

「落ち着け、諸君！！」

声を張り上げて冷静さを取り戻させようとするが声は届かない。

王子に詰め寄る者、謁見の間から出て行く者。

「扉を閉じる」

今は、というかこの事態を乗り切る為には一人でも多くの人材が必要なのだ。

「少将。これ以上ここに留まっても意味は無いでしょう。王が国を捨てたのに何故われ等だけが命を張らなければならないのですか！？」

「貴官達は王を守る為に国に仕えているのか、それとも国民を守る為に仕えているのか？」

玉座の前で大きく声を張り上げる。

首都攻防戦 4

静まる間。

「私は民を守る為にここにいます」

「私も將軍と同じくその気持ちを持っています」

私の声が続いて響く声。

声の主は『未麻^{みあさ}』中佐。

先の戦いでも殿を務めて、被害を軽減した勇士。

「私も王族の一員としてこの国を民を守る為に命を懸けよう」

王子も決意を込めて声を張り上げる。

「王族は逃げたじゃないか」

眩きが聞こえた。

声の聞こえた方を睨みつける未麻中佐。

それを手で制す王子。

「それは」

「今はそれを行っている時では無い。事態をこれ以上悪化させない

為にはこの事を国民に知らせるほうが先決だ」

私の提案に静まった間がざわつく。

「何を!？」

「そんな事をすれば軍の威信が」

「暴動が起きるぞ」

「敵によつて知らされるよりはマシだ!！」

声の限り叫ぶ。

「今回の事は隠しきれぬ事では無い。それならこちらから公表して

敵の先手を打った方が良い」

「誰がそれを？」

適任者は一人しか居ない。

王子の方へと向き直る。

「王子。貴方しかいません」

一瞬、たじろいだが、
「分かった。私から話そう」

準備はすぐに整えた。

「楽に住む国民にお伝えしなければならぬ事が起きました。……
現在、我が楽は反乱を起こした跋維党と名乗る組織と戦闘を繰り広
げております」

王子は前見て話している。

原稿など無い。自らの言葉で話してこそ伝わる。
伝わって貰わないと、戦争どころではない。

「昌機平野における我が軍の敗走により……」
俯いて、唇をかみ締める。

これ程屈辱的な報告は無いだらう。ある意味敗北宣言なのだから。
意を決し、顔を上げて、

「王は……後事をわれ等に託し……ここ園典より……離れられまし
た」

フラッシュが眩く光る。

王子は顔を伏せる事無く正面を向いて、

「王の取った行動については以上です」

次々と質問が飛ぶ、何故逃走したのか？ 何処へ？ 市民達を見
捨てたのか？ 等。

それらの質問に王子は王族として一人の国民として答えていく。

そして最後に、

「楽の王族として私の命は楽と共にあります。この戦争が終われば
王の取った行動に対する責任を取らさせて頂きます。それまでの間、
この命。生かしておいて欲しいのです」

頭を下げる。

この気持ち国民に伝わるといいのだが……。

「先手を打たれたな」

夕音の宿舎。

傷ついて前線に出られずに療養中のベッドの上で放送を見る。

「どうしますか？」

副官の『白亜^{はくあ}』がテレビを見ながら聞いてくる。

「とりあえず王の逃走ルートに伏せた兵は引き上げだろつ。もう意味が無いしな」

「了解。その様に伝えておきます」

指示を出しに部屋を出る白亜。

あの戦いの後、才蔵達は姿を消し、あの『蒼空乃極』も無くなっていた。

どうやら上手く使われていたようだ。

そう考えると腹立たしくもあるが、貴重な体験をしたと思う自分も居る。

ま、このまま終わる気は無い。仙士と言っても手が届かない相手では無いと分かった、

再び見える事があればこの借りは返そう。

園典。

王子の放送の後、将校や兵達に選択の時間を与えた。

残るか、去るか。

去るのなら追わないし罰を与えるような事もしない。

残るのならこの国を守る為に戦って欲しい。

考える時間は夜明けまで、とそれだけを伝えた。

政治家や軍の主戦派、非戦派。地位や名誉を着飾った連中は殆ど逃げ出した。

「將軍は残りますか？」

「お前は？」

藤邑と部屋で紅茶を飲んでいる。
相変わらず、のんびりしたものだ。

首都攻防戦 5

夜が明けた。

うつろな空気に支配された園典。

「意外ですね」

それがどっちの意味なのかは分からない。

逃げ出した市民や兵が多かったのか少なかったのか。

私の思いとしては少なかった。

「しかし、ここから逃げても跋維党以外の盗賊に襲われなければいいのですが」

「それは大丈夫だろう。王が逃げた方には跋維党の伏兵が居たはず。それらと正面切つて亜炉そう組織はないだろうから」

「なぜ、跋維党の伏兵は王を狙っているのなら援護を出すべきではない？」

「いや、奴らの狙いは王の逃亡映像を流す事だった。しかし、王子の演説によってその意味は失われた。奴らが伏兵を置いてもそれほど意味が無い」

「市民を討つ事は？」

「略奪をしているのは統制から外れた部隊だ。伏兵には向かん」

とは言つても確実では無い。

私の予測通りに配置していてくれる事を祈るだけだ。

軍議が始まる。

残った兵は一万弱。対する兵は七万。それも少なくとも。

「兵力の差をどの様に埋めるか、が今回の戦いの要です」

「他都市からの増援は？」

「現状、期待は出来ません」

王の事、昌機平野戦。色々と不利な状況に置かれている。

「將軍の表情から何か策がおりかと」

未麻中佐は他の將兵とは違い、この状況にも臆する所が無い。

「兵力差は埋められる。問題はこちらの士気。その問題がクリアされれば勝利は確実になる」

私の策は、

「同士討ち。それしか無いかと」

上手く行くのか、どの様にやるのだ、等と懐疑的な言葉が飛び交う。

「將軍」

王子の言葉で私は言葉を続ける。

「七万と言つても一箇所に留まっているのではなく、ここ園典を東に二万、西にも二万、南に三万が包囲する形で布陣している。その後には本体が控えている」

「一箇所ずつ破つていくのですか？」

「それをしていては連携を取られて園典が陥落してしまう。まずはこちらは三隊に分かれる。第一陣四千は王子が率いて南の陣を破る」
王子出撃に一同から声上がる。

「四千で三万に突っ込むのですか！！」

「王子の身に万一の事があれば」

「この戦いはただ勝つだけではなく、王族の信頼を少しでも取り戻す事も必要だろう！」

置かれた状況とまだどこか緊張感の無い將校に対して声を荒げしてしまう。

息と心を落ち着けて、

「第一陣には未麻中佐も出してもらおう。そして第二陣は東西の軍を相手に園典の防衛。こちらは五千の兵でやってもらおう」

四万に対して五千。よほどの駆け引きに長けていないとすぐに陥落する。

「残る千は南の両陣の間に割って入り、後陣を叩く」

「千で一万に向かうのか？」

「はい。第一陣が破った陣から党蔵した敵兵は後陣に向かいます。その直前に後陣を強襲し同士討ちを行わせませす」

「そんな上手く行くのか？」

「相手は昌機平野戦の勝利、そして王の逃亡でこちらを甘く見ているでしょう。討つて出るとは考えたはいない筈。そこに二万の兵とはいえ四千の決死の突撃を加えれば敵は浮き足立ち戦つよりも逃走します」

「後に下がった所で新手の一万との戦いがありますが」

「そこで第三部隊が間に入り攻撃をかけます。そうすれば敵同士争いますよ」

「そんな上手く」

「行きます。前は盗賊上がりの部隊、礼儀に対する忠誠などありません。それは東西の部隊も同様です。気をつけるのは後陣の一万と北部に陣取っている伏兵それだけです」

北部の兵の事を説明する。

「北部の兵はどの様に対応されるのですか？」

「それらはもう居ないとは思いますが、居たとしても少数。第二陣が油断せずに居れば対処できます」

「一万対一万なら、後は土気の問題ですか」

「それは第一陣で王子が上げてくれると信じてます」

王子と目が合う。その目には覚悟と信念に満ちた力強い光が宿っている。

「任せてくれ」

首都攻防戦 6

日付が変わり、現在午後三時。

城門の前には装備を整え隊列を組み開門の時を待つ兵が四千。

「開門！！」

王子の声が響く。

整然とした兵達からは静かな闘志が漲っている。

勝たなければ国は終わる。ここに居る皆で家族を国を守ると誓い合った兵達。

「王子、御武運を」

頷いて、開門の時を待つ。

地響きを立てて視界が広がっていく。

全員が意を決して、

「突撃ー！！」

王子の号令の下、我先にと飛び出していく。

「退けえ！！」

アクセルを吹かして敵兵を蹴散らしして前に進む。

敵陣までは距離があったがこっちが出てこないと決め付けているなんの備えもしては居なかった。

体勢を整える前に敵陣前に殺到する我が楽軍。陣門を破るのも時間の問題。

連携の取れていない攻撃。陣から出てくる敵を蹴散らし突入の機会を窺う。

「王子っ！！」

王子が敵の一角を突破して援護に来てくれた。

「無事か？」

その問いには敵を戴す事で答えた。

「流石だな」

「話している暇はありませんよ」

「そうだな」

王子の下に無群がる跋維兵を次々と倒して、開門の時を待つ。

辺りは赤く染まり、地面さえ見えないほど倒れている兵達。

そして、門が開かれ突入する。

抵抗はあるが、命を惜しんでの時間稼ぎ。命を張り前に出る我が軍の敵ではない。

「追撃を掛ける！！」

退かず、前に前に。

敵にはこちらの勢いを見せ付けて、恐怖させる。
それがこちらの目的。

その為には、

「続けー！！」

剣を振り上げて、敗走する敵を追い立てる。

「未麻中佐！！」

正面から突進してきた跋維党の指揮官らしき男。

「お前がここの指揮官か」

「跋維党大尉『採等』^{さいとう}」

槍を受け、目前で睨みあう。

「その首を頂こう」

「やってみろっ！！」

力で押し返し、アクセルを踏み込んで槍を交わす。

速い突き。槍裁きも大したものだ、ただの盗賊のでは無い事を証明する腕前。

だが、

「俺の敵ではない！！」

一閃。

バイクが乗り手を落として走っていく。

「採等大尉が討たれたー!!!」

近くの兵の叫びが木霊する。

それが軍全体に広がり、武器を捨て我先にと逃げ出していく。

「西門の方へ銃撃を加えて下さい」

城門に指示を出す。

「東門の敵が城門に近づいたら側面から攻撃を、逃げ出しても追わない様に」

今日五度目の出撃を控える『都井』少佐。

「了解した」

階級は私の方が下だが、將軍の策を遂行できるのは私が適任だと
言ってくれたので遠慮なくそうさせてもらっている。

「『周運』少佐は
大佐の援護を」

「了解」

「『野市』中佐は西門の敵が引いたら追撃する様に伝えて置いて下さい」

都市中央から次々と入ってくる情報を整理して支持を出す。
守るだけなら難しくは無い。

開戦から二時間。日が西に傾いた頃に、

「少尉、前線からの連絡です!!!」

敵陣陥落の報が入ってきた。

南には黒い煙が真っ直ぐに立ち昇っていた。

「勝利は近い。各員、気を抜く事無く奮闘を」

ここを守る五千の兵に陥落の知らせと勝利が近い事を伝える。

黒煙の南に陣取っている將軍に目を向ける。

ここまででは狙い通り。詰めは頼みますよ。

首都攻防戦 7

夕闇に立ち上る黒煙を眺める。

「そろそろですね」

「ああ。気を抜くな」

これまではこちらの予測通りに運んでいる。ここで詰めを誤れば全てが水の泡。

「『姫歌』無茶をするなよ」

「その言葉は千の数で敵陣に突入する様な策を考えた方に言って下さい」

隣に控えるのは私の娘の姫歌。

軍に入り私のコネを使わずに努力をしている。

今回の配属には色々と言われるかもしれないし、今まで姫歌がやってきた事を否定する事になるかもしれない。しかし、私情を挟んで負ける様なことがあってはならない。

「すまん」

つい口に出た言葉。

「いえ。お考えは將軍と同じです」

その真意を掴み、優しく微笑む。

その配慮を見込んでの配属。この死線で生き残れるのは、兵を生き残させる事の出来るのはこういつた指揮官かもしれないな。

「將軍。北の方に粉塵が見えます」

偵察兵の言葉通りに粉塵が見え、地響きが聞こえる。

それは徐々に聞く、では無く感じる、と行った表現が正しくなってくる。

「よし。各員無事に園典に帰るぞ」

声を上げる事が出来ない状況。

しかし、ここにいる全員の心は一つ。

剣を抜いて、息を整え心に意志を刻み、振り下ろす。

日も暮れた陣の前に現れた兵。

それらは攻撃を加えつつ散っては集いまた散っていく。照明に移る姿は捉えきれない。

しかし攻撃を加えられて黙っている訳にはいかない。

反撃しどこの部隊なのか、どの程度の規模なのか、情報を待つ。

その間に響く地響きと怒号。

それらは近づいてきて、

「司令官！！ 先陣が落ちたとの！！」

「な」

敵が攻勢に出たのか？

兵力も士気もこちらが勝っているというのに？

あの王子の演説で回復する程、王族の失態は軽いものじゃなかっただろう！！？

「なぜ急に」

「先陣の兵が反乱を起こしたのが原因かと」

「なんだとっ！？」

所詮は盗賊。時勢が読めないか。

あと少いで園典を落とせたものを……！

「迎え撃て。反乱の首謀者を見せしめに」

その時幕舎の扉が開いた。

飛び交う怒号と銃声がけたたましく室内に響く。

扉を開けたのは照明に照らされた姿から女だと分かった。

「誰だ？」

見た事の無い女仕官。

しなやかそうな体に整った顔からは涼やかな視線。かなりの美人だ。

長い髪を後に束ね、手には槍。服が赤く染まっている。

見れば、その服は、

「楽く」

言い終わる前に貫かれた兵。

「待て、」

問答する間も無かった。

引き抜かれた槍は私の胸に突き刺さる。

名を名乗る間もなく。

逃走する跋維軍。

ここで徹底的に叩く。

合流した王子の部隊も加わり、第二陣は更なる喧騒に包まれた。

逃げ惑う跋維兵を討ち、陣を焼く。

悲鳴と怒号を金属の打ち合う音が夜空に鳴り響く。

「王子、追撃を」

陣の中の敵兵は殆ど討った。

後は逃走する敵を叩く。

「將軍、追います」

「中佐、十分に気を付けてくれ」

未麻中佐が部隊を率いて追撃に入る。

「大丈夫か？ 兵も疲れているのに」

「いや、ここで叩いておかないと後の後悔につながるかもしれませ
ん」

叩けるだけ叩いて少しでも時間を稼がないと。

「それに残った兵もいます。ここにある物資を持って帰還しましよ
う」

首都攻防戦 8

いつの間にか日の沈み辺りは真っ暗な世界に包まれている。

闇を裂くバイクや車のライト。少しの距離を開けて無数のライトが駆け抜ける。

徐々に縮まる距離。

銃声が響き、悲鳴とバイクの転倒、それに爆発音。

爆発が照らす一瞬の明かり。それに照らされた恐怖に満ちた顔。

「追いつかれたっ!!」

叫んだ男は近くの仲間を巻き込んで倒れた。

「突っ込めえー!!」

勇ましく響く声。

敵には断罪の声に聞こえただろう。

「来たな。將軍の読み通りだ」

「『蓬樹』甘く見るなよ」

「分かつてるよ『仁都』」

「『程時』はすでに配置についている。くれぐれも深追いするなよ」

「分かつてるって」

もう一度同じ注意を受けて仁都は後方に下がっていく。

仁都、程時とは跋維党に参加する前からの付き合いでお互いに気心が知れているというか、安心して後を任せられる。

「さて、先陣は俺が切るかな」

「大尉。先程」

「気にするな。俺が行かなきゃ話しにならんだろう?」

仁都に念を押されたのだろう。その顔にはどうしたものかと、逡巡している。

その肩をぼん、と叩いてバイクに跨る。

「よし。敵を追っ払うぞ!!」
アクセルを踏み込んで向かってくる光の波に向かっていく。

敵の隊列が分かれる。

隊列、と言えるほど整列していた訳ではないが。

アクセルを緩め、警戒心が危険を知らせる。

ここまでやれば十分だろう。

「よし。引き上げの」

「中佐!!」

振り返ると斧槍を振りかぶる敵兵が。

「このっ」

槍を両手で頭上に掲げる。鈍い衝撃に響く金属音と腕。

アクセルを踏んで斧槍を抜け出し、

「ここで終わらせようかと、思ったのだが」

相手を見定める。

大きな男。しなやかさは正反対の体から発しているオーラに気圧されそうになる。

「ここまでやっついてそれは無いだろう」

言い終わると踏み込んでくる。

それを受けずに避けて、突き。

大きな斧槍の柄で軌道を変えられる。

振りかぶらずに、切り下ろす。

「ちっ」

バイクの後が切り付けられて体勢を崩す。

斧槍の先端に吐いた穂先で突き出し。

「くっ」

バイクを乗り捨てる。

刹那の間で間に合わず、防具の隙間、わき腹に滲む血。
敵兵の数は少ない。しかし、

俺の周りをゆっくりと周回する男。

こいつは一騎当千の力を持っている。

ここでの敗北は今日の勝利を無くすかもしれない。
槍を握る手に力が入る。

「そういえば、まだ名乗ってなかったな。跋維党大尉蓬樹」

「楽軍中佐、未麻」

「中佐、その首頂いていこう」

機上からの攻撃。

避けるだけで精一杯だ。

反撃の機を見出せない。

一撃一撃が強く鋭い。バイクを自在に操り左右からの攻め。
流石にヤバイと感じてきた。

「中佐！！」

敵を蹴散らし、槍を払いながらやってきたのは姫歌少尉。

「女か？」

女と見て甘く見たのか、少尉に対する反応が遅れた。

その隙を逃さない少尉。躊躇わずに必殺の突きを繰り出す。

反撃も俺へのとどめも出せずに、距離を取る。

「甘く見たか」

少尉の攻めは止まらない。距離を開ければ詰めて疾風の突きを繰り出している。

反撃を往なし、払い振り下ろす。

俺も見ているだけではカッコつかないな。

近くの敵兵を倒し、乗っているバイクを奪って、

「俺も加えて貰おう」

少尉の反対から蓬樹を追い立てる。

「流石にこの二人相手では」

斧槍を振り回して、こちらが退いた瞬間。

「退けー！！！」

人の声量とは思えない大声で叫んだ。

それを合図に退いていく跋維党。

「中佐。今回はこの辺で」

「そうだな。これ以上追うとこちらが痛い目に遭いそうだな。よし、園典に帰還する」

日が変わり、激戦の跡が色濃く残る園典周辺。

捕虜になっていた兵はもちろん投降していた楽兵、投稿してきた跋維兵それぞれに恩赦を与え解放した。その事に恩義を感じ軍に加わる者も多数いた。

戦利品としてバイクや車両。食料に武器、通信機材その他諸々を引き上げての凱旋。

「王子。これでしばらくは物資に悩まなくてすみます。これを他の都市に分配して跋維党との戦いを有利に進められる様に手配するのが得策かと」

「そうだな。園典にも蓄えはあるし、補給の厳しい所に輸送するのがいいな。そうなると誰が輸送をする？ まだまだ跋維党が展開している所の方が多いし危険だろう」

「はい。その事に関しては戻ってから皆と話し合いますよ」

昨日の出撃前には悲壮感と決死の覚悟で町を出た将兵達。

今は戦いに生き残り、自身と誇りを胸に街に戻る。

幕間

楽軍と跋維党の園典周辺の戦闘から一週間。

ボクの傷もようやく癒えてきて、今は体力の回復と才蔵達の情報を待っている状態だ。

あの戦いの事はベッドの上で聞いた。

才蔵が比奈人の加勢に来てボクと戦った所までは覚えている。その後の事は知らなかった。

詩月が着ていた事。蒼空乃極を回収していった事。

不思議となんの感情も沸かなかった。

届かなかった悔しさも捉えられなかった歯がゆさも。何も。今も冷静に分析出来る。といっても僅かな時間の事だけ。

ボクも少しは成長したのかな。

退屈しのぎと軽い運動の為の散歩の途中で立ち寄った公園。

「ふお」

横に座る理緒が変な声を上げた。

見れば嬉しそうに舌を出している。

舌の上には結ばれたさくらんぼのへたがある。

それを指差して、何か言おうとしているが全く言葉になってないの
で分からないが、言いたい事は分かる。ボクへの挑戦、だという事
は。

とりあえず、挑戦。

「……………」

もごもごと口の中でへたと格闘。

ちよつとイライラ。

「……………」

横目で見れば理緒は勝ち誇ったかのような顔でボクを見る。
更にイライラ。

「……………」

もごもごと格闘する。

もう一度理緒を見れば、ニヤニヤ笑っている。

「……………」

……………何かが切れた。

「ぺっ」

へたを吐き出す。

「あ」

「行くぞ」

「出来ないからって」

「うるさい。行くぞ」

理緒の手を引っ張って公園を出る。

……………少しは成長した、と思いたい。

「これからどうする?」

「とりあえずはもう少し荒れた方が都合が良いな」

螢送の街の路地から通りを眺める。

何も変わらない街。いや、園典での敗戦のショックが消えずに市民や兵の士気を高める為の街宣活動が目につく。

「必死だね」

比奈人は他人事の様に眺めている。

「十日前までは協力してただろ」

「十日目までな。今は違うだろ?」

嬉しそうに笑う。比奈人という仙士の目的は分からない。

何故俺に付き合うのか、が。

これ程の力があれば冥仙界でもかなりの地位につけるだろうに。

「どうした?」

しばらく眺めていたら目が合った。

「いや、なんでもない」

「大丈夫かよ。お前だけが頼りなんだぜ」

言葉通り、比奈人は作戦について一切口を挟まない。

常に従い、結果を出してきた。

蒼空乃極を奪われたのは計画外だったが、それも予想範囲内。

「この前みたいなのはもう無いから安心しろ」

「そう願いたいものだ」

人通りの多くなってきた路地を更に奥に進んで闇に消えていく。
更なる混迷にこの国を導く為に。

転換

路地を抜け、車に乗り込み送りの街を出る。

「これから反乱を起こさせる」

「誰に」

隣で寝そうになっていた比奈人はアイマスクをずらして眩しそうにしている。

「それは身の程知らずの野心家で佳乃を嫌っているのが条件」

「は、跋維党には山ほど居るな」

「ああ。その中からこっちの言う事を聞いてくれるのは」

「それも山ほど居るな」

「それなりの地位を持っている」

「まだまだ絞りきれんな」

「小心で臆病」

黙りこむ比奈人。

おそろく頭に浮かんでいるのは俺と同じ人物。

「『制羽』か」

「ああ、あの男なら上手く動いてくれるだろう」

「どうやるんだ？」

「それは……」

車内で簡単な打ち合わせをしつつ、車を制羽の居る街、野乃津に向けて走らせる。

「史紀ちゃん、これからどうするの？」

勢いで公園を出て、ホテルに向かう。

「どうするも」

才蔵達の手がかりは途絶えた。

アテも無く歩き回っても見える確立は考えたくない。

「うむ」

「アテが無いなら一つ提案が」

振り返ると嬉しそうに微笑んでいる。

「もう一度夕音に行つてあの男性に聞くつて言うのは？」

……。

あの男性とはおそらく夕音で戦つた人間の事だろう。

「マジで？」

搾り出した言葉がこれだ。

頷く理緒。

「教えてくれると思う？」

「ついついけんか腰になつてしまふのは仕方が無いだろう。」

「多分」

「根拠は？」

「あの人だつて才蔵達に利用されて見捨てられたんだから、何か借りを返したいとか思つて」

なるほど。一理あるといえは……ある。

「たらいいなゝつて思つた」

「思いつきかよっ！！」

理緒に突つ込んだ所でホテルに到着。

一晩、ぐっすりと寝て、朝ごはんをたらふく食べて、

「今日はどうするの？」

観光者の様な会話。

まあ今までそんな感じだつたからしょうがない。

「今日は夕音に行こう。つてか昨日理緒が言つてた事じゃないか」

「……ああ」

ホントに思い付きだつたんだ。

それに乗つた自分が悔しい。

が、今はそれに賭けるしかないか。

ホテルの引き払い、一路夕音へ。

当然、運転は理緒。助手席で地図を眺めていたら気持ち悪くなり、窓の外を眺めつつ快適なドライブを楽しんでいる。

「もうすぐ、この前大きな戦いがあった場所ですよ」

「ふーん」

特に興味は無い。戦争自体は人間同士の事。

才蔵達は何か後ろでこそそそやっているがボクには関係無い。

通り過ぎようとした所、

「検問やってますね」

身分証は佳奈に用意して貰っている。

「ご協力お願いします」

窓を覗き込む様にそう言ったのは綺麗な女。これが素直な感想だ。

「はいはい」

理緒が答えて、免許証と名前の確認。ボクとの関係。車検証の確認等。

車の周囲をぐるりと武装した兵に囲まれるのは気持ちの良いものじゃないな。

シートを倒して終わるのを待つ。

「すみませんが、エンジンを切ってお待ちください」

理緒はラジオを付けようとして怒られている。

「キーはちゃんと返してくださいね」

渡さなくても良いだろう。

「あ、いや、抜かなくても結構です」

「いえ。持っていて下さい」

きりり、と言い放つ理緒。

どこかずれているのが残念でならない。

「姫歌少尉」

理緒から車のキーを押し付けられた女が呼ばれていく。

「まだ？」

「キーを返してもらってないですから」

「なんで渡したんだ？」

「え。怒られたから」

「ラジオ付けなきゃ良かっただけだろ」

「そう言われればそんな気もしますが、まあ、渡しちゃったものはしょうがないですよ」

何がしたかったのかも良く分からない。それは理緒自身も分かってないだろう。

思いつきで行動するのはやめて欲しい。と心から願うが理緒に届くのはいつの日だろうか？

それとも神に祈った方が速いのか？

夕音の夜

夕音の街にも夕暮れは訪れる。

先の大敗も我等にとつては一敗。

「とはいかな」

赤く染まる街を眺めながら呟く。

とりあえず、園典と湯狭の連携に気を付けつつ機会を狙うのが得策か。

全体的な兵数では勝っているが、こちらの大半は政府に追われている盗賊が占めている。

奴等には規律も統制も取れない。利のある方へとなびいて行く。

跋維党への風当たりが強いのも行き過ぎた暴力の所為だというのは分かる。

しかし、締め付ければ造反し、締めなければ他の部隊へ示しがつかない。

扱いに困るが、扱わなければ戦えない。

椅子に持たれて天井を見上げる。

軍と呼べるのは俺が率いている部隊と螢送の部隊、位か。

足しても五万ほど。

楽のとの戦える数ではない。だから、盗賊を使うのだが。

「將軍」

ノックして入ってきたのは副官の白亜。

「どうした？」

「制羽將軍の部隊が到着されました」

「制羽？」

部屋に入ってきただけでむかつく奴はそうはいないだろう。

「久しぶりだな。佳乃將軍」

「お元気そうで何よりです」

お互いになんの感情も込めていない挨拶を終えて、

「党首も先の敗戦を気にされておいでだ」

「面目ない。先の大敗の借りを返し、尚かつそれ以上の損害を与える事を約束します」

頭を下げる。

うすら笑っているのが分かる。

「ふん。そうあって欲しいものだ」

これで党首の心を慰める事が出来るのなら安いものだ。

「で、今回私がここまで来たのはその事を伝える為だ」

わざわざ自分が言いに来るとは、ご苦労な事だ。

よほど嬉しいのだろう、顔がにやけている。

「では、これから軍務がありますから」

「それでは、これで失礼しよう」

勝ち誇った目。

それを残して部屋から去っていく。

制羽が去った後、

「なんなんですか！？ あの言い様は！！！！」

制羽が据わっていたソファを蹴り飛ばしている。

「すぐにでも悔しさに満ちた目に変えてやるさ」

「そうしてやりましょう。で、どうします？ 部隊はすぐにでも動かせませんが」

「まあ、待て。今動く足元を掬われるかもしれん」

「園典では不覚を取りましたが、あの時は將軍はいらっしゃいませんでした。しかし」

「俺は楽に人無しと置いていたがそうではなかった。中々の人物が居る様だ。甘く見ていると再びあの屈辱を味わう事になるぞ」

「将器は將軍の方が上です！」

言い切られると恥ずかしいな。

「敵を侮るな。戦争の基本だ」

とりあえず、現在のままの待機を続ける様に指示して白亜は外に
行った。

「ふう……」

誰も居ない部屋、

一人になるとため息が出る。

ああは言ったもののどうやってこの状況を覆す。

人無しってというのはこちらに当てはまるかもしれないな。

澄み渡る夜空。輝く月。窓を開けそよぐ風が気持ちの良い夜。

どの様に戦争に勝つのか、を考える愚かな自分。

「仙士。か」

あの時の仙士が不意に浮かんだ。

才蔵達とは違う空気を持った女。

不意に会いたいと思った。

そんな月夜のひと時。

潜入

夕音の街まで後三十分ほどの距離で車を止める。

車内でどうやってあの男と会うのか、打ち合わせを行う。

「で、どうやって会うの？」

「とりあえず、侵入という形で」

「それは見つかった時ヤバイだろう」

「その時は笑って誤魔化す方向で」

「無理があると思う」

「じゃ、どうしましょう？」

「逆に正面から行けばなんとかなるんじゃない？」

「そっちの方がヤバくないですか？」

「こそこそ行つて見つつかれば話どころじゃないでしょ」

「それは……そうですね。仮に、仮にですよ？ 正面から行つてダメって言われたらどうします？」

腕組みをして……。

「それはダメでしょう。そっちの方がよりダメでしょう」

握った拳はダメらしい。

まあ、ボクもそう思っていたから……悔しくは無い。それほど。

「見つかったら言い訳なんて出来ないでしょ。だったら」

再び握る拳を。優しく下げられる。

「なんでも力で解決するのは間違つてると思いますよ」

お腹が空いたからと泣いて奢らせるのとどう違うのだろうか？

「あ。観光の振りをして行けば入れるんじゃないでしょうか？」

頭の上にピカッと何かが光ったのか、ぼん、と手を叩いて嬉しそうに閃きを語る。

「無理だろう。戦争中に観光者する奴なんていないだろう」

「う」

沈黙の車内。

とりあえず、出た結論は、

「門まで行ってどうにかしよう」
だった。

なんて無駄な時間を過ごしたのだろうか……。

前は闇に紛れて忍び込んだから分からなかったが、他の都市とは
違い飾り立てられた門。

理緒の話によれば、以前はここが首都だったらしい。

その時の王の威厳、国の威信を誇る為に装飾や高い城壁を建築した
そうだ。

偉そうに語っていたがどうせパンフが情報源だろう。

その証拠にそれだけで知識の披露は終わった。

誇らしく語った割にはなんて浅い説明だ。

誇らしくしている理緒。微笑ましくも微かに涙が浮かんでくる。

それを理緒に見られる訳にはいかない。

そっと顔を背けて浮かんだ涙を拭う。

当たり前だが城門には多数の兵がある。

夜なら闇に紛れて入り込めるかもしれないが、残念ながら今は昼。

夜までここでうろつろつしてた兵達の警戒を高めるだけだ。

さてどうしようか？

来たのはいいが、何も浮かばない。

こうなったら正面突破しかないだろう。

「理緒。行くぞ」

「あ。はい」

箒星を装着して、

「え、あ、ちよつと……！」

理緒の声に衛兵達はボク達を見る。

「バカ！ 声大きい……！」

先手必勝。

箒星を放って衛兵を倒す。

一人、詰めて二人。

詰め所から出てくるのをドアごと蹴倒して三人、四人。
そのまま、門を駆け抜けて市街地へと入る。

夕音市街地

どうにか夕音の街に入り込めた。

街中は想像していたよりも危険な状態だった。

いや、分かつてる。その原因は私の前で辺りを窺っている少女の所為だ、という事は。

影から飛び出して、鈍い音と共に走り去る足音。

「理緒、理緒」

遠くから私を呼ぶ声。

はあ……。

こんな状況になってから何度ため息を吐いただろうか……。

以前この街で会った少女の兄弟子である詩月さんは思慮深く万事を行うといった印象を受けたものだ。

同じ環境で育ってなぜこころも違うのか？

世の無常と言うか、なんと言うか……。

考えていたら涙が出てきた。

それをそつと袖で拭う。

「なんで泣いてるの？」

ついて来ない私を心配したのか、業を煮やしたのかは分からないが目の前には少女が立っていた。

「や、別に」

涙を拭いて少女を見る。

頬を紅潮させて、小柄な体からは緊張感を発している。

「って言う様な顔には見えないけど。ま、いい」

でしょうね。原因は貴女の行動なんだから……。

とは口が裂けても言えない。

「そう、早く行こう。いつまでもここに居ると見つかる」

警報が鳴り響く街を駆け抜けていく。

流石は敵の中樞。

敵の数が半端じゃないし、数も多い。

常に三人一組。強さは大した事じゃないが、何度も出くわすと煩わしい。

「退けっ」

箒星を飛ばして一人目、箒星に気を取られた瞬間に二人目。

そして、三人目の注意がボクに向いたら、ひゅん、と空を切る音で三人目。

理緒の鞭が地に触れる事無く理緒の手に戻っていく。

「結構合う様になってきたね」

「それは、これだけやれば」

この連携をやり始めて今ので十五回目。

合わない方がおかしいか。

「じゃ、今度は理緒が先にやっていくパターンで」

「ちよつと、ちよつと」

理緒がボクの肩を掴んで、

「目的が変わってませんか？ 私達はこの前蒼空乃極を持ってた人に会いに来たんですよ」

「……分かってる。大丈夫」

「若干の間が気になりますが、手当たり次第にノシちゃうのは止めましょう。当ても無く探し回るとこの街の兵隊さん全部と戦う事にもなりかねませんから」

流石にそこまでの体力は無い。

「じゃ、理緒が手加減をしてね」

「分かりました。史紀ちゃんが二人を倒して、最後の一人にプレッシャーを与えるのですね？」

「……そう。よろしく」

とりあえず良さそうな考えなので頷いておいた。

市民達は何処へ行ったのか、出会うのは全て武装した兵達ばかり。警報は収まったあちこちで銃声が聞こえる。

「理緒。おかしくないか？」

「ええ。私達以外にも入り込んだ方が居るようですね」

「出来ればそつちに注意が向いてくれたら良いんだけど」

「こそそと橋の下に隠れて様子を窺う。」

銃声は遠くない。複数聞こえるが方角は一緒だ。

侵入者は一人かそれとも、ボク達と同じ様に一緒に行動しているのかもしれない。

名案が閃いた。

「理緒、別行動を取らないか？」

「は？」

言ってる意味が分からない。

思いつき？　ここで？

「ボクが囷になって動き回るからその隙に理緒があつた男と会って話をしてくて」

なるほど。二人で行動していても要領が悪いかも知れない。

「それに顔知ってるのも理緒だし」

史紀ちゃんは銃声の方が気になって仕方がない様だ。

話している間もずつと視線は銃声の方を向いている。

「構いませんが、無茶しないと約束してください」

約束を交わし、跋維党の兵を探して銃声の方へと走る。

最初に見つけた三人組を強襲して、二人をノした後、理緒の鞭を撓らせて脅迫して男の居所を聞き出す。

脅しは通用せず、その後に見つけた三人組から聞きだした。

「さっきのは口が堅かったけど、こっちのはあっさりしてたね」

「その方がいいですよ」

「確かに。じゃ後で」

「約束忘れないでくださいね」

走り去る理緒を見送って、

さて、派手に行きますか。

倒れた兵の腰にある無線機を取って、

「やつほー。不審者は今、どこだここは……えーと……夕音警察署
前に居ますよー」

無線機に向かって話していると、

市役所から多数の足音が聞こえた。

「あれ？」

もしかしてボク……やつちゃった？

夕音激走

結果オーライ、と考えよう。

追ってくる兵を時折振り返って倒しつつ街を駆け巡る。

理緒に出会いません様に。

それだけが心配だ。

同じ所をぐるぐると回っている。と、

「うおっ！」

回り込まれた!?

引き金を引かれる前に、箒星に意識を集める。

輝きを増し、ボクの体を覆うほどまで大きな光となる。

通りに響く銃声。弾丸はまっすぐにボクに向かってくる。

箒星を前面に押し出す。

弾丸は光に触れた瞬間に地に落ちる。

驚く兵を一人二人と殴り飛ばし蹴倒して突破する。

はあ……はあ……。

流石に……疲れた。

四方に道が伸びている人気のない細い通りに入って壁にもたれて座り込む。

ここなら例え見つかったても逃げ道はある。

そういえばボク達以外の侵入者はどうなったんだろうか？

そっちも兵を回しているのだろうか？

でなければ向こうはなんの苦勞もしないで目的を達しているかもしれない。

そう考えると、なんとなく腹が立ってきた。

こうなったらボクが見つけてやるうか。

「ふう」

息を整えて立ち上がる。

「よし」

見つかる前に見つけてやる。

堂々と走り回っていた先程とは違って、今は物陰からこそそと街を探索する。

おそらくそいつは兵とは違う格好をしているはず。

そして、目指す方向は遠く聞く乾いた音。

近づいている事を実感するのは、金属の打ち合う音と銃声と悲鳴。それらははつきりと聞こえる。

交差点から人が飛んできた。

足を止め、息を吸って……深く吐く。

倒れた兵士達の中に悠然と立っている女。

ぴったりとした服を着ていて、足にはすらりとスリットがかなり深いトコまで入っている。

いわゆるチャイナドレス。もう、女といわんばかりの体型。なんとなく悔しいのは何故だ？

いや、そんな事よりも女の手には剣が握られていてそれが淡く輝いている。

仙具！

仙士が何故ここに居るのか、は知らないし興味が無い。

「さて、もう一方に兵隊さんを押し付けようかな」
考える事も同じか。

「それはボクが頼みに来たんだ」
さつと姿を表す。

「あら。そちらから来てくれるなんて」
微笑む顔がボクから見ても綺麗だ。

「仙士がこの街になんの用があるの？」

「ちょっと会わなきゃならない奴がいてね」

剣を構えることはないが、収める気も無さそうだ。

切っ先は地に向いているが、いつこっちに向いてもおかしくない。

「その盾。ボクも仙士？」

かちん。

女は嬉しそうに笑っている。

ワザとかあ……そうかあ……そうなのかあ。

切れそうになる感情を押し止める。

「どこ？」

「それはそっちから言いなよ」

唇を舐める仕草にドキツとした。

「それもそうね。仙士同士。意味の無い問答はしたくないわね。私は冥仙の『歩来』^{ふらい}こっちにはさつきも言った通り仙士を探しに来たの」

冥仙ならこっちも聞きたい事が増える。

「で、キミは？」

名乗らないという選択も出来たが、

「ボクは風仙の史紀」

「なんでここに？」

「なんとなく。ではダメか」

答える気は無い。聞きたい事があるのはボクも同じだ。

「そう。じゃ史紀ちゃん、私はこれで」

立ち去ろうとする女に向かって、

「ちょっと待て。聞きたい事がある。才蔵を知っているか？」

「どちらの？」

振り返る女の雰囲気が変わった。

どうやら探している仙士は才蔵達か。

「知っているのなら教え」

ボクが言い終わる前に女は剣を構えて、

「何処に居るのか教えなさいっ！」
打ち込んできた！
言い終わると同時に腕に衝撃が！！

夕音激闘

淡い光を放ち、空を切る。

打ち下ろして切り上げる。

動作に無駄が無く、的確に狙ってきている。

筭星で受け止める。じりじりと押し合って、

「はあっ！」

剣を押し飛ばして間合いを詰める。

回し蹴りは後ろに飛んで避けられて、着地同時に突きが閃く。

「うわっ！」

引いては突き出される。

それに払いと斬撃が組み合わされた連携。

速い。才蔵達に匹敵する速度。

どうにか見切れているのは先の戦いの成果か。

手を抜かれていたが、受けた傷は無駄じゃなかったな。

しかし、攻め方が見つからない。

力の差は分かった。だからこそ、なのかもしれない。

もう一度、比奈人と戦ったら戦いにもならないだろう。

かと言ってこのままでは終わらせる訳にはいかない。

軌道を見切れる一撃をしっかりと受け止めて、

もっともっと強くならないと。

「よしっ！」

相手を見据え、気合を入れる。

ボクの間違った声にたじろいだ女。

その隙を突くのは容易いが、それでは意味が無い。

これからの戦いは才蔵達に近づく為の何度あるか分からない実戦。

もしかしたら、明日戦う事になるかもしれない。

少しでも、僅かでも勝機を掴める為に。心を研ぎ澄まし、危険な訓

練を続けよう。

腰を落とし、構えを取る。

「何」

儀礼的なボクの態度に動揺している。

ボクはそんな事をお構いなしに、

「参る」

宣言してから、地を蹴る。

「あ、え」

本能で振り下ろされる剣。

寸前で方向を変えて、もう一度地を蹴って、女の無防備な右わき腹に一撃。

「かはっ……けほっ」

蹲る女。

ボクは距離を取り、再び構える。

「なんなのよ……全く」

お腹を押さえつつ、苦しそうにして立ち上がる。

「ふー……。手加減はしないわよ？」

「上等」

女の姿が目の前に現れる。

速っ!？

剣の間合いでの攻防。一方的に攻められる。

速度はさっきの比じゃない。

受け切れない。幕星で受け切れない剣戟が多くなる。

焦るな。冷静に切っ先に意識を集中し……。

「けほっ」

鈍い痛みがお腹に響く。

「さっきのお返し」

女に当てたトコと同じ場所に入った。

蹲る……訳には行かない。

崩れる足を気合で堪え、一步踏み出す。

痛みで呼吸が出来ないが、思いつきり殴り飛ばす。

速さも無く力も乗らない。
ぱふつと女の胸にヒット。

「何がしたいの？」

きよとんとする女。

「お前に勝ちたい」

更にきよとんとする女。

「え。なんで？」

意味が分からない、ととりあえず落ち着けとボクを優しく抱き締める。

「私は才蔵を追ってきたの。言っとくけど仲間じゃないからね」
「じゃ、なんで？」

ボクは壁にもたれて女と向かい合って座っている。

「あいつを捕まえて冥仙界に連れ帰る為よ」

「だから。なんでって聞いているでしょ」

「そこまで言う必要は無いでしょ。はい。キミは？」

「ボクも才蔵を追ってるんだ」

「理由は蒼空乃極？」

「それは終わったの」

その時の事を話す。

まあ、ボクも理緒から聞いたんだけど。

「ふん。で、その後は？」

「知らないから……」

「何？」

思わず言いそうになってしまった。

言う必要は無いだろう。敵か味方かはつきりしない状況で。

「なんでもない」

ふい、と顔を逸らす。

これがいけなかった。

「何か知ってるんでしょう。この街に何か手掛かりが？」
「やばい。喋り過ぎた。」

「なるほど。だからこの街に来たのね。私の勘も当たってたのね」
「いや。そんな事は無いぞ」

「声。裏返ってるわよ」

「しまった。喋らなきゃ良かった。」

「で、どこ？」

「な、何が？」

「才蔵達の手掛かり」

「さ、さあ？」

「女はじつとボクを見つめている。」

「くそ。関わらなきゃ良かった。」

「どうにかして一時間前のボクに会えないだろうか？」

「何かの奇跡が起きて会えるのならこう伝えたい。」

「くだらない事考えずに、自分の力で切り抜ける」
と……。

夕音会談

歩来と名乗る女の追求に戸惑う。

「さあ。手掛かりって何？」

「えっと」

答えたくは無い。

しかし事態はボクの味方じゃない……いや、味方だった。

「なんで蒼空乃極の事を知ってる」

咄嗟に気付いた。

この事は風仙界の出来事。

それを知らせる事など無いはず。そんな事をしたら自分達の失態を
宣伝するのだから。

「風仙界からの通報よ。才蔵達の行方を聞いてきたのは。なりふり
構ってられなかったんじゃない？ 取られた物が物だし」

なるほど。

つて……納得してどうする。

「で、冥仙は才蔵を討つ事に決めたの」

「風仙と一緒にか？」

「いえ。そちらは蒼空乃極の回収、こちらは討伐と役割を分けたの」

「なんでさ？」

「こちらが協定を破って蒼空乃極を回収されたら困るからでしょ？」

「なるほど」

つて頷いてどうする！

「はっきり言うね」

「誤魔化してもしようがないし。それにもう意味ないでしょ、蒼空
乃極はそちらが回収した。後は才蔵を討つ。それだけ」

「そちらが才蔵を使って戦争しかける可能性も」

「無いわ」

あるんじゃないの、と言いつつ終わる前に否定された。

ちょっと悔しい。

「今の冥仙の評議会に五仙と事を起こす気のある委員はいないわ」
「そう」

となると才蔵の目的は何？
今更だけど気になってきた。

早く理緒と合流しないと。その為にはこの女にどうにかしてこの街から出て行ってもらわないと。出来れば見当違いのところを探索して欲しい。

ボクの邪魔だから。

「何、じつと見て」

「なんでも」

そう、と女は立ち上がり、

「ケータイ教えて？」

「……持ってない」

驚く女。

なんとなく恥ずかしい気持ちになる。

「仙人がケータイで連絡を取り合うのはシユールだろう？ だから持たないんだよ。そうしょっちゅう連絡を取り合わなきゃいけない相手もいないし」

「言つてて哀しくならない？」

「……別に」

精一杯の強がりじゃないぞ。

「それに契約の時とか面倒だろう」

「そんなの適当に……」

なんて奴だ。

「じゃ、私の教えとくから分かったら連絡してね」
紙に番号を書いて差し出してくる。

それを受け取る気など無かったんだが、目の前で捨てる勇気も無い。渋々、受け取って女を見送る。

ふうー。ようやく理緒を探せるな。

街からは銃声が聞こえる。

私は聞きだした情報を信じて、彼の居る場所を目指して走っている。確かに陽動は史紀ちゃんにぴったりだ。あたりには兵の姿も無く無駄な戦闘をしなくていい。

第一、仙士が人間と戦って言い訳が無い。そりゃ身の危険を感じたら戦うけど……。

平和が一番。それを史紀ちゃんに教えるのが年長者としての私の役目ね。

うん。きっとそうだ。それが私の運命なんだ。

なんとなく前途が不安だがきにしたら負け、と思って前を向く。

目の前には大きなビル。

『夕音市役所』

と立派な看板が立っている。

鞭を手に、戦う覚悟を決める。

「人が居ません様に」

決意とは反対の言葉が口から出る。

市役所内は意外に静まり返っていた。

人の気配はするが、向かつては来ない。

わたしとしてはそちらの方が良いが、なんとなく拍子抜けしたのも事実。

とりあえず警戒しつつ階段を登っていく。

二階から三階。そして四階。緊張と警戒が漂う中ゆっくりと足を進めていく。

最上階に辿り着いた。

誰か居る気配はある。

一歩一歩歩を進めていく。最初のドアを抜け、鞭を構える。

綺麗に片付けられていて誰も居ない部屋。奥に続くドアがあるだけ。警戒しつつドアを開ける。

そこには余裕の顔をした男性が一人。

間違いなくあの夜の男性。

「話があるのだろう」

目の前のソファを指して、

「座ったらどうだ、別に敵対する理由は無いだろう」

私は警戒しつつも前に進む。

「最初に言っておくが、才蔵達との連絡はもう取れなくなっているんだ」

私がここに来た理由も分かっている。

「じゃ、この静かな屋内は貴方の指示？」

「ああ、これでも跋維党では上位の強さを持っているんだ。その俺が敵わないのだから無駄な負傷者は出したくない」

「じゃ、私がここに来たのも」

「才蔵達の居所は知らない、と言っただろう」

「それを信じると」

「それはそちらの自由だな。こちらとしては君達を騙しても利益が無い」

嘘を言っている様には見えない。

どうしよう、史紀ちゃん。彼は私達より数段頭が切れるようです。

夕音決断

さて。どうしたものでしょうか？

彼には私達の考えなどお見通しの筈。

その証拠に本人が知らない、と言ってますし。

その上でこちらの聞きたい事を聞き出すなど無理なのでは？

「才蔵達の事は本当に知らない。それが聞きたかったんだろう」

「え。あ、はい」

「だが、やろうとしている事は分かる」

「はあ」

もつなんだか分かりません。とりあえず相槌を忘れない様にしておくことにしました。

「跋維を二つに割る事だと思う」

「二つに、ですか」

「そうだ。その為の人選はもう終わっているだろう」

「ちよつと待ってください。それが分かっているのなら貴方が何か手を打たないと」

「そのつもりだ。その為には君達の力が必要なんだ」

「……は？」

「そこで何故私達が？」

「言っておきますがこの国で起きている戦争に加わる気はありませんよ」

「そこに才蔵達が絡んでいれば入るだろう？」

「まあ、それは」

「それが目的だし。」

「意地悪い言い方だったな。君達は才蔵を相手にしてくれればいい。それ以外はこつちで引き受ける」

「それならば」

「史紀ちゃんも納得してくれる。」

事を期待する。

「で、具体的には」

そこが肝心。言いなりになって使われては私が怒られる。

「制羽という男の下に居る筈だ。そして、俺達がここを離れれば奴等は礼儀を狙うだろう」

「礼儀、と言つのは？」

「跋維党の党首。彼の椅子を狙っている奴は多い。その中で野心に溢れ小心なのは制羽一人」

「居所は分かりますか？」

「ここから南に行くと螢送という街がある。そこに」

「なるほど。螢送」

忘れないようにメモッておく。

「君達は螢送に入って礼儀を守って欲しい」
頭を下げる。

「あ、頭を上げて下さい」

「頼めるのは君達しかいないのだ！」

「で、断りきれなかった、と」

「……はい」

消え入りそうな声の理緒。

ボクとしては追っている気は無いのだが。

「で、そこに行けば才蔵達に？」

「十中八九と」

ふむ。現状では悪い話ではないな。

「よし。行くか」

元気良く立ち上がって理緒の手を引っ張って公園を出る。

「あら。どちらへ？」

公園を出ると、ボクの元気は無くなった。

「史紀ちゃん？」

「史紀ちゃん、どうしたの？」

「あ。いや」

迂闊だった。もうこの街を出たと思ってたのに。

「顔青いよ？」

「大丈夫。うん。行こうか」

「何処へ？」

「ご飯食べに」

「あれ、螢、うっ」

喋ろうとする理緒の鳩尾に一撃をプレゼント。

「なんで??」

喋るな、と視線で訴える。

「ご飯なら奢るけど？」

「いや、そんな、初対面の人に奢ってもらう訳には」

「気にしなくていいわよ。情報料だと思ってくれれば」

それが嫌なんだよ。察してくれよ。……察しているからこそだな。

どうする。どうやって逃げる？

理緒は苦しんでるからアテにならない。

誰か頼りになるのはいないのか？

「どうしたの？」

視線だけであたりを確認していたのがバレた。

きよろきよろと辺りを見回している。

チャンス！

ボク達から視線が外れた。その瞬間に理緒の手を引っ張って走り出す。

何処をどう走ったのかは分からないが、どうにか車まで逃げる。

「はあ、はあ……疲れた」

理緒の手を離し車にもたれ掛かる。

「なんで急に？」

「理緒は座り込んで胸を押さえている。」

「なんでって？」

「あの女はなんとなくヤバイ気がしたんだ」

「空を仰ぐ。風がそよいで雲が流れる。乱れた呼吸も徐々に落ち着いてくる。」

「なんで走っていったのかなあ？」

「!!!!!!?????!!!!!!」

突如として塞がった視界。声にならない驚きが頭の中を走り回る。その原因となる人物は微笑みながらボクを見下ろしている。

「ん〜、どうしてかな〜、お姉さんに教えて欲しいな〜」

「微笑とは逆の雰囲気怖い……。」

「あ。いや」

「逃げる事はもう出来ない。」

大人しく、彼女に事情を話し、

「それならそうと言ってくれれば良かったのに」

後に乗り込んだ彼女はとぼけた顔で言い放つ。

「ハンドルを握る理緒がボクにそつと、」

「最初から分かってたと思うんですよ」

「ボクもそう思う」

「こそこそと話しているボク達に、」

「何を喋っているのかな？」

「なんでもないよ」

「あ。私の事は歩来でいいから。私も呼び捨てで呼ばせて貰うから」

「了解」

「車を進む。」

「螢送の街を目指して。」

決戦 1

日が暮れて、夕闇の中に立ち上る土煙。
人影の無い中を駆け抜ける。

目指すは昌機平野。

地の利を得る事が先決。

全軍はすでに臨戦態勢を整えてある。

いつ、敵と遭遇しても、

「將軍、前方に楽軍の陣が見えましたっ！」

先頭を走る部隊からの報告を受け、俺は剣を振りかざし、

「以前の借りを返すチャンスだ！」

振り下ろすと同時にアクセルを踏み込む。

敵陣にはそれ程兵はいなかった様で、戦闘はあっという間に終わる。

「どっします？」

「このまま進む。全軍に通達を」

「は」

以前はこれで勢いついて足元を掬われた。

今回は同じ手には引っかからない。

その後も敵陣を突破し昌機平野に陣を構える頃には月が高く上がっていた。

「よし。ここに陣を」

陣を張る場所は西南に聳える菜弧山脈の麓、そこで一夜を過ごし、近隣に五つ陣を張る。

「敵の動きを常に監視しておけ」

偵察を頻繁に出し、補給線の確保と安全を確保して、やっと一息つけた。

「敵は前と同じ策をとりますかね？」

蓬樹は敵を待ち切れない顔で園典を望んでいる。

「それは無いだろう。姫辰ほどの切れ者が読まれるリスクを犯さないさ」

「こつちがそう考えて逆を読んできるとのは？」

「それはあるかもな」

「それなら」

「だとしたら、俺は姫辰という将軍を読み誤ったな」

「何故ですか？」

「その程度の知恵なら俺が出ずとも良かったって事だよ」

今の俺の敵は他にいる。

ここに出る事で敵をあぶり出して討つ、というのが今回の遠征の目的。

危険なやり方だが、危険を減らす為の手は打った。

それが何処まで有効かは未知数だが。

「しかし、今の跋維党には将軍の他に園典を落とせる者はいませんよ」

「ここにいる」

指の先にある顔は驚いている。

「や、俺なんかじゃ無理ですよ。暴れるのは誰にも負けませんが知恵が無い」

本当に困った顔をしている。

思った事が正直に顔に出ている。その素直さが蓬樹の強さなのかもしれない。

「足りない所は仁都や程地が補うさ」

ぼん、と肩を叩いて幕舎に戻る。

翌日、園典から土煙が上がったとの報告から始まった。

昌機平野での先頭が始まる。

剣を抜き、楽兵に斬りかかる。

一人二人と切り倒し、前に。

その後に続く我が跋維の兵達。

「佳乃様！ 危険です！」

名を呼ばれる度に楽兵は俺に群がる。

俺の首を取れば英雄になれるからな。だが、その代償は、

「そんなに死にたいのか!？」

俺の行く手を阻む者はいない。

どれだけの兵が前を阻もうとも道を切り開き進むだけ。

その先にある時代を掴むまで。

決戦2

ガキイン……。

俺の行く手を阻んだのは一振りの槍。

「これ以上は」

睨み付ける強い眼差し。

「悪いが、俺は前に進む。邪魔するのなら」

剣を振り、槍を払う。

粉塵を上がり金属音が鳴り響く。

強い。報告にあつた楽の士官か。

「君が末麻中佐かな？」

鋭い突きが顔を掠める。

「お前は？」

剣を首筋に突きつけられても顔色を変えない。

「佳乃」

驚いた表情を見せる。

「まさか」

「意外か、こうして先陣で剣を振るうのは？」

剣を外し、距離を取る。

「敵将を捕るチャンスなどそうないぞ」

挑発する様に微笑みかける。

「そうだな。貴方を捕らえれば戦局は一変する」

「やってみるがいい。中佐、目の前にそのチャンスがある」

舞う様にバイクを操り、武器を打ち鳴らす。

強い、が先程より冷静さを欠いている。

「いい勝負だった。機会があればまたお願いしたいものだ」

「何をっ！？」

「ほら、隙が生まれたぞ」

勢いに乗って出された突きを裁いて、剣を突く。

「痛うう」

咄嗟に体勢を崩して避けたのは流石。

狙いは逸れて左腕に突き刺さる。

体勢を立て直す事無く転倒。

「勝負あり。だな」

それを抜いて、

「中佐っ！！！」

新手との一騎討ちが始まる。

新手は見た目麗しい女。

力強さは感じないが見惚れてしまう槍裁き。

スピードはこっちの方があるな。

的確にこちらの急所を狙ってくる。

正面からの攻めかと思えば、搦め手を交えての攻め方。

変則で正攻法を加えてくるから、こちらも攻め手を見つけ辛い。

呼吸が乱れた所と置いてても、

「はあ！」

一向に乱れる事は無い。

むしろ鋭さが増している印象さえ受ける。

防戦一方。

未麻中佐との戦いでも押し込まれる事は無かった。

中佐が弱いとか言うのではない。

この女士官との相性は良くない様だ。

一定の距離を保ちつつ槍を突き出す。

俺が寄せれば離れ、離れれば寄せてくる。

間合いが取り辛く、剣を思うままに振れない。

攻めて守る。

簡単で難しい事を涼しい顔してやられている。

このまま終わらせたくないが、無理して攻めるのは隙を生むだけ。じっと堪えてただ一度のチャンスを待つ。

「退くぞっ!!」

突き出した槍を引いて、俺の考えを読み透かした様に兵を連れて退いていく。

「やられた」

後に残された俺達は去っていく楽兵の後姿を見つめていた。

「追いますか？」

「いや。追っても意味が無いな。こちらも退こう」

兵をまとめて陣へと引き返す。

陣に戻ると蓬樹が噛み付きそうな顔で待っていた。

「將軍。明日は俺が出ますよ」

ここから戦闘を見ていた様だ。

「ダメだ」

「將軍の手に余る相手だったじゃないですか？ 明日は俺が討って見せますよ」

俺の言葉が聞こえないフリをして武器を振り回す。

「危ないな。お前にはここの防衛があるだろう」

「そんなのは將軍にお任せします。明日は見事あの二人を討って見せましょう」

「お前だって討てなかったじゃないか」

「あの時は友軍を逃がすのが目的だったじゃないですか、今回は違いますよ」

どうあっても出たいようだ。

「分かった。明日はお前にも出してもらおう」

こうなったら俺がこの男に何を言っても無駄だ。

「白亜の陣に連絡を。俺達が戦闘に入ったら敵陣を落とす様に連絡を」

近くに居た兵に伝令を任せ、休む事にした。

決戦3

翌日。

日が昇り始める前に、

「ううをおおおおおお……」

雄たけびが陣内に響き渡る。

声の主は、顔を見ずとも分かる。

こんな事をしでかすのは、この遠征軍十万の中でもただ一人。

「蓬樹……」

決して陽動には向かない男。

まだ靄がかかった頭を、冷たい水に浸して靄を払う。

「よし」

ぱん、と顔を叩いて気合を入れて幕舎を出る。

夕べのうちに整えて置く様にと通達しておいたので、二時間で全隊の出撃準備は整った。

「各員の無事を期待する。出撃っ！」

蓬樹を筆頭に出撃開始。

戦場は昨日よりも園典に近い。

蓬樹の隊は敵をまさになぎ払う、と言った表現が相応しい戦い方を行っている。

俺の隊はその後方から援護と討ち漏らした楽兵と戦っている。

こう言っつては相手に失礼だが、物足りない。

相手に不足だな。そう考えた俺は情勢を眺める為にもう少し後方に下がる。

前線では蓬樹が昨日の二人を探して奮戦している事だろう。

何人目か分からない楽兵を倒す。

何処にいる？

昨日將軍と戦った相手は？

前に戦った二人は？

寄せてくる楽兵が煩わしい。

斧槍を振り回し、赤く染まる道を作る。

「見いつけたあ！！」

声を張り上げ攻めて行く。

最初に見つけたのは女。

顔と雰囲気は変わらずに、綺麗な見惚れてしまいそうな槍裁き。

見間違っはらずも無い。

「この状況でっ」

向こうも俺の事を覚えていてくれた。

その事が妙に嬉しい。

「状況で戦う相手を決められたらなんの苦勞も無いわな！！」

「全くだ！」

勝気な瞳。

風のように軽やかに舞う槍。

綺麗。

その言葉しか浮かばない。

「せいっ」

払いを受け止め、攻撃に入る。

上から打ち下ろし、切り上げてなき払う。

それらを止める事無く受け流す。

位置を変え突いて払う。

剣戟が響かない。聞こえるのは小刻みなアクセルワークとタイヤの

軋む音。

戦いにくい。

ガンガン打ち合うのが俺のスタイルだが、パワーでの勝負は避けられる。

技での勝負なら俺に分が無い。
それを上回るパワーがあれば良いが、向こうの技の方が上手だろうな。

無理に攻めれば向こうの思っ壺。

どうしたものか。

背を向けるのはポリシーに反するし、良い案も浮かばない。

相手は俺の動きに併せて動いている。

真似てみるか……？

右に突き出せば、俺は左に。

回り込めば回り込む。

次第に手数が減ってきて、一騎討ちらしくない一騎討ちになった。

じりじりと焦れてきた隊の連中。

兵達も自分達の役割を思い出してきた、乱戦になった。

こうなったら一騎討ち所では無い。

お互いの兵が敵将に群がる。

「決着は次の機会に」

そう言い残して去っていく女士官。

まったく……こうなったら何か手柄を立てないと陣に帰れないな。

嬉しそうに笑っている將軍の顔が頭に浮かぶ。

こうなったらもう一人の方を探るか。

將軍に怪我させられたと言ったけど。

はあ、手負いを討つのもポリシーに反する。

だんだん引き上げたくなってきたが……出来る訳が無い。

自分の役割を果たす事に集中しよう。

……はあ……。

決戦 4

楽軍の陣。

朝方に出陣した直後に攻め立てて今は陣内での乱戦となっている。陣門に立ち陣前を眺めると、退いてきた兵の上げる土煙が見えた。

「仁都大尉、どうしますか？」

この状況でも慌てない士官を頼もしく見て、

「程地の隊に任せよう。伝令を出せ。こっちはやるべき事を成すだけだ」

指揮系統は乱れつつある。

何か物足りないが……。

「仁都大尉からの伝言です」

「なんだ」

一枚の紙に書かれていたのは、

「任せた」

とだけ書かれていた。

しかし、粉塵が思ったよりも少ない。

「蓬樹が大半を討った後だからな」

手負いは怖いか。

「全隊、敵を甘く見るなよ!!」

自分にもそう言い聞かせて敵を迎えに行く。

一人の女士官に会った。

將軍や蓬樹が言っていた士官だと一目で分かった。

あの二人が言う位だからかなり強いだろう。

俺はあの二人ほど強くないのでこっちから仕掛ける事は無かったが

倒される自分の部下を見ているだけつても気に入らない。

「おい、調子に乗るなよ」

勝てる気がしない一騎討ち仕掛けた。

こつちから仕掛けておいてなんだが、攻める事が出来ない。

防戦で手一杯だ。

それもかなり厳しい。

相手を見る事すら出来ない。

くそ、美人だつて聞いてたのに顔すらよく見えないとは。

ちらちらと視界には入るが、なんとなく物足りない。

くそくそ。もつと槍の鍛錬をしておけば良かった。

今、後悔しても後の祭り。

陣の手前、と言つてもそれなりに一キロほど距離がある。

陣は落ちた。敵将を捕らえる事は無かったがここを取る事を目的にした戦闘だから目的は達した。

「誰か、伝令を」

戦っている程地にその事を知らせ、その後方から迫ってくる蓬樹にも同様の伝令を出す。

「皆ご苦労だった」

楽陣に入り、戦闘の疲れを労う為の酒宴を開く。

「仁都、一番乗りだったんだろ」

「將軍の策通りにやればそうなるじゃないですか」

蓬樹は面白くなさそうに杯を煽っている。

一番乗りを果たした仁都が酒宴に相応しくない顔で、

「何か誘っている様な印象を受けたのですが」

「だろうな」

蓬樹に習ってぐいっと俺も煽る。

「これは罠という事ですか？」

「そうとも言えるし、そうじゃないとも言える」

「何が言いたいんですか？ 酔いましたか？」

「この程度では酔わないさ。この陣には未麻中佐が居なかっただろ
う」

「そういえば。何処に」

「おそろくは」

俺が指差す先は、

「そっちはわれ等の本営がありますが、……まさか!？」

「いや、本営を落とすにはこの兵力だけでは足りない」

「その先は、夕音!？」

「その先だ」

更に一杯。

「螢送!?!?!」

「そつだ。おそろく姫辰も行っているだろう」

「それなら螢送に辿り着く前に園典を落とすのですか？」

「ここに俺たちを引き付けるのが楽の策。乗ってやる必要は無い」

「いつ頃出撃したのでしょうか？」

「俺達が陣を築いている時だろう。全く攻めて来なかっただろう、

下手につついて本隊に気付かれなくなかったんだろう」

「それを分かつていて何故戦いました？」

「籠っている敵を討つのは時間と労力が途方も無い上に敵将が姫辰
では勝機が無い。しかし出てしまえばこちらにも戦い様がある」

それは半分の理由。。

後の半分は制羽を動かす事。

遠く離れた夜空の下には俺とは違う考えを持った同士が居る。

「全軍に通達。今夜の酒宴が終わったら螢送に向かう」

驚く将兵を眺めつつ杯を開ける。

決戦5

一夜明けて、俺達跋維の一軍は接收した陣を捨て真っ直ぐ南に進路をとった。

その日は追撃も無く無事だった。

「蓬樹。君に」

「分かってますよ。殿は俺が。將軍達は先に行ってください」
「すまん」

敵の追撃を食い止める役目を蓬樹に託す。

しかし、俺達にはまだ敵がいる。その上援軍も無い。

「割ける兵は五千が精一杯だ」

「それだけいれば充分ですよ。螢送で会いましょう」
日が昇る前に蓬樹と分かれた。

「さて。行くか」

後方偵察から帰ってきた兵の報告によれば、敵はそこまで来ている。

將軍の様に策を考えられない俺の頭では、正面からぶつかって逃げる、しか思いつかない。

「全員出」

「アホか。このまま行ったら全滅だろうが」

意気を削がれた俺の目に映るのは、

「仁都？」

「俺が残って良かったな。この先の森に兵を伏せて迎え撃つぞ」

俺の驚きを無視して、指示を出す仁都。

「何している。大将のお前が動かんでどうする？」

「お。おお。よしこの先の……なんだっけ？」

戦闘前の部隊とは思えない笑い声が響く。

仁都の策に乗って兵を伏せて、一撃を加える。

「よし、撤収」

敵が退いた隙を狙い、こちらも兵を退く。

数は少ないが、無理に迎え撃つ必要は無い。

とは、仁都の言葉だ。

俺としては正面から迎え撃つのが良いと思うのだが、そう言ったら、

「はあ」

説明するのも億劫だ、と言わんばかりの視線を投げかけられた。

「次は何処で迎え撃つ？」

もうこの部隊の指揮権は仁都にあるのは、悲しい事に周知の事実だ。

「将軍。仁都の姿がありませんが」

「蓬樹の下にいるだろう。後は程地も」

俺の言葉に程地も部隊を連れて姿を消した。

「良いのですか？」

「蓬樹に任せるより信頼出来るさ」

と言っても螢送を攻めるには彼等の力も必要なのも確かだ。

螢送まではまだ日がかかる。それまでに何か考えないとな。

「跋維は盗賊の群れだと思っていたが」

「王子、それは違いますよ。確かに大半はその連中ですが螢送にいる礼儀の部隊や夕音の部隊は訓練され跋維の信念に誓いを立てた騎士と言ってもいいほどの精鋭ですよ」

「その跋維の信念とは？」

「楽の解放だと言っております」

「誰からのだ？」

「おそらくは政府、王族かと」
俯く王子。

王族の失態は誰よりも恥じているし、政府の腐敗も知っている。

「それならばもっと違うやり方で」

「そのやり方は彼等の嫌うやり方だったのでしょ」

地位や権利を得る為に市民を苦しめる。

そのやり方に反発したからこそその戦い。

それも市民を苦しめるがその先には腐敗した連中はいなくなると信じて戦っている。

歴史にどの様な汚名や非難を浴びせられようとも。

それ程の覚悟を持った精鋭が相手の戦い。

もうすぐ螢送の街に着く。

「王子、もう迷ったり考えたりする時ではないのです」

「……ああ、分かっている。だからここまで来たのだ」

正面を向いた顔にはまだ迷いが感じられた。

しかし、このままの方が王子には良いのかも知れない。

「王子、螢送では跋維との決戦となりましょう。気を引き締めて下さいよ」

「分かっているさ。 姫辰將軍」

「物騒な空気だね」

螢送は跋維の本拠地にしては物々しい雰囲気。

「でもしょうがないよね。この街に居る制羽つてのが、もがっ」

口を塞がれた。

「こら、私達のやる事を増やさないで」

歩来の目が怖い。

口を塞がれているので首を縦に振る事で了解だと伝える。

「ホントに分かった？」

それはもう必死で首を振る。

口を塞いでいた手が両方の頬に食い込む。

「むぎゅ」

「いい、ホントに分かったよね？」

歯が痛むほど指が食い込む。

喋っても言葉にならず、頷く事しか出来ないのが恨めしい。

決戦 6

武装した兵隊が街の中央から外に向かって行進している。

市民達は歓声をもって送り出し、兵隊は武器を掲げてそれに答える。

「どうする？」

「どうするも何も、今は事態を見守るしか出来ないわよ」

「それで、出遅れたらどうするの？」

「遅れた分を取り戻すスピードで頑張りましょう」

歩来の強気はどこまでも続く。

「でも、今はそれしか無いでしょうね。下手に動いてマークされるよりは」

理緒も歩来に賛成の様だ。

「ま、二人がそう言うのなら」

ボクだって良い案がある訳じゃないので従う。

もうすぐ螢送が見える。

先に放った斥候からの情報では、部隊はすでに展開している。

「王子。このままでは正面からの戦いになります。それは戦力を無駄にするのと同じ。兵を分けて攻撃しましょう」

「分かった。正面は私が。別働隊は」

「私が」

「気をつけて」

「王子も」

軍を二分して王子と別れる。

螢送の街が視界に入る。

同時に銃声がとどろき、悲鳴が響き、掲げる武器が戦意を煽る様に

打ち鳴らす。

「この一戦で戦争を終わらせるぞっ!!」

声の限り叫んで兵を鼓舞する。

辺りからの地響きに似た歓声が士気をさらに上げる。

「進めえー!!」

剣を振り下ろし、先陣を駆ける。

銃弾を盾で防ぎ、敵の隊列を見極めてバイクを操り斬り倒す。突撃の勢いは敵の陣形に押さえ込まれる事無く押していく。

じりじりと優位に戦いを進めていく。

まだ姫辰將軍の別働隊は来ない。

このまま一気に攻めたいが、地の利は敵にあるので深追いは危険だ。徐々に敵との距離が開き始める。

「王子、追いますか？」

どうする？

このまま押せば敵に与える被害はより多くなる。

しかし、何か策があり罫が仕掛けられていれば窮地に陥る。

どうする。どうする？

「王子」

決断しろ。

一気に決めるか、一旦引くか。

相談するべき相手、姫辰は今はいない。

兵を見渡す。兵には遠征の疲れが見えない。

今回の一戦の勝利が疲れを忘れさせている。

それなら、

「後方から敵部隊が!!!」

「何っ!？」

そうなれば前に構っている場合じゃない。

「姫辰にも引き返すよう伝令を!」

陣を引き直し、敵を迎え撃つ。

「ご無事で何よりです」

「ああ」

姫辰から差し出されるコップを受け取る。

「ふうー」

「気になさいますな。相手は佳乃。跋維の名将です」

「しかし、兵達には」

「戦争に連戦連勝はありません。一敗したからといってその気持ちを次に持ち込むとそれが兵に伝わり勝てる戦を落としてしまいますよ」

姫辰の言葉は優しく厳しく聞こえる。

後方から迫ってきた敵との戦闘はあっという間に決着が着いた。

四方から攻められ隊が分断され、指示を出す間も無かった。

「敵の目的は戦闘では無く、螢送への帰還。それに姫歌からの報告によるともう一部隊あるそうです」

「また来るのか？」

「王子。その様に怯えた声は塀の前では出さない様に。指揮に関わりますから」

姫辰の言葉はやはり厳しい。

「ああ、済まなかった。でいつ頃に」

「三日以内かと」

決戦7

「随分と遅れてくるな、いや速いのか？」

「姫歌の部隊を牽制しつつの後退してきます。報告による進路から考えてこちらに仕掛けてくる様子です」

「後退しつつ前方のわれ等にも仕掛けてくるのか？」

「一戦交えて、われ等をおびき出し姫歌の部隊との同士討ちを狙っているのかも」

「それは」

園典攻防戦の時にこちらが仕掛けた策。

まさか、まんま仕掛けてくるとは思わないが、気を引き締めないとな。

「ま、一案を上げただけです。未麻中佐の怪我が治るまで周辺の警備を増やして用心します」

「そうだな、中佐がいなくてこちらは戦力ダウンだからな」

「ええ。中佐の鋭気はこちらの士気に関わりますから。本拠螢送を攻めるとなれば敵の抵抗も苛烈でしょうし」

「その他からの援軍は？」

「湯狭には夕音攻撃を指示しました。晴雨せいうからの援軍も五日もあれば到着するかと」

「そうか……後少しで」

反乱は止められる。そうなれば、

「王子、戦後を考えるのはまだ早いですよ」

頭の中を見透かされた、顔が赤くなる。

「分かっているよ。今はまだ戦時中。目の前に集中しないとな」
ふふ、と笑う姫辰。

「では、失礼します」

下がる姫辰。

ふー。彼がいれば楽は安泰かな。

螢送の街に帰還して、真っ直ぐに礼儀の下へと向かう。
「やけに物騒だな」

礼儀のいるビルの周りには殺気だった兵が屯している。
これだけの兵を置いてあるって事は、まだ事は起こってないのか。
安心と不安が心に浮かぶ。

途中止められる事も無く、礼儀の部屋に到着。

「やあ。久しぶりだね」

変わらない礼儀。

「園典を落とすと思っていたが？」

「ちよつと事情が変わりましたね」

「伯明率いる楽軍かな？」

「ま、そんな所です。で情勢は？」

「制羽が指揮を執って明日にでも仕掛けるそうだ」

「俺も出ましようか？」

「制羽が嫌がるだろう？」

ま、否定はしないが。

「私としても君に出てもらった方が安心できるのだが」
言葉を切って、

「この状況では……君に出てもらおうとマズイ事になる」

「それならば」

「待て。腐った政府を打倒し王族からの解放という俺達の本懐は完全とは言えないが、まあ半分は達成出来た。後はどうやってそれを根付かせるのかって段階だ」

礼儀の理念に共感し、俺は跋維党に入った。

そして、王族や政府上層部を国外に逃げ出すまで戦い抜いた。

「その障害となるのは」

「ちらり、と窓の外に眼をやる。」

「制羽」

「ああ、奴のやるうとしてゐるのは自分が王となり支配する事。それではこの戦いが全て無意味をなる、それだけはなんとしても避けなければならぬ」

「楽に討たせるか？」

「いや、奴は自ら出る事は無いだろう。奴の以前には無かつた強気が気になる」

それは間違いなく、才蔵の後ろ盾があるから。

「礼儀、その事なんだが」

才蔵達の事とそれを追つてこの街に才蔵に因縁を持つ連中がいる事を報告する。

「後は」

「考えてゐる事は分かるよ、餌だろう」

「考えてゐる事は同じ。」

「危険だぞ」

「命を惜しんで国を変えられるか？」

微笑む礼儀。

「何があるうとも貴方を守る事を誓つ」

剣を眼前に掲げ、そう宣言する。

決戦 8

礼儀との話を終えて、制羽の所へ向かう。

「制羽」

「園典を落としてからの帰還かと思っていましたか？」

「事情が変わった」

「目の前の奴等をここに引き付けて置く間に落とす事など容易い事でしょう」

お前がいなければな、とは言えない。

「園典を落としても王族がいれば同じ事。伯明を討ちその上で園典を落とすさ」

「なるほど、では伯明は私にお任せを。明日首を持って参りましょう」

くくく、と喉の奥で笑う。

「その事なんだが、楽の背後から部下の部隊が迫っているんだ。それと連携を取れば確実だと思うが」

「明日の攻撃準備はもう終わっているのです。それを伸ばすとなると士気にも関わるし、それにその部隊が戦闘出来る状態であるかも分からないでしょう」

痛い所を突くな。

しかし、蓬樹がそんなお前みたいな戦闘をする訳ないし、仁都や程地も付いてるから万に一つの事も無いだろう。そう言いたいと言うと話が拗れる。

「では、どの様に戦う」

「敵は強いといっても数はわれ等の三分の二程度、それに遠征の疲れもあるでしょう。隊を三つに分け、まず二方から時間をずらして攻めれば敵は混乱する。そこをもう一隊で攻めればそれで終わります。心配でしょうが、明日は我が隊に功を立てさせて下さい」

それで話は終わり。

姫辰相手では役不足。数で押せる相手ではない。

略奪ばかりしてきた部隊が精鋭相手に作戦通りに動けるものか。あの制羽の態度に思わず出る舌打ち。

言葉を出す事無く自分の陣へと戻る。

翌日、夜明けと共に鳴り響く出陣の合図。

城門に登り指示を出している制羽。

俺は螢送内で展開している自陣で随時入ってくる報告を聞いている。

「王子。敵が出陣してきますぞ」

「何？」

「思ったより、速かったですな」

「かか、と笑う姫辰。」

「笑っている場合か、どうするんだ？」

「当然反撃します。王子はここで待機して下さい」

「いや、私も」

「ここは敵の真意を探るだけで良いかと。未麻中佐を」

「傍に控えていた兵に未麻中佐を呼んで来るように伝える。」

「王子は後方に警戒を。もしかしたらこちらの予測速度を上回る進軍かもしれないから」

「分かった」

「お呼びですか」

「ああ。中佐の怪我の具合はいかがかなものかと」

「それは実戦でお見せするのが一番かと」

「分かった。王子、中佐に一隊を預けても」

「頷く。」

「中佐、頑張ってくれ」

「ばあぁん、と音が聞こえてきそうな敬礼。」

「盗賊上がりが何を兵隊ぶっている!!!」

槍を振り回し、敵兵をなぎ倒す。

怪我は完治しているのだが、軍医が納得しない。

しかし、これで納得しただろう。

「さあ、次は誰だ!!!」

答えなど待たない。躊躇している兵を恫喝し道を開けさせる。

一旦崩れば持ち直すのは至難の業。それを待ち直せるのは名將の証。

しかし跋維の名將は佳乃一人。

その佳乃は前線では無く今螢送市内にいる。

逃げる跋維兵を追撃する。

「深追いはするなっ!!!」

逃げる跋維兵はまっすぐに螢送に向かう。

ある程度距離を開けて、同じスピードで追う。

そして、

「中佐、帰還命令が」

「ああ」

螢送まで後一キロの所で追撃を中止。

「こっちが追い討ちを受けない様に注意しろ」

後方を警戒しつつ陣へと戻る。

決戦 9

……。

「どうするよ？ あの大将は」

笑い顔で言葉が途切れる。

「そう言うな。佳乃の様な将が稀だ。俺達にとって有能な将であるかなんて関係ない」

必要なのは言いなりになるか、だ。

その一点においては制羽という男は佳乃を上回る。

佳乃は有能だった。仙具を扱えるほどに。

しかし、あの男は小心で野心家、というこちらの思った通りの人材だ。

佳乃に蒼空乃極を与えたのは、国を滅ぼさせ様と思ったのだが、意外な敵を呼び寄せてしまった。

しかし蒼空乃極を引き換えに敵は去った。

残っているのは警戒はするがどうという事はない仙士二人。

それと、わざわざ冥仙から来た歩来。

その他にも仙士がいるだろうが、向こうから仕掛けてきたら戦うがこちらから仕掛ける必要は無い。

「お前が怪我してなければこんな無駄な時間を使う必要も無かったのだがな」

「うるさい。今度は真剣に戦うさ」

「いつもそうして欲しいものだ」
目を戦場に向ける。

「さて、礼儀に会いに行こうかな」

「おい。螢送にはあの三人がいるんだろう？」

「障害は早い段階で取り除いておきたい。相手が歩来なら尚更だ」

制羽は戻ってきた兵に怒鳴り散らし、自陣に戻っていったらしい。
「呆れた司令官だな」

思わず声に出してしまう。

「将軍が指揮を執れば勝てた戦いでした」
残っていた白亜が意地悪そうに呟く。

「おい。分かっているとは思うが」

「ここ以外では言いませんよ。この街のいたる所に制羽将軍の息の掛かった連中がいますから」

「ならいいが」

白亜に限って外で言う事はないだろう。

それより気になる言葉が、

「今、制羽の部隊が街に居るだど？」

「はい。治安維持の名目で武装して巡回してますが」

「いつからだ？」

「さあ……私には……どうしました？」

白亜は俺と共に園典からこっちに來たんだから何時からなんて分かるはずが無い。

「将軍」

制羽はタイミングを計っているのか？

「将軍？」

となると、あの二人に会っておいた方がいいか……。

「お。おお、どうした？」

何時の間にか白亜が目の前に立っていた。

「将軍こそどうしました、何か気になる事でも？」

「まあな。俺は少し散歩してくる」

後で白亜が何か言っているが、任せておけばいいだろう。

今日の敗戦のせいだろう。

街の空気が思い。通りに人通りは無く通りに沿った店にも明かりは

無い。

市民全員がいつここに樂兵が押し寄せてくるのかを不安に思い、過
ごしている。

遠くから足音が聞こえる。それは近づいてきて俺に気付くと敬礼を
して去っていく。

それを見送って人気の無い通り、街灯に照らされた石畳の歩道を歩
いていく。

それからもいくつかの部隊と会った。

その部隊は全てが制羽の部隊章を付けていた。白亜の言葉の裏が取
れた。

治安維持にしては物々しいな。

これは本当にタイミングを狙っているのかも知れない。
確実な時とは何時だ？

いつしか頭の中はその事だけで一杯になっていた。

「はあ」

「何よ？」

「や、別に」

「そう」

螢送の郊外、といってもキャンプ場にテントを張って生活しては
や三日。

日に三度必ずやって来るご飯タイム。

食料は街で仕入れてくる。テントで寝るのもそんなに嫌ではない。

「さて、食べましょうか」

理緒もなんとなく箸の動きが鈍い。

「いただきます」

「「いただきます」」

歩来に続いて端を動かす。

そう、気が重いのは歩来の作る食事。

マズイ訳じゃない。

ただ、味付けがこう……違うというか、ズレているというか。ここが違う、とはつきり言えないが確実に間違っている味付け。

風仙界にいた頃はボクが食事当番だったのだが、その修行が足りなかった。

もっと真剣にやっていたら……。

後悔は常に後からやって来る。

「どうしたの？」

歩来の満足げな顔を見ると何も言えない。

「き、今日も、美味しいね、史紀ちゃん？」

一瞬の間がなんとも言えない気遣いを表している事を知っているのはボクだけだ。

「お、おう。そうだな」

毎度の事だが、勢い良くご飯をかきこむ。

これがいけなかった。

「良く食べるね。じゃ明日も今日よりも多めに作るね」

……。

お茶碗を持ったまま、横目で理緒と目が合う。

その目には薄っすらと涙が見える。

ボクは体勢を崩さずに、ゴメン、と思いの乗せて理緒を見る。

今日も頭上には輝く月と星。

流れ星に願いを乗せたいと本気で思う今日この頃。

「明日は何にしようかな」

歩来の嬉しそうな声が夜風に流れる。

決戦10

ようやく……見つけた。

なんでまたこんな所に。

歩き続けて辿り着いたキャンプ場。当然、こんな時期にここに来る者などいる訳が無いのである意味盲点かもしれない。

「おい。居るだろう?」

まだ少し距離がある所から声を掛ける。

微かに明かりが見え隠れしているから起きているのは間違いないと思うが、

「おい」

一体どこから調達したんだあのテントは?

近づくにつれ一通りのキャンプ用品は揃っている。

「誰?」

一人がテントから出てくる。

あの時の女、じゃない。

「佳乃」

相手の名前は知らないが、俺の名前を言えば理解してくれるだろう。

「ああ。なんの用?」

「少し事態が変わった」

テントから顔だけ出している。

「とりあえず出たらどうだ?」

「そうだね。ちょっと待って」

「ごそそとテントの中の影が動いて……」

「で、どう変わった?」

後のテントからも一人出てくる。

「仙士は三人居たのか?」

「ま、成り行きだね。そんな事より事態が変わったって? 才蔵は

居ないの？」

焦っているのか、緊張が走っている。

「才蔵が入れ知恵している男が居るのは間違いないが」

「そんなのはそっちの問題。ボク達は才蔵を追ってきたの」

「待て、とりあえず、自己紹介をしてはいかがでしょうか？ お互

いの名前を知らないのは話す上で不便ですから」

夕音で会った女の提案によりお互いの自己紹介が始まる。

「で、才蔵は？」

「近くに居るのは間違いない。おそらく今日の戦闘も見ていたのだろっ」

「何処に居るの？」

立ち上がる史紀。

「ちよっと待て。そこでだ。ちよっと提案がある」

「何よ」

「才蔵が動くかどうかは分からんが」

「じゃ、いいよ」

テントに戻るうとするのは史紀。

「ちよっと待ってっ」

史紀の手を取って座らせる。

「才蔵が入れ知恵している男を動かせば、動くかもしれん」

「動かすってどうやって？」

「今度の戦闘後、制羽、おそらくこいつの下に才蔵が居ると思うが、を敗戦続きの責任を追及する。そこで地位の剥奪や降格を匂わせれば焦って行動を起こす」

「投降するって選択は？」

「それは無いな。奴の目的は自分が王になる事。その為には楽に投降すればどうなるかぐらいの知恵はあるし才蔵が止めるだろう」

「責任を取らせてどうするの？」

「奴は立場を利用して恨みを買っているからな。その報復を恐れている。そんな奴が取る手段として一番可能性が高いのは」

「造反か」

「そう。それを起こさせる。その時に制羽を討って」

「だから、制羽とかいうのをどうしようともボク等には関係ないだろっ」

「制羽が討たれば才蔵も動くって事か？」

歩来という女は俺の考えを読む。

俺もそう思っているので頷く。

「なんでさ？」

「才蔵がその制羽って男の所に居るのは目的に適しているから。それを阻害するような動きがあればその動きを止める為に動くって事」

「な、なるほど」

「その場面の時にそっちが居ないと意味が無い」

「その場面というのは？」

「奴が造反し礼儀の部屋に乗り込んだ時」

後手に回るかと思っただが、そのタイミングをこっちが握れるのはありがたい。

「その時は迎えを寄こすから、準備を済ませておいてくれ」

「分かった。その时才蔵を狩るよ」

立ち上がり拳を握る史紀。

「ふふ、頼もしいわね」

微笑む歩来。

「じゃ、その時までゆっくり寝ますか」

欠伸をしてテントに戻っていく理緒。

それを見届けてから俺もキャンプ場を後にする。

決戦 11

翌日も勝ち目の薄い戦鬪を始めた制羽。

こうなつてくると俺が挑発されている様に思えてくる。

なにせ制羽の後には才蔵がいる。

その入れ知恵かと思つたが、それでも無い様な気もする。

どちらにしろ俺が動かないと始まらない。

主導権を握っていると信じて、行動しよう。

予測通りの敗戦の後、本部に制羽を呼びつけて軍議を開催する。集まつたのは螢送守備隊の主だった面々。

その中には制羽に近いのもいればそうでないのもいる。

「連日の敗戦で兵の士気は下がり、また補給の難しい現状でその数も減少した」

「それは、楽軍に園典での勢いがあるかと」

「園典の戦いから目を重ねている。目の前の戦鬪には関係していない。それなのに敗戦を続けるのは戦鬪指揮官の力量によるのではないか？」

「私が楽軍に劣ると？」

「結果がそう言っているのではないか？」

「馬鹿な事を。それにまだ二戦しただけ」

「その二戦で失つた兵や物資はどうする？ 各地からの増援を求めらるにしても日数が掛かるし楽もその事を警戒している」

「そこで、党首の兵をお借りしたい」

俺ではなく口を開かずには、礼儀に向き直る。

「党首の兵は精鋭。楽兵に後れを取るような事は無いでしょう」

「貴官の兵はどうする？」

「党首の兵と併せればまだまだ楽兵を上回ります。それからが本当の戦いです」

「本当の？ 戦いはもう始まっているのだぞ」

「佳乃將軍、この二日の敗戦は戦略的敗戦です。これはあの園典での戦いの借りを返す為、わざと敗走していたのです。そろそろ向こうもこちらを甘く見ているはず」

……アホだ。

そんな事は向こうだって分かっているだろうし、たった二日の戦闘で調子付くほどの間抜けはいない。コイツを除いて。

だが……お前に兵を預ける事で事を起こしてくれるのならそうしよう。

俺は笑いを見せない為に俯いて、

「党首……ここは制羽將軍に任せてみては」

「佳乃將軍!!」

近くにいた守備隊長から異論の声が上がる。

「制羽將軍が指揮を執って二日。それなのに指揮官を交代しているは兵が戸惑うし敵を呼び込むだけだ」

制羽は俺の弁護が意外だったらしく、目を開いて俺を見ている。

「將軍！ そんな事では發送は落とされてしまいます！ ここは將軍が指揮を執るべきだと！」

俺は一瞬の間を開けて、

「私も制羽將軍の指揮を疑うわけではないが、納得していない者もいるのも事実。で、制羽將軍に一筆書いてもらおうと思いますが」

礼儀を見る。

礼儀はただ、頷いただけ。

「書く、とは」

「次の戦闘に自身の首を賭ける、と」

首を賭ける、の言葉に竦む制羽。

集まった一同の視線が、制羽に向けられる。

「次の戦闘には自信がある、と言っていたのは策通りに戦局を動かしてきたからでは無いのですか？」

制羽の指揮に異論を持つ将校達からは書く様に、との声上がる。

反対に制羽の息の掛かった將校達はどうしたものかと顔を伏せる者ばかり。

「將軍が党首の兵を借りるのは楽に敗北を与える為ではなかったのですか？」

何か言おうとしたのを制する様に俺が声を張り上げる。

「まあ、制羽將軍には制羽將軍のやり方があります。その上で党首の兵が必要ならば私からもお願いします」

礼儀を見ると表情を変える事無く俺を見ている。

考えは通じていると信じる。

「一ついいか。佳乃將軍の報告には後二日程で佳乃將軍の部下がここに到着すると言っていたが」

「はい。間違いないかと」

「では、制羽將軍はその者達と挟撃するのが策か？」

制羽の答は、長い沈黙の後に聞こえた。

「いえ。その援軍が来る前に決着を、と考えています」

「挟撃の方が有利になると思うが？」

「その情報も敵が知っているのは間違いないかと。それならばその情報で後方にも警戒している間に正面からの攻撃で打ち破るのが上策かと」

今度は礼儀が目を閉じて沈黙を作る。

「分かった。制羽將軍には私の兵、五万を与えよう」

その決定にどよめく室内。

五万といえば礼儀の兵全て。

「ははっ」

予想外だったのか、制羽はテーブルの上に頭をつけている。

「將軍、私の兵を五万出すのだ。誓紙を書いてくれ。それでここに居る皆も納得できる」

思った以上の待遇に頭が回らないのか、制羽は躊躇無く誓紙に名前を書いた。

「皆も將軍を補佐し楽を撃ち破り平和な時代を作り出そう」

礼儀の言葉で一同が歓声を上げて、軍議は解散した。

「思い切ったな」

二人、礼儀の部屋で話している。

「何、君が言った言葉を信じているだけだよ」

「そう言われるとなんとなく照れくさい。」

「あ。そうだ」

あの三人組の事を伝える。

「ほう。あの仙士を追っているとはね」

「才蔵達に関しては味方だな」

「それだけでもありがたいよ。敵は少ない方がいい」

「私にそんな価値があるとは思えないがね」

「才蔵の考えている事など知らないさ。だが、確実に動くのも間違いないよ」

「その時になったら聞いてみよう」

「何を？」

「何故、私達に手を貸すのかって事を」

子供の様に笑う礼儀。

決戦 12

翌日。

ボク達は戦鬪が始まる前に中心街に入る。

「何処で待つの？」

「兵隊に見つかりと面倒だから」

歩来は辺りを見回して、

「ここに隠れてみましょうか」

路地の一角を指差す。

「了解」

ここで反論してもしょうがないし、意味も無い。

決戦はすぐそこに迫っている。

「市民の誘導は？」

幕舎で軍議を行う。

市街地戦になる可能性があるので避難を指示しておいた。

「八割の市民はすでに。後の二割は制羽将軍に近いので」

「だと言って巻き込む訳にはいかんだろう」

その相手は制羽の軍。

「戦端が開けば市民の安全を優先する様に部隊に指示を出しておけ」

制羽は今日破れば何か行動を起こす。

その時に後手に回らない様に部隊を配置する。

「本部ビルの周辺に屯している制羽の軍は？」

「半数に減ってます」

まだ半数残してあるか。

事が起こればなだれ込まれるな。

本部の防衛線は無いに等しい。

「よし、白亜は逃げ遅れた市民を誘導しつつ城門を守れ、その後楽

軍を市街に入れて混乱させて制羽の本陣を叩く。俺はは本部ビルにいる部隊を叩く」

「は」

敬礼して去っていく白亜。

制羽に気取られない様に部隊を展開させる。

朝日が昇り、時と共に移り変わり……今は赤く染まった夕日が荒野となった戦場を照らしている。

「いやいや、ここまでやられるとは」

本部ビルに入ってくる情報。

完敗。五万の兵がその命を散らした。

稚拙な策を実行した制羽。それを読み火を用い恐怖を煽り奈落へと導いた楽軍。

兵には悪い事をした。

国の為、時代の為とは言え彼等にも未来があつた筈。

それを奪ってしまった。その責任は制羽じゃなく我等にある。

こうなる事が分かつていて出陣を命じたのだから。

「党首。佳乃將軍がそろそろ」

「ああ。分かっている」

また未来を奪い合う戦いがここで始まる。

昨日まで味方だったもの同士の。

「俺が行こうか？」

「そうだな。先に行っておいてくれ」

比奈人に先に出てもらい制羽を待つ。

それから程なくして帰還してきた。

その顔は恐怖と疲れで一気に年を取った様に見える。

この状況ならまともな思考は出来ないだろう。

「制羽。帰ってきた所悪いが、知らせが一つある」

制羽は声を出さずに聞いている。

「昨日の誓紙の事だ」

それだけで何が言いたいのか伝わる。顔は青ざめ視線は生気を失う。

「この状況を打破するには、礼儀を討つのが上策だ」

「討つ」

「そうだ。君が礼儀を討ち、残った跋維をまとめるんだ」

「私が」

「そう。君だ」

制羽の震える手を握る。

血が通っていないと思えるほどに冷たい手。

「そのチャンスは今だ。本部ビルも包囲している。君の号令を兵は待っている」

しかし制羽は声を出そうとも動こうともしない。

「制羽。君は死ぬ為にここに帰ってきたのか？ それとも王座を掴む為に帰ってきたのか？」

答えない。

「制羽。俺達が君に力を貸す。そうなれば劣勢を覆すのも簡単だ。後は君の号令一つで全てが上手くいくんだ」

徐々に手に熱が籠ってくる。

その時、

「將軍、楽兵が城門を破りました！！！」

びくん、と制羽が反応する。

「恐れる事は無い。俺が全て討ち滅ぼす」

何時までもこうしている訳にはいかない。

言葉で言っても分からないのなら、目の前で俺の力を見せた方が速い。

幕舎を出て、城門まで進む。

その時に制羽の部隊と戦っているのは楽軍だ。

「何故ここに？」

「気にするなすぐに消える。君の力で」

そう言つて制羽を護衛の兵に任せて、剣を抜く。

「はあああ……」

刀身に手を当てて意識を集中する。

本来ならこんな事はしなくてもいいんだがデモンストレーションとしては派手にやりたい。

そうしないと制羽は動かない。

「退けえええ！！！」

剣を振り抜く。

一陣の風の後が駆け抜ける。兵は風に切り裂かれ衝撃に叩きつけられる。

風が通り抜けた後には建物が碎け、血の匂いと切り裂かれた兵が倒れている。

「これが君の力だ。制羽」

制羽の目に野心に満ちた光が灯る。

「私の……力」

「そうだ。国を制し次代を制するのはこの力を持つ君だ。その一歩として礼儀を討つ、と号令を出すんだ」

剣を制羽に渡す。

制羽はそれを掲げて、

「礼儀を討ちこの戦いを制する！！」

本部ビルを指し、先頭を歩いていく。

決戦 13

「懐かしい顔が」

本部ビルに來ると、戦鬪は始まっていた。制羽隊の苦戦の様相でその中心に居たのは、

「遅かったな」

「なんだ。待っていてくれたのか？」

俺達の周りにはぽっかりと空間が広がる。

その方が邪魔でなくていいな。

「とりあえず、退くか戦うか。どっち？」

その問いには、剣を向ける事で答えた。

「じゃ、痛い目で済むと思うなよ」

俺も薙刀を掲げて構える。

流石に速く重い一撃。

目にも止まらない速さで打ち下ろされる薙刀を剣で受けると、衝撃で腕が痺れる。

「よく折れなかったなあ！」

払いを避けて、体勢を立て直す。

一息で間合いを詰める。

「人間にしては」

突きを避けられて、薙刀の柄で剣を打ち据えられる。

「ちい」

鈍い痛みが腕に伝わる。

力が一瞬抜ける。

その瞬間を逃すほど、甘い相手じゃない。

剣を遠く弾き飛ばされた。

「よう。まだかかるか？」

才蔵が制羽と共に現れた。

くそ、最悪だな。

「いい様だな。佳乃」

制羽の目には小心で臆病な光は無く、代わりに野心と欲に満ちている様に感じられた。

制羽は持つていた剣を振りかざし、

「礼儀にお前の首を見せよう」

「お待ちを。それより先に礼儀を。比奈人ここは」

才蔵がそれを止めて、

「ああ。早く行け」

二人が行った後、

「言い残す事は？」

首筋に冷たい感触が。

「無いな」

「そうか」

躊躇いを感じさせない視線に射抜かれながら……。

もう本部ビル前には武装した兵達が殺到している。

「出遅れたっ!？」

「喋ってないで走りなさいよっ!!」

ボク達に気付いた兵がこっちを見る。

声を上げそうになるが、

「退けええ!」

蹴り飛ばし着地した場所は、殺気に満ちた空間。

とりあえず邪魔する奴は叩きのめす。

着地点は殺気に満ちた空間。見渡せば武装した兵が呆気に取られて

ボクを見ている。

一人が剣を振り上げ、斬りかかって来る。

それを捌いて殴り飛ばす。

戦闘開始。

人間相手に遅れを取っている場合じゃない。

もうすぐここに来た目的を達する事が出来る。

そう思うと、体が熱くなってくる。

煩わし兵を蹴散らして先に進む。

「ちよつと待ちなさい!!」

後からの声に止まる事は無い。

「ちよつと!!!!!!」

人垣を駆け抜けた先には比奈人と佳乃が居た。

佳乃の首には切っ先が突きつけられているが、

「先に行く!!」

そう怒鳴ってビルの中へと進んでいく。

「来てたのか」

「分かっていた事だろう」

「まあな」

比奈人の切っ先が首から離れる。

それは風を引き連れて後方から迫る攻撃を防いだ。

「ここは私が」

薙刀に巻きついたのは鞭。

その先には理緒が。

「アホを追う」

「歩来っ!?!? なんで?」

「それはお前等の方が分かっているだろう」

歩来も比奈人の脇を抜けビルの中に入っていく。

「さて、どうしますか?」

ぎりぎり引き合っ。

「どうするも何も……ぬううあああつ！」「」

答えはお互いが分かっている。

薙刀を力任せに振り回して、

「嘘っ」

私の体が宙に浮いた。

叩きつけようとしているのは確実なので、鞭を柄から離す。

宙に浮いた事で行動に制限がつく。

腕を引き絞り狙いを定めて、力を解き放った。

「くうう」

軌道を見極めて体を捻るが、刹那が間に合わない。

「俺を忘れるなよ」

薙刀が私の体を掠めた。

軌道が僅かに逸れた。それは私にとっては九死に一生を得た事。

「まだ戦うのか？」

軌道がそれた原因は彼が投げつけた剣。

それは狙いを大きく外れていたが意識を私に向けていた比奈人には対応が遅れる要因になった。

佳乃さんは近くに突き刺さっていた剣を手に取り、

「仙士の決闘の邪魔になるが、俺も加えてもらう」

「邪魔と分かって入るか？」

「ああ。お前達にはどうしてもこの手で借りを返したい」

「良い心掛けだ」

二人が接近して、打ち合う。

仙士と人間との能力には大きな隔たりがあるはずなんだが、互角といても良いほどの動きを見せる。

「蒼空乃極の影響がまだ残っているのか？」

「さあな」

あの仙具の力がまだ残っていて、今それが解放されているのかな。人間が仙具を使うと、こんな事が起きるのか。

……なんて考えてる場合じゃない。

ひゅんひゅん、と鞭を撓らせて、

「参ります」

佳乃の攻撃を隙を埋める様に攻撃を開始する。

決戦 14

市街にも戦火が上がる。

他の部隊が戦鬪を開始した。

立ち上る黒煙を眺め、

「敵襲ー!!!」

城門から叫ぶ声が聞こえる。

「門を開くな、登ってくる敵を迎撃!!!」

指示を出しつつ私も城門へと駆け上がる。

城門から攻め寄せてくる楽兵を望む。

機兵が先陣を切り、歩兵が後に続いている。

こちらとしては楽軍に攻城兵器が無いのがせめてもの救いだ。

蓬樹達が敵の補給を制限しているのが効いてるな。

「白亜大尉」

「待て、ぎりぎりまで引きつける」

砂塵が舞う。

予測を上回る数。

恐れる事は無い。敵は足を止める事無く進んでくる。

「撃てえー!!!」

槍を前方に突き出す。

それを合図に一斉射撃。銃声が風を切り楽軍に飛んでいく。

「門に近づけさせるな!!!」

そうは言っても数的に勝る楽軍。

破る門をここに絞ったかの様な勢いで攻め立てる。

徐々に門に近づいて、梯子を掛けられた。

登ってくる兵を上から突き下ろして防ぐ。

城門の上、あちこちで同じ光景が繰り広げられている。

銃は迫る敵に、剣や槍を持つ者は梯子を登ってくる兵を相手に奮戦している。

このままではいずれ押し切られる。

そう考えた時に頭を振る。

このこの指揮官は私。

その私が弱気な事を考えてどうする？

今はここを守る事。その事に専念しよう。

突如として螢送に上がった煙。

それは黒々としていて、火事か何かだと思ったが上がった場所が螢送の中心部らしいとの事で寄せてみれば、市街から剣戟と怒号が響いてきた。

「この機を逃す手は無い」

と、戦闘準備を整えた部隊から攻撃を開始した。

「將軍、戦況はどうか？」

「王子、敵に何か起こったのは間違いないかと。門衛の指揮は明らかに昨日までの部隊とは違います」

「確かに。兵を上手く使っているな」

例えるのなら頑強に守るのではなく柔軟に防ぐ、といった感じの用兵。

「攻城兵器の到着が間に合えば時間を掛けずに済むのですが」

「無い物に頼っても仕方がない。私も出よう」

「王子、危険すぎます!!」

「兵が前に出ているのだ。私も同じ様に戦おう」

「王子!!!」

微笑を残してバイクを駆ける。

「追え! なんとしても王子を守るのだ!」

「はっ」

王子の護衛に指示を出し、

「姫歌。西門に寄せる。敵がそちらに注意を向ければ引いて、去ればまた寄せる」

「はっ」

数は少ないが迷いを与えられれば主導権を握れる。

「白亜大尉っ！！ 敵が西の方に！！」

よじ登ってくる塀を突き落とした後に、確認する。

「よし。狙撃部隊の配備は！？」

「終わってます！！」

「では、後方から徐々に退くぞ！！」

まずは銃士。それから少しづつ城門を降りていく。

西門には敵の姿は無いが、市内からは先程よりも激しい戦闘の気配がひしひしと感じられた。

「内乱か？」

だとすれば跋維も一枚岩では無かった、という事だな。

「よし、梯子を掛ける」

跋維兵がいなくなると容易に門が開けられた。

門が開いて街の中が良く見える。

その中は跋維兵同士での戦闘が始まっている。

「突っ込めえー！！」

アクセルを吹かし、同士討ちしている戦場を駆ける。

この戦場で妙な事に気付いた。

それは私の部隊に驚きを出す者と出さない者。

出す者は驚いて逃げようとするが、驚かない者は下がるうとする。

この違いはなんだ？

兵の不気味さにいまいち攻め切れない。

決戦 15

楽軍が突入してきたか。

「制羽の軍を囲い込め!!」

楽軍の正面に追い立てる。

所詮は盗賊。作られた逃げ道に逃げ込んでいく。

「楽兵が向こうの通りに進みました!!」

「何っ!?!」

兵が言う方向は先程まで戦っていた門。

「もう開けられたのか?」

今度はこちらが窮地に陥る。

「後退する。各部隊に連絡を」

兵に指示を出しゆっくりと兵を下げる。

下がる?

跋維兵を突き倒して、前を見ると兵をまとめて下がっていく部隊がある。

しかし、今、前方に展開している部隊は逃げる事は無い。むしろ、下がっていく部隊に追い立てられていた様にも思える。

目的は何?

友軍を盾してまで逃げようというの?

そんな上官なら、

「手加減はしないわ」

槍を握る手に力が籠る。

制羽の部隊は突破された。

こちらとしては制羽は敵。

それは楽にとつても同じ。

しかし跋維党という組織で見れば制羽も佳乃將軍も同じ跋維党だから、制羽の部隊を突破してきた部隊と剣を交える。

流石。

制羽の部隊なんかとはまるで違う統制。

兵もすっかりと訓練されていて一人を相手にすれば後からの攻撃。それに気を取られれば更に攻撃を受ける。

「下がれえ！」

楽兵を食い止め、後退するように声を出す。

もう少し下がれば狙撃隊が待ち伏せている。

そこまで行けば数の不足と足を止められる。

南門と西門から続く通りの合流点に部隊を展開させる。

「速いな」

こちらが体勢を整える前に西門からの部隊が追いついてきた。

乱戦の中に響く銃声。

一発に留まらず二発三発と次々と怒号を切り裂いて放たれる。

「友軍の弾に当たるなよ！！」

敵味方入り乱れる戦場では冗談では済まない。

足を鈍らせた楽。

「臆するなっ！ この一戦にてわれ等の未来を切り開くぞっ！！」

勇敢な声。

一機、槍を掲げて先頭に立つ兵が。

さっきのはあの女か。

遠めに見る勇敢な兵。長い髪を風に泳がせ小柄だが覇気をまとい兵を圧倒する。

その覇気に当てられた楽兵は銃弾を恐れずに突っ込んでくる。

「押し返せっ！」

勇敢な女を止められずに隊列が崩される。

勢いに飲まれるものか！！

そう気を吐いても兵は押されている。

一気に前線を突破し、

「指揮官っ！！」

バイクが宙を舞い、その勢いそのまま突き出してくる。それを避けて払う。

バイクに突っ伏して払いを避けて、そのまま後方に回り込んでくる。後を取られるとこちらが不利。

私もバイクを駆り後を取らせない為。兵の士気を上げる為に。一騎討ちを開始した。

アクセル音が戦いのリズムを刻み槍が謳う。

槍を合わせて思ったのは、この女性が蓬樹が言っていた士官か。あの時は大げさに言っているだけだと思った。

華奢な体に似合わない技巧。

バイクを体の一部のように扱い、寄せて引く駆け引き。

力では蓬樹の方が上だが、技ではこちらが上だな。

その両方で劣る私には手に余る。

防戦だけで手一杯だが逃げる事は無い。

ここで時間を稼げるだけ稼がないと本部の前にはさらに混乱する。

その考えも……甘かった。

ほんの一瞬。ちらつと本部ビルを見た瞬間、私の胸には赤く染まった白い槍が。

「こぶ……っ」

槍を手に取り、勇敢な士官を見る。

涼やかな視線で私を見つめて槍を引く。

そのまま私も倒れこむ。

「さあ、進めえー！！」

暗くなる意識で聞いた声は佳乃將軍の声に聞こえた。

決戦 16

「しづとい」

「お互い様だな」

本部ビル前。

辺りは血の海となり、その中心に身を置いているのは、

「さっさと死なれてもつまらんしな」

赤く濡れた切っ先をだらりと地に向けた比奈人。

「どうしろって?」

「ん、諦めて帰れ」

「それを聞く俺達だとも思っているのかあ!??」

「いいや」

佳乃の突進を一步踏み込んで捌き、そのまま、

「この……伏っ!」

私の鞭『仙具 燕舞』の間合いを外して、詰める。

速さで負ける気は無いが微妙に私の呼吸を外してくる。

地を這う鞭を左右に蛇行させて足を狙う。

「翔っ!!!」

燕舞を跳ね上げる。

舌打ちが聞こえた瞬間、鞭を巻き込む様に動いた比奈人が着地と同時に薙刀を思いつきり伸ばして突き出してくる。

今度は私が舌打ちする番。

体を掠める刃。燕舞を撓らせて後から攻める。

佳乃も体勢を立て直し燕舞の攻撃を避けた隙を狙う。

目の前で風を巻き込んで比奈人の体が消える。

燕舞は私の動きに併せて勢いを無くし、佳乃は私の横に着地する。

比奈人はビル正門を背に立っている。

状況は変わらず。

いや、取り巻いていた兵が倒れている。

「まったく油断も隙も無い」

倒れている兵の半数以上は佳乃の部隊らしい。

そしてその巻き添えを食らっているのが制羽という人の兵。

「友軍も関係なし、か」

「悪いが見極められん」

悪びれる風も無い。かといって楽しんでいる風にも見えない。

「どれ程の人を殺せば気が済む?!?」

「今更それを聞くか？」

表情は変わらない。

「まあいい。その答えは俺に聞くな。才蔵に聞け」

「ならばそこを退け」

「出来ん、と何度言えば分かる？」

「退け、と何度言えば分かる？」

今度は正面から打ち合う。

と言っても佳乃の方が圧倒的に打ち込まれているんだけど。

比奈人の速度についていけるのは流石。

しかし、人間は人間。仙士と戦うには圧倒的に不利。

情けないけど私も一人では勝てる気がしない。

だから、私が援護しないと。

「困」

佳乃さんを打たない様に、集中集中。

燕舞は比奈人だけを狙い、四方から風を唸らせて襲い掛かる。

それら全てを避けきるのはどんなに強い仙士でも無理。

いくつ打ったのかは分からないが、その内の数発には手応えがあった。

その証拠に比奈人の服にはいくつつかのほつれが見える。

それは佳乃さんにも言える。

蒼空乃極を持っていた事による強化は限界を迎えようとしている。

「どうやら門は破られたようだな」

後を振り返る。

後からは黒煙が上がり、戦意を上げる鬨の音が地響きの様に轟いている。

「意外に……遅かったな」

苦しそうに呟く。

「あの白亜って言ったか、そいつの踏ん張ってたのか」
遠くを望む。

その白亜って方が踏ん張っていたのに突破された。

それが意味するのは、

「前方には俺。後方には楽。進むも退くも結果は同じ」
薙刀を構え、

「ここいらで幕を引こう」

冷徹な眼差しのまま突進してくる。

神様はいるのかもしれない。

比奈人の突進を止めたのは、楽の軍服を纏った男。

「向かってくる者だけ相手しろ！」

跋維の兵が色めき立つが、向かっていたのは制羽の一部。

それ以外は武器を捨て戦意が無い事を表した。

「彼には俺も貸しがある。それを返すまで誰にも負けて欲しくないのだ」

「未麻中佐。か」

「俺に勝ったんだから、そんな顔するな」

バイクを降り槍を構える。

「ここからは俺が相手しよう」

「それは構わんが」

「止せ。そいつは人間じゃないんだぞ！」

「だからどうした？ 強くなれるのなら構わんが」

「出来るかな？ お前に」

比奈人の攻撃を捌いていく。

しかし徐々にその速さは増していく。

余裕の顔の比奈人。

対する未麻中佐は次第に劣勢に押されていく。

「中佐っ！」

更にバイクに乗った楽兵が割ってはいる。

今度は女性。

バイクを飛び降り、そのまま比奈人に向かっていく。

「随分と、血の気の多い」

二対一。

私が見ても鮮やかで力強い二槍。

だが、相手が悪い。余裕の表情で突閃を捌いている。

「比奈人が攻勢に転じたら行くぞ」

そつと耳打ち。

私は頷いてそれに答える。

決戦 17

ビルの階段を駆け上がる。

エレベーターを使う相手に追いつくにはこれ、と歩来の言葉に従ったが、

意外に疲れる。

「これしきで息上げてる場合じゃ無いでしょ？」

「確かに」

駆け上ったら戦闘が待ってる。

ウォーミングアップだと思えば、少しは楽になるかも。

五階と書かれたフロアに到着。

歩来が扉を開ける。

そこには倒れた兵と見下ろす二人がいた。

「速かったな」

才蔵がこちらを向く。

「懐かしい顔だな」

歩来は答えずに剣を抜く。

ひゅんひゅん、と風を切る。

「剣を」

隣に立つ男から剣を取り、そこで初めて風が止んだ。

「今の内に礼儀を」

「ああ」

倒れた兵の剣を持って奥に進む。

「史紀!!!」

言われなくても！

箒星は才蔵の横を抜け男に向かう。

筈だった。

歩来の剣を外し、箒星を打ち払う。

壁に叩きつけられる箒星。

「そんな事で止められると思うなよ！」

遠隔で動かせるのはこういった時の為でもあるんだ。

落ちた筈星がかたかたと動いて地を這い男を捕らえる。

「やれやれ。手間を掛けさせてくれる」

「なら大人しくっ！」

「する訳無いだろう」

ボクの動きを読んで後ろに飛ぶ。

突き出した拳は空を切り、ボクは歩来の前に着地する。

「こんな事をして仙界が黙っているとでも思っているの？」

「さあ？」

歩来の言葉にとぼける才蔵。

「仙界は関係、うぶ」

口を塞がれる。

「五仙だけじゃなく、冥仙も黙っては無いわよ」

沈黙。

「何がしたい。目的はなんだ？」

歩来の声に才蔵は、

「解放だな」

はあ？

「仙界のエゴで振り回される人間界を解放するんだ。その為には荒れていった方がやりやすいだろう」

薄っすら笑っているのが腹立つ。

「戦渦を広げ、それを収める英雄を作り出す」

「それをうらから操ろうと言うのか」

「少し違うな。英雄に力を貸した仙人として俺達はここに残り、人間でも扱える仙具を与える」

「そんな事したら内乱では収まらずに他国にも戦渦は広がるぞ」

「それも計画の内さ。そんな事になれば仙界は黙ってないだろう。君を派遣した様に」

ふふ、と笑う才蔵。

「戦渦に喘ぐ民達が見た事も無い武器を持った仙人をみればどうなるかな？」

「それは」

何？ ボクにはわかんないので歩来を見る。

「まさかつ！ そんな事になれば」

「仙人に攻撃を掛ける、と考えるのが普通だろ」

「ただの人間が仙人に勝てる訳無いじゃん」

「その為に仙具を与えるし肉体強化も施すさ」

「仙界と人間界との間に戦争を起こす気か」

「そう言っているだろう。これは自由を勝ち取る為の戦争だ」

「その為に風仙界に来て、師匠を殺し蒼空乃極を奪ったのか？」

「そうだ。あの時の仙士達には悪いことしたと思うが蒼空乃極だったのは前にその力を見ていたからって言うのが理由だな。それに人間が仙士に勝てないと決め付けるのは良くないな。その可能性を照明した人間がいる」

「佳乃か」

「ああ。あいつは人間が仙具を使える事を証明した。もう少し仙具の力を落とせば充分に仙士と戦えるし強化すれば佳乃クラスの兵はすぐに万の単位で集まるし実戦投入出来る」

「考えを改める気は？」

「無いな。君こそ俺達に協力する気は？」

「ある訳無いでしょ！！！」

歩来が答える前にボクが飛び出す。

箒星はしっかりと装着している。一撃を受け止める寸前できゅっと足を滑らせて後に回り込む。

無防備だと思ったがさかさず反転してパンチを防がれる。

二発目は剣で受け止められる。

「いい物だろう？ これが今話した仙具だ」

「それがどうしたっ！」

武器を狙う。

思いつきり剣を殴った。

きいいん、と涼やかな音が響く。

「な」

才蔵のにやけた顔に腹立ったが、

「この剣があれば仙士と互角に戦える事を証明しよう」

実験に使われた。その怒りで頭が真っ白になる。

「後は肉体強化の問題だけだ。それが整えば俺の目的は達成される」

「それを見過ごす仙界だと思っのか？」

「はは。動けないさ。例え動いたとしても少数。それなら相手にはならない」

歩来が攻撃に入る。

意識が向こうに行った瞬間、

「おっと」

ボクも参加する。

「例え精鋭相手でも関係ないな。仙界がこの事に気付くまでに兵の数は揃えるつもりだから。それに俺達の相手を出来るのは歩来。最低でも君レベルは必要だ」

この、ボクは眼中に無いってのか？

実力差を改めて思い知らされるな……悔しいけど。才蔵は歩来に集中している。

ボクの攻撃は歩来への対応の惰性でしている様だ。

全ての攻撃は紙一重で避けられても反撃は無い。

響く剣戟は全て歩来との打ち合い。

……。

落ち着け。

冷静に。

すっと距離を開けて、呼吸を整える。

「もう終わりか？」

からかう調子の声。

乗るな。頭に上った熱を下げよう。

才蔵と目が合う。歩来を相手にしていてもこの余裕がある。実力差は分かりきった事。それを今更嘆いても悔やんでもしょうがない。

今、最善を尽くす。この時の為にボクはここに来たんだから。ふうー、と息を吐いて深呼吸をする。

まるで場違いだと思っただが、頭の熱は下がり、心は涼やかになった。「参る」

呟く。

体は軽い。

才蔵は先程と同じ様に歩来に意識を集中している。

後から、とは卑怯だと思っただがそうも言ってもらえないし隙を見せる方が悪い。

「突風とつふうっ！！」

力強く踏み込んで箒星を突き出す。

打ち合ったのは歩来の剣。

「危ないな。流石は比奈人に怪我を負わせただけの事はあるかな」
壁際に逃れた才蔵を追う。

今度は左右。

歩来の剣を避け、ボクの箒星を剣で弾いて前へ。

そのまま奥へと走り去る。

背中を向けたのなら、

「行けっ！」

箒星を撃ち、追いかける。

「君も同じ事を繰り返すな」

箒星を打ち払う。その打ち落とされた箒星の後方から飛び掛る。

「同じ戦い方が通用するとは思わない事だ」

「お前もな」

才蔵の剣が切り返すより速く箒星が腕を弾く。

それで軌道が変わり、ボクのパンチが才蔵の顔にヒット。

「まず一発」

振りぬいた右腕にはしつかりとした感触が残っている。

才蔵はそのまま倒れこみ、ボクはその姿を見下ろす。

「史紀」

「立つかそのまま殴りたいか、好きな方を選ぶ」

余裕を見せる気など無い。

このまま攻めればやられる、と本能と言うか第六感というかそんな感じの直感が危険を伝えているので強がりな余裕を見せなきゃいけない。

「ふふ、殴られたのは久しぶりだな」

倒れたままこつちを見る才蔵。

ゆっくりと立ち上がる。

「君の兄弟子やあの時の仙士にも直接触れられてなかったんだ」

「それがどうした？」

「安い挑発でどうにかなると思ってるの？」

「いや、打てる手は打つのが俺のやり方だ。しかし無駄だった様だ。彼女の心は一切ぶれないな」

「その程度で心が乱れるのは過去を変えられと思ってる奴じゃないのか、ボクはお前をぶっ飛ばしても過去は変わらない事は分かっている」

「ははは、そうかもな。君は強いな」

立ち上がった才蔵は先程と変わらずに悠然と立っている。

「じゃ、やるか」

才蔵が目の前に現れた！？

屈むだけで精一杯。

「かはっ」

顔をガードしたけど衝撃はそれを越えて伝わる。

「史紀！？」

歩来の声と同時に金属音と風を切る音が聞こえる。

「どうって事ない！」

口の中に味わいたくない味が広がるがそれを少し吐き出して、後

から攻める。

今度はボクにも注意を向けている。

違うのはもう一つ。攻めてこない。防戦に徹している。

攻撃の隙を狙っているのは明らかなので、一撃が軽くなり防がれる。それが慣れとまらない様に集中。どちらが先に集中を切らすかが勝負の分かれ目か。

意外な人物の行動で拮抗は崩れる。

「く、ここで」

倒れていた制羽がよろよると動き出す。

「この、扉の……向こうに」

立ち上がり、倒れている兵の剣を杖に前に進みだす。

「私が、私が、王に」

「どうする？」

視界の端に動きを捉えてはいるが、対応は出来ずにいる。少しでも気を抜けばその後はどうなるか位アホでも分かる。

「これで、こちらの思うとおりに事は進む」

「それはどうかな？」

扉が開いた。

中から出てきたのは、礼儀と思しき人物一人。

手には剣。顔は戦場には似合わない微笑を浮かべている。

「礼儀。貴様が」

「制羽。君の目論見はここで終わりだ」

「れ、い」

お互いの剣は躊躇い無く振り払われる。

崩れ落ちる制羽。

しかし制羽の剣も礼儀を貫いている。

「やれやれ。これでは計画は遅れるな」

「そうだな。ここで潰える」

一瞬の隙。ボクも才蔵も二人の人間に意識がいった瞬間に、

「こほっ」

その声で目を才蔵に戻すと、歩来の剣が才蔵の腹を貫いていた。才蔵は血を撒き散らして反撃しボクの攻撃を払い、歩来の剣を打ち付ける。

その衝撃で僅かに才蔵との距離が開く。

「悪いが……次を探さなきゃいけないようになったんで」

そのまま廊下に赤い雫を垂らしながら駆けて行く。

「逃がすかつ！」

ボクは才蔵を追い掛ける。

「歩来、礼儀を任せた！！」

「おい、ちよつと……ああ、もう！！」

歩来の声を背中で聞いて才蔵の背中を追う。

決戦 18

階段を駆け上がり、開いた扉が閉じる前に飛び込む。

「はぁ……はぁ」

飛び込んだ先は屋上。

これでこのビルを踏破した事になる。

「もう、逃げ場は無いぞ」

「しつこいな。……まったく」

「当然だ。お前をボコボコにする事を目的にここまで来たんだぞ？」

「ご苦労な事だ。それも、出来もしない事に」

「それは今からやるさ」

ぼん、と箒星を叩く。

「一人で出来るかな？」

「充分だ」

才蔵の目に大怪我しているとは思えない殺気が籠る。

歩来と二人で戦ってた時は二人でこのプレッシャーに向かっていたんだな。

でも今は一人。正面からその殺気を受ける。覚悟はとうに決めている。

「君の旅はここで終わる」

才蔵が飛ぶ。

箒星を前に剣を防ぎ、赤く染まった左脇腹を狙い蹴り上げる。

ボクの蹴りを防いで、そのままパンチを打って来る。

右に飛んで避けて至近距離から箒星を撃つ。

「がはっ」

距離は五十センチも開いてなかったのに、直撃を外された。

それでも右肩には当たった。

この機を逃さない。

離れずに僕の射程で突きを乱打。

箒星を受けた衝撃と崩れた体勢なのに、半数は防がれた。

「か……はあ」

息を吐き出した瞬間。

「じっ」

左肩に痛みが走る。

剣の根元がボクの肩に食い込んでいる。

「これ位で」

箒星が舞い戻り、剣を狙うが読まれていた。

才蔵が離れ、箒星が装着される瞬間に才蔵が再び接近。

剣を受け、今度は攻める暇が無い。

切っ先に集中して防御に徹するがそれでも避けきれない。

服が切れ痛みが増し傷が増えていく。

それでも意識は切っ先に。才蔵に。

呼吸を読み、風を呼んで、ようやく受け止める事が出来た。

右手で刃を掴み、握り締める、

ぽたぽたと伝い落ちる血。

才蔵は剣を引こうとする瞬間に剣を放し、ボクも距離を詰める。

攻守逆転。とは行かなかったが攻め手はボクの方が多い。

右肩の負傷と出血が響いているのか剣閃が鈍くなっている。

余裕は見せない。

才蔵の右腕に絡み付こうとして、才蔵が本能的に右腕を引いた瞬間

に左肘に絡んで

「纏風」

比奈人に掛けた関節技を決める。

みしつと音を立てる確かな手応えを感じ、左手を引っ張りそのまま

首元に箒星を装着したまま左ストレートを打ち抜く。

これでたつたらコイツは不死身だ。

……倒れたままの才蔵。

微かに息はしているが起き上がる暇は無い。

「史紀っ！」

歩来がやって来る。

立っているボクと倒れた才蔵を見て、

「大丈夫!!！」

駆け寄ってきて背中をバンバンと叩いてくる。

「はは、痛いよ」

「良かった。生きてる」

「当然だ。ボクが負ける訳無い」

才蔵を見下ろし、

「才蔵。君を冥仙に連行する」

武器を取り上げ、ボクから少し離れてどこかに連絡をする。

そして、柵から身を乗り出し、

「比奈人おー!!!!!! 才蔵は捕らえたぞおー!!!!!!」

才蔵の剣を下に投げつける。

そっぴや下にいたな。あいつ。

決戦 19

空から降ってきた剣。それに才蔵が敗れた、と言う声。

「マジかよ」

比奈人は薙刀を放り出して両手を挙げる。

「負けだ」

両軍の勇士四人は顔を見合わせる。

「騙そうとはしてないぞ」

戦意は感じられない。

「なんなら、その鞭で縛ってくれてもいいぞ」

「そうしてくれるかな？」

「あ、はい」

「……冗談だったんだけど」

比奈人の呟きを聞機ながら後ろ手に燕舞を巻きつける。

「楽軍の諸君。われ等にこれ以上の戦闘の意思は無い」

「それは降伏と受け取っても構わないのかな？ 將軍」

振り返ると、初老と言っては失礼かな？ な軍人と確か、その横にいるのは、

「伯明王子と」

佳乃さんは軍人の隣にいる男性の名前を挙げた。

「私は姫辰。貴官の勇名は我が軍にとつては畏怖の対象だよ」

「それは我が方にとつても同じですよ」

王子、と呼んだ方に近づいて、跪く。

「王子。我が党首に会っていただきたい」

「そのつもりでここまで着ました。案内を頼めますか？」

「は」

佳乃を先頭に姫辰、と傷ついた男女の勇士が続く。

「他の者はここで待つように」

姫辰の声に敬礼で答える兵たち。

「あの、私……は」
とりあえずあの二人の事が心配で、聞いてみる。
「御同行願います」
佳乃さんの声に安心して、最後尾からついていく。

屋上にはどこから現れたのか、冥仙の連中が才蔵の手当てと捕縛を行っていた、それを眺めていると、
「無事でしたか？」

扉の向こうから理緒の声が聞こえた。
影から現れた理緒。その手には鞭。その先には比奈人が。
「見れば分かるだろう？」

「良かった」
へなへなと座り込んでしまう。
「おい。お前が大丈夫か？」
歩来の苦笑。

「はい。何とか」
「それは良かった」
「お。史紀ちゃんからそんな言葉が聞けるとは」
理緒は上目遣いでボクを見る。

「う、うるさいな。それよりも比奈人を渡したらどうだ!？」
「あ。そうだ。引き取るよ」
「あっさりしてるな」

比奈人はそれでも笑っている。
何が可笑しいんだ？
理解に苦しむつてのはこういう事か。

「じゃ。私達はこのまま冥仙に戻るよ」
「そう」
「名残惜しいですね」

「史紀、理緒。君達のおかげで捕らえる事が出来た。感謝している」
握手しながら言われる。

思わず目を逸らしてしまう。

「テシる事無いだろう」

うふふ、と笑う歩来。

「うるさい。さっさと帰れ！」

「も〜。心にも無い事言ってえ〜」

「お前もうるさい!」

「あ痛」

理緒の頭を叩く。

「あはは、仲良くやれよ。またな」

笑い声を残して歩来はビルの中に消えていく。

静かな屋上に理緒を二人。

ぼんやりと空を眺めている。

「終わりましたね」

「ん」

ゆっくりと流れる雲が日を遮る。

「これからどうしますか」

理緒の声にちょっと寂しさを感じる。

才蔵を追う旅に理緒を引き連れた。

その目的も達したし、これ以上理緒を引っ張りまわす理由はない。

理緒がボクの顔を覗き込んでいるのが分かる。

「とりあえず、お腹空いた。どっかでご飯食べながら考えよう」

理緒の手を引いて立ち上がる。

「そうですね。何食べに行きましょうか？」

嬉しそうな理緒の声。

太陽を覆っていた雲はいつの間にか流れ、再び照らす日差し。

今日もいい天気だ。

「美味しい物に決まってるだろう」

「ですよね」

階段を下りる足取りが軽い。

「ほら、早く来い。置いて行くぞ」

「ちよっと待って下さい」

駆け抜けるボク達の足音が心地よく響く。

決めた。

もう少し、理緒を引っ張りまわそう。

「理緒」

「なんですか？」

肩で息をしている理緒に、

「海、見に行こう」

それだけ言ってまた階段を駆け下りる。

旅の続き

ボク達はようやく海に辿り着いた。

由宇に会ったり、佳奈に車を返したりとしていたら螢送での戦いから一ヶ月経っていた。

肩を並べて、海からの風に吹かれ光を反射する波をぼんやりと時を過ごす。

跋維党による反乱は一気に終息に向かい、今は治安回復や施設の修復にあちこちで軍やボランティアが忙しく動いている。

終息の要因は、終結直後の礼儀の死と佳乃の国外追放。

「最善を尽くしてくれた事は分かっている。跋維を立ち上げた時から死は覚悟している。礼儀の死は君達の責任ではない」

と、最後に会った時に言ってくれたがそれで済む訳が無い。

その痛みも心に刻んで進んでいこう。

佳乃も死を望んだが、死の間際の礼儀や佳乃の部隊、螢送市民を中心とした跋維支配下にあった市民達の嘆願で極刑を免れた。

それで国外追放。それも永久に。

今頃何処で何をしているのやら。

その他の跋維の奴等は軍に再編されたり、盗賊に戻って成敗されたりと大忙しに世間を賑わしている。

「ふふ」

「どうしました？」

不意に笑ってしまったボクを覗き込む理緒。

「いや。なんでもない」

師匠達の事があって風仙界を飛び出したボクを詩月はこんな気持ちでいたのかな。

そう考えたら笑ってしまった。

「？」

きよとん、とする理緒。

「こんなトコにいたのか」

振り返れば歩来が仁王立ちしている。

「なんで？」

「なんでって。ようやく見つけたのにそれだけ？」

「いや。事後処理で忙しいんじゃないんですか？」

「ああ。その為に言ったり来たりだ。まったく面倒な事この上ない」

「ホントは外されたんじゃないの？」

「そんな事言うのはこの口か！？」

ぎゅう、と頬をつねられる。

「痛たたた。じゃ、なんだよ」

「才蔵が関わっていた施設の破壊と人員の確保が任務なんだよ」

「じゃ、さつさと捕まえればいいじゃない。ほら、早く」

「捕まえて来たところだよ。で、ちよつと時間が空いたから」

「だから、わざわざ来たのか？ 暇人め」

「お互い様じゃない。それは」

「ですね」

三人肩を並べて視線は海へ。

「海って何処まで続いているんでしょうか？」

深い意味の無い理緒の言葉。

「どこって……大陸の反対側じゃないの」

「夢が無いな。史紀ちゃんはっ！」

頭をぐりぐりされる。正直、ムカつく。

「夢って……常識だろう。じゃ、歩来は何処まで続いているって言うんだ？」

「それは」

「それは？」

考えて、

「どこまでもどこまでも」

立ち上がりビシッと指差す。

何も思いつかなかったのだろう。

「面白くない」

「いや。笑わせようとした訳じゃ」

「と言うわりには顔が赤いようだけど」

「え、へへ」

「じゃ、確かめに行くか」

「どこへ？」

ボクの指は海の向こうを指差す。

「どうする？」

「いいですね」

理緒と二人車に向かって走り出す。

「私は任務があるからな。あ、そうだ」

歩来はポケットからケータイを取り出し、

「持ってけ」

「いいよ。お金掛かるし」

「いいから。あると便利だぞ」

放り投げるのでキャッチする。

「なんかあったら連絡してくれ」

「これが連絡先だろ」

「新しいのを手に入れたら連絡するから」

「分かった」

ただでくれると言うのだから断る理由は無いのでありがたく頂戴する。

「またどこかで会えるといいですね」

「そうだな」

車に乗り込むと理緒は寂しげにそう呟いた。

走り出した車のミラーには小さくなる歩来が映っている。

「何かあるのか楽しみですね」

理緒は海の向こうに思いを馳せる。

「面倒な事は嫌だな」

「まあ、楽しいだけじゃつまらないですよ」

なんとなく納得してしまっ一言。

「手に負える範囲なら歓迎だな」

「ま、そんな都合良く行きませんよ」

あははは、と笑う理緒。

物騒な言葉とは裏腹に、雲間から射す日差しが道を照らす。

辺りに車はなく快適なドライブが続く。

理緒の鼻歌と波の音が耳に心地よい。徐々に瞼が下りてくる。

「理緒。港に着いたら起こして」

「いいですけど……」

どことなく歯切れが悪い。

「港ってどこですか？」

夢の世界に入る直前にそんな言葉を聞いた。

「あとがき」

いかがでしたでしょうか？

僕としては楽しんでいただければ幸いです。

ここまでお読みいただきありがとうございます。

2008年

9月 悟

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4985e/>

En-gi

2010年10月9日21時28分発行